

戦姫と魔人の永劫破壊

檜山俊英

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今作は黒円卓に存在しない筈の番外騎士が戦姫絶唱シンフォギアの世界で暴れ回るお話です。

オリ設定、独自解釈、駄文、原作崩壊などの要素を含むため、「あ、無理。」と感じられた方はブラウザバックをお願いします。

また、作者はDies irae、戦姫絶唱シンフォギア両作共にニワカであるため、原作設定と矛盾する点は可能な限り修正したいと思っています。ご指摘よろしくお願います。

Twitterと連携させてみました。

▶ <https://twitter.com/KDdBbOTrea8V8J8?t=k8HTJfkoB|eHtoVREdXWvA&s=09>

目次

Prologue〈1〉 魔人の降り立つ

地 | 1

Prologue〈2〉 魔人と戦姫の邂逅

近 | 7

Prologue〈3〉 暴かれる永劫

14

第一話 覚醒する激槍、蠢動する魔劍

20

第二話 激槍、魔劍、夜闇に邂逅す

27

第三話 揺らぐ立ち位置

第四話 胸の奥にあるモノ

第五話 戦姫と魔人の夜中行脚 | 57

閑話 いつか辿り着くべき場所 | 66

第六話 向けられた悪意 | 70

第七話 滴る雫、深まる後悔 | 82

第八話 戦姫の見た夜明け | 96

第九話 霧中暗索 | 105

第十話 望まれざる力 | 118

第十一話 完全聖遺物 | 130

第十二話 三者三様の祈り | 140

第十三話 兆しの行方は | 150

第十四話 末路 | 165

第十五話 ヒトならざるが故に | 181

第十六話 罪のカタチは | 191

第十七話 揺れ動く白 | 201

第十八話 贖罪の一步 | 217

第十九話 幕の裏側にて | 232

第二十話 夢と祈りと | 245

第二十一話 夢を見る | 260

第二十二話 手を繋ぎ、繋がれること

272

第二十三話 減りゆくモノの中で

289

第二十四話 繋がる祈り | 304

第二十五話 夢から醒めて | 322

第二十六話 夜明けの旋律 | 340

第二十七話 永劫を凌駕する刹那

Prologue <1> 魔人の降り立つ地

side???

目を開けるとそこは死地でした。

などと考える。周囲は炭の残りカスだらけだが、この現象がなんなのか、考えてみる。

まあ…

周りのブヨブヨしたカラフルモンスターが原因なのはわかる。こいつら以外に動いてる物体がないのだから、そういうものなのだろう。

直感でわかる。 “コレ” は私を殺しに来ている。

だが、

「たぶん…意味ないんだよな…」

己の中に力を感じる。

あの魔剣は私の中に未だ健在らしい。

忌々しくもあり、ほんの少しだけ、嬉しくもあり。

しかし先程からあの「女神」の影響を感じない。

しかも「座」が空白のように感じる。

座が空白になるのはメルクリウス性格最悪野郎曰くまだ誰も座に到達していない場合のみだ。

Dies irae 時空
あの世界においてそんな事は有り得ない。

ならば…

すると槍のような形態に変化したカラフルモンスター達が私に向けて突き進んで来

る。もう少し考える時間が欲しかったなあ！

私に近づいた瞬間、モンスターは炭化し崩れ去る。

恐らく、この“兵器”の自壊機能に相当するものだろう。

私の魔剣、もとい私自身がそういう機能を誘発してしまう特性を持っている。

すると、今まで感じたことの無いエネルギーを感じた。

そのエネルギーに包まれたモンスターが途端に鮮明になった気がした。

なるほど、私の魔剣が何らかの防壁を貫通していたが元々はもう少し固い兵器なのだろう。

なら、私は静かに去っておこう。

今モンスターを倒している少女は黒円卓のようなぶつ飛んだ連中の集まりなどなければ政府機関所属の筈だ。

その時私の格好が非常にマズイ。

第二次大戦中のドイツ軍服など、危険人物ルート直行の服装だ。

私は何故か訪れた3度目の人生に思いを馳せながら、人生の幸運と不運が同時に訪れた私は、この世の不条理を嘆いた。

side 特務対策機動部二課

「叔父様、先程の女性は？」

「エネルギー波形は捉えられている。しかし…」

「こちらの監視網に気づいてるみたいなのよねん。監視カメラ越しにこちらを見ているし。」

「機械越しにこちらの視線に気づいた…という事ですか？」

「ああ…特異なエネルギー波形、奇妙な服装、謎の多い人物だが…照合の結果は？」

「顔認証にヒットはありませんが…服装についてはビンゴです。コレは…」

オペレーターは顔を曇らせる、言いづらいようだが、それでも口を開く。

「第二次大戦中のドイツ軍の特務軍服です。」

「なんだと？もう100年近く前の代物が何故この時代に…」

赤髪の男は唸りながら考えるが、答えは出ない。

すると近くに座る研究者然とした女性が疑問の一片に答える。

「弦十郎くん。例のエネルギー波形だけドアフヴァアツヘン波形に類似する物だったわ。」

「つまり聖遺物だと？」

「それが彼女から恒常的に発生しているエネルギー波形の源、ということでしょうね…」

「うむ…では、俺が直接出向こう。その方が交渉もしやすいだろうからな…今の彼女の正確な位置は？」

「ここから4 km程先の路地裏です。ここに入ってからどの監視カメラにも映っていないので、推測になります…」

「十分だ。行ってくる。」

魔人との邂逅は近い。

Prologue <2> 魔人と戦姫の邂逅

side???

「それで…私にどんなご用向きが？」

「質問がある。『聖遺物』という言葉に聞き覚えは？」

「聖遺物、と聞くとやはり最も最初に思い浮かぶのは水銀クス野郎だが…奴の関係者特有の、即ち永劫破壊被術者特有の狂気を目の前の赤髪の人物からは感じない。なら答えるべきは…」

「……そうですね。ありますよ。」

「認めるんだな…てつきりしらを切るものと…」

「極力嘘はつかない主義なんですよ。」

この言葉にも嘘は無い。

私の渴望はれつきとした霸道だが、自分が変わるなら変わろうかな、程度の心持ちはある。

つまりはその時の気分次第であり、私が前世(?)で形成位階までしか到達出来なかった不安定さの所以なのだろう。

「そうか…では、君は聖遺物を所持しているのか?」

続く赤髪の男からの質問、だが…

中々に答えづらい質問が来たなあ…

というのが私の本音だった。

目の前の人物は力に溺れるように見えないが、永劫破壊の存在を知ってそれを利用しようなどと考える輩が現れてもおかしくない。

だが永劫破壊はれつきとした外法だ。完全に倫理を忘れた狂人共のための力だ。というか狂人でなければ聖遺物に食われてお陀仏なのだ。

この質問の答え方次第でなし崩し的に永劫破壊の情報を渡すという展開も有り得てしまう故にこちらも慎重にならざるを得ないが…

「もし『持っている』と言ったら私はどうなりますか？」

「俺の組織で保護ということになるだろうな。」

「私の事を上司に話しましたか？」

「いいや？まだだ。」

そうか…なら、

「なら私の答えは『持っている』なのですが、少し事情がややこしいので『そちらの本部』でお話させて頂いても？」

「…！ああ、わかった。ついてきてくれ。」

車に案内され、乗り込む。

やはり政府機関なのか車の性能が高い。

「そういえば、君の名前は？」

「名前を聞くななら先に名乗っていただけると。」

「ああ、すまん。俺は風鳴弦十郎だ。」

「私の名前はアイムート・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼンです。長いのでキル

ヒアイゼンでもアイムートでもお好きな方でどうぞ。」

「では、アイムート君、君はやはりドイツの生まれなのか？」

やはり？ということは…ああ、そういう事か。

「ああ、もうこの服の出自にたどり着いたんですね。年代特定を避けるために腕章を外していたんですが…優秀な組織のようですね。そうですよ。私はドイツ系貴族の生まれなんです。」

「年代特定ということは…ストップ。続きは着いてからにしましょう。」…わかった。」

そうして、車に揺られたどり着いたのは…

「学校…ですか？この建物は。」

「私立リディアン音楽院高等科だ。そして俺たちの本部はこの地下にある。」

「なるほど…」

であるならばこの学校も政府の息がかかっているのだろうか…すると先程の少女が、歌を歌っていたことに何か関係があるのだろうか。ここは音楽院、音楽の学校なのだから。

生徒達のない職員棟を通り、エレベーターに乗る。

物凄い速度で下に下がるが…姉さんに引きづり回された時よりは圧倒的にマシと考えると途端に楽になった。

そしてエレベーターシャフトを見てみるのだが…

「絵画？」

虹色に彩られたシャフトの内壁を見て、ふと出てきた言葉だった。

そして、エレベーターが止まる。

廊下を歩き、弦十郎が一つの扉の前で止まった。

扉が開き、弦十郎に連れられて中に入ると、途端にクラッカーの洗礼を受けた。

へアイムートさん、人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へようこそ！

という横断幕がある。

…なんだこれは？

私は困惑のまま、目を瞑って見なかったことにした。

遂に魔人と戦姫が邂逅する。

P r o l o g u e 〈3〉 暴かれる永劫

s i d e アイムート

何故私は歓待を受けているのだろうか。

と現実逃避気味に考えた私を許して欲しい。

私はあくまで警戒すべき相手の筈なのだが…

「あつたかいものどうぞ。」

「あ、はい。あつたかいものどうぞも…」

このように飲み物を手渡されたり、先程は写真撮影を求められたりした。

うむ、訳が分からぬ。

まあ、上司と同じく悪い人ではないのだろうな、と思いはしたが。

「アイムート君。話してもらえないか？君が何者なのか。」

「そうですね…言うなれば『魔人』でしょうか。」

私は少しづつ話すことにした。

「魔人？」

「はい。聖遺物と肉体的、靈的に完全な融合を果たした元人間、のことですね。」

「そんな事が…？」

「納得していただく前に、そこにいる青い髪の彼女。彼女が聖遺物を纏っていた仕組みについて概要を説明して頂けませんか？」

「ん…？どうしてだ？」

「恐らくですが、我々の『聖遺物』の認識に齟齬があるのではないかと思ひまして。」

実際は、彼らの言う聖遺物と私の考える聖遺物は違うものだろう。というのは殆ど確信している事だ。

「…わかった。了子君。」

「はい！じゃあ私の提唱した桜井理論について説明するわよん。」

そこから話されたのは、音波の特定振幅、即ち歌の力『フォニックゲイン』で起動する古代のオーパーツ、それが聖遺物であり、先程ツーショットを求めてきた研究者然とした服装の女性『桜井了子』の提唱した理論に基づき、聖遺物の欠片を鎧として再構築

した物、それが青い髪の彼女が纏っていた“シンフォギア”なのだそうだ。

「なら今度はこちらの番…ですね。」

「私は永劫破壊エイウイヒカイトという魔術を受け魔人になりました。」

「魔術？」

「こちら風と言うなら異端技術の体系の一つですね。そして魔人になるために必要なのは“渴望”です。他を凌駕する圧倒的な、ソレが必要なんです。」

「渴望…か。ちなみにソレ無しでその、“永劫破壊”を扱おうとすれば、どうなるんだ？」

まあ…聞かない訳には行かないのだろうか…まあ、正直に答えよう。

「融合の前段階で聖遺物に喰われて死にます。」

「なっ！」

「ここで私の聖遺物に対する認識をお話しておきますが…私の考える聖遺物とは、善悪を問わず神性と固有の意思を持つ物」です。文字通りの神聖さでも、畏怖を伴う圧倒的な暴力性でも構わない。そういう物なんです。」

「我々の知る聖遺物と全く違う概念だな…」

弦十郎も困惑している。まあそりやそうだ。字義通り違う世界の話をされて着いてこれる方がおかしい。

「では…では君の聖遺物はなんなのだ？」

弦十郎の質問に一瞬答えるか迷ったが、素直に答えることにした。

「北欧神話に出てくる武装の一つ『テイルファイニンググライル連怨・共喰の呪剣』。出力を誤れば、敵より先に仲間を殺すいわく付きの魔剣ですよ。」

「君は……」

弦十郎がこちらを見ているが……そのような目で見られる程私はまだ擦り切れてない。人を殺すのだから、今でも出来ればしたくない。

ただ……活動位階の状態だからまだ「渇き」が来ないが……元々私の聖遺物は大食らいだ。この世界に来て、魂のストックがかなり減ってしまった。

「権利」を消費すれば剣が私を殺してくれるとは言え……

それは最後の手段にしたい。別に自殺願望がある訳では無いのだ。

その日が遠くなることを心の中で祈った。

金の魔人と蒼の戦姫は出会った。

舞台はこれより一年の後に移る。

第一話 覚醒する激槍、蠢動する魔剣

sideアームト

突如警告音声が響き渡る。

微睡んでいた意識が急速に覚醒し、頭がクリアになる。

「……ノイズか……」

私が特異災害対策機動部二課に訪れたあの日から一年と少し経った。今、私は対ノイズの戦闘員として二課に所属している。

司令……弦十郎が矢継ぎ早に指示を出す。優秀な二課のオペレーター達だ。即座にノイズの位置が特定された。

「アイムート君。頼む。」

「了解。翼が来るまでもたせる。」

私はそう言つて司令室から飛び出し、エレベーターを使って地上へ。そのまま隠し倉庫に保管されたバイクに乗り込み、走り出す。

この一年でわかつた事は多かつた。

まず、ノイズは私に近寄つた途端自滅する。これが確定したこと。連怨・共喰の魔劍ティールファイニング・グレイルの特性「死の誘引」が元々短いノイズの寿命を急速に縮め突っ込んできた瞬間自滅する。というのが私と二課（厳密には桜井了子）の見解だつた。

ついでに私の物理攻撃もノイズには通るようだつた。

これは永劫破壊エイグイビカイトによつて私自身が聖遺物と化しているから、なのだそうなの。

他には…と思つたところで現場が見えてきた。

「こちらアイムート。現着。ノイズの排除を開始する。」

「目はない。全力でやってくれ。」

なるほど、電子物理共に監視はないと…ありがたい。

「了解。」

通信をONにして追加情報を逐次得られるようにしつつ、ノイズに突撃。目前の人型に拳を叩き込みつつ周囲のノイズを自壊させていく。

暫くして気づいた。

「コンビナートにノイズが流れてる…？」

こちらに相対する数が減り、コンビナート方面にノイズが移動していた。

「司令。翼をコンビナート方面に向かわせて。そこでノイズ殲滅を引き継がせるから。私は生存者がいると仮定して動く。」

「わかった！」

何故かは分からないが、確信があつた。

今日、“ナニカ”が動く。

side 立花響

私は、小さい女の子を連れて走っていた。

憧れのアイドル、風鳴翼さんのCD。その初回特典を求めCDショップに向かう道すがら私はノイズと遭遇した。

認定特異災害 “ノイズ”

迎撃、討滅共に不可。一度現れれば自壊するまで祈りながら待つしかない、人類の天敵。

それでも…

コンビナートまで逃げ込み、梯子を登ってここまで逃げて来た。

ノイズがゆっくりと追ってくる。

それでも…

ここで死ぬ訳には行かない。

あの人
天羽奏に貰った、命だから！

女の子と自分に対する言葉。あの日、貰った言葉。

「生きるのを諦めないでツツツ!!!」

Balw^喪isya^失ll^まne^でscel^のl^カgun^ウgnir^ンtron^トn^ダ

sidechange

「ノイズとは異なる、高エネルギー反応を感知!」

「照合急ぎます!」

「これってまさか…アウフヴァツヘン波形!?!」

Code Gungnir

「ガングニールだとお!？」

ソレを聞いた魔人は動乱の兆しを感じ取り、

ソレを見た戦姫は過去の憧憬傷の再来に驚愕の表情を浮かべた。

激槍は覚醒歌に応えたした、魔剣は蠢動舌なめずりしたした。

物語は、動き始める。

第二話 激槍、魔劍、夜闇に邂逅す

side 立花響

「えっ、うえええっ!?!…わたし、どうなっちゃってるの!?!」

胸に浮かんだ歌を歌うと、アニメのキャラクターのような鎧に早着替えしてしまっていた。

「お姉ちゃん、かつこいい!」

そうだ、私はこの子に言った。「生きるのを諦めないで」と。そしてこの子は生きようとしている。

私を頼りにしてくれる。その期待に応えたい!

繋いだこの手を、絶対に離さない！

女の子を抱きかかえてノイズから離れようとして…

「なにつ!? うわわわわあ!」

想定より飛んだ、飛べてしまった。

足場を見失い落下してしまう。

地面が近づく。

まだ死ねない。諦めない！

膝を曲げて衝撃の吸収を試みる。

が思った激痛は来ず、弱い痺れだけが残った。

鎧の力なのだろうか…？

でも、この力ならこのまま逃げ続ける事が…

嫌な予感がした。

再度跳躍。高所に懸架してあつたパイプにぶら下がる。

先程までいた場所を見るとノイズだらけになっていた。移動しなければ炭素転換で死んでいたと思うとゾツとする。

しかもずっとこのままでもいられない。

2年前、あの場所には飛行するノイズもいた。

両手が使えない今襲われるのはマズい。

パイプから手を離して一旦降りるが…

「お姉ちゃん！後ろ！」

近づいてくるノイズに気づき、反射的に拳を突き出してしまった。

気づいた時には後の祭り。

自分と女の子が炭素転換される未来を確信し：

しかしてそうはならなかった。

「わたしが、やっつけたの…?」

突き出した拳はノイズのみを炭化させ、自分と女の子は無事だったからだ。

混乱は続く、大型のノイズまで現れ、バイクのエンジン音が聞こえ、隣の地面が突如爆発した。

最初に思った「何故」という疑問は、続く恐怖に握りつぶされた。

周りのノイズが何もしてないのに一斉に炭化したからだ。喜ばしい事の筈なのに、恐れている私があった。

鎧に満ちていた力が喰われた感触があったからだ。

土煙が晴れると現れた魔人は軍服のような物を身に纏っていた。

「痛たたた…なんとか渴きは収まったけど…」

私にとってはノイズより怖かった。

sideアームト

突如生まれた力の波動を感じた私は、自分の聖遺物の食欲が増したのを感じた。

そして、猛烈な“渴き”に襲われた。

「ぐっ……！」

周りのノイズ共を殺し尽くして、止まった。

足りない。

ノイズ、そしてシンフォギア起動にも用いられるフォニックゲインが永劫破壊の燃料にできる事。

この一年でわかった事の一つなのだが、しかしノイズの方は人間の魂に比べると微々たるものだ。

実際今も足りていない。

私は理性をギリギリ保ちつつ、コンピナートに向けて跳躍した。

良質なフォニックゲインとノイズのある方へ。

そして十数秒の滞空の後、着地。轟音が鳴り響き、大型、小型含めて自壊したノイズ

達のエネルギーで満たされていく。

近くに翼がいたのかフォニックゲインまで吸収できたのは僥倖だったが…後で謝っておこう。

そして渴きも幾分マシになった…か。

自分でも何を言ったか分からないままに何事か呟き、横を見ると民間人が、シンフォギアを纏っていた。

いや、おかしい。絶対におかしい。

二課が持つシンフォギアは翼の天羽々斬のみだ。

聖遺物というだけならもう一つあるが、サクリストD：デュランダルはそもそもシンフォギアに加工などしないし、イチイバルやネフシユタンは所在が分からない。

とすると…？

そして、ようやく感覚が戻ってきた耳に司令の音が響く。

「アイムート君！大丈夫か!？」

「今は永劫破壊も安定してる。それで、目の前にシンフォギアを纏った少女がいるのだけれど、彼女、何者？」

「俺達も必死で探してる。わかっていることと言えばその少女のギアは GANG ニールと
いうことだけだ。」

「GANG ニール…消滅したと聞いたけど。」

「それも含めて調査中だ。アイムート君は彼女にコンタクトを取ってくれ。」

「そうしたいのはやまやまなんだけどね…」

私の目の前にはこちらを警戒した目で見ている少女の姿。

「翼にやらせた方がいいんじゃないかしら、アイドルだし。私は怖がられているようだから。」

「…わかった。コンタクトは翼と緒川に任せる。一旦帰投してくれ。」

「了解。」

一旦通信を終え、近づいてきた翼に向き直る。

「あとをお願い。」

「わかりツ…ました…」

第三話 揺らぐ立ち位置

side 立花響

「愛想は無用よ。これから向かう場所に、微笑みはなど必要ないから。」

憧れの人に愛想笑いをバツサリ斬られ少し落ち込むも、ここに来るまでの流れを思い起こしてみる。

軍服を着たヒトが歩いて去ってから、私は事後処理のためにやってきた黒服の人々に手錠を着けられ車で連行された。

女の子は母親と再会できていたのは、安心したが。

そして、自分の通う「私立リディアン音楽院高等科」の職員棟のエレベーターに乗って地下に降りているのが今、ということだ。

混乱でよく分からなくなるのは本日何回目だろうか、と首を捻りつつ、重々しくなった雰囲気の中、エレベーターの下降が緩まり、ついに止まる。

それから手錠をつけたまま廊下を歩くと、また一段と重々しい雰囲気になり、扉が開くと…

「人類守護の砦、特異災害対策機動部二課にようこそー！」

という声が。

…えっ、なに？なにになになに？

歓迎、されてるの？翼さん「微笑みはいらぬ」とか言ってたのに!?

〈熱烈歓迎！・立花響さま〉

という横断幕まで見えれば、なんとなく事情は飲み込め…なかった。

体が完全にフリーズ。

思考も止まり、助けを求め後ろを見ると翼さんも想定外だったのか、頭を抱えている。いや、わかつていたけど信じたくなかった。みたいな感じだった。

一緒にいる黒服の男性も、苦笑している。

すると研究者然とした格好の女性がこちらに歩み出てきて…

「さあさあ、お近づきの印にツーショット写真〜！」

「…嫌ですよー！手錠したままの写真なんて、きつと嫌な思い出として残っちゃいます
！」

しかも何故か初対面な筈の自分の名前を知られている。

赤髪の男性曰く「大戦時に設立された特務機関なのでね」らしいが…即ち調査に長けていると言いたいのだろうか、と思案してみる。

しかし理由は先程の女性がどこからか掲げたバッグによつてわかった。見覚えがあまりすぎる。

「ああーっ！わたしのかばーん！」

不幸な事が多い今日は厄日かもしれない。

わたし、呪われてるかも。

と心の中で呟いた。

side 風鳴弦十郎

既に響君はリディアンの寮に帰り、翼も自室で休んでいる頃だ。

「話さなくて良かったのか？」

「Sound Only」と表示された通信画面に俺はそう問いかける。

彼女は俺たちの同僚だが…

直接会って話ができるのはシンフォギア奏者である翼だけ。

それに、悔しさを感じる。傲慢だとはわかっているが…

「私が魔人になったのは私の判断です。ここにいられるだけで私は満足なんですから。」

「…声に出していたか？」

「ええ。悔しそうでした。……すみません。気を遣わせてしまつて。」

「いや、こちらが悪かつた…」

「まあ、『死の誘引』の性質は万物に適用される。ある種平等な力です。」

どこか寂しげに言う自らの同僚の声を聞いて…

「だけど残酷なモノでもある。辛くは…ないのか？」

反射的に聞いてしまった。

「……どうしたんですか？司令。貴方らしくないですよ？」

回答は、沈黙。そういう事だ。彼女を余計に傷つけてしまった。

「あ、ああ。すまない。」

「2年ぶりに現れた GANG ニール。そしてその奏者である立花響。2年前のライブ、彼女その場にいたみたいですから。」

「相変わらずの地獄耳だな。」

「それ、褒めてます？」

「勿論だ。」

「アハハハ…ありがとうございます。」

話の続きですが…兎にも角にも、彼女は奏者になってしまった。我々は彼女に協力を求めざるを得ないでしょう。」

「そう、だな…」

目下最大の問題は、立花響の“立ち位置”だ。

“上”はノイズと戦える力をみすみす遊ばせようとは思わないだろう。

二課が政府機関である以上、上の命令には逆らえない。

それに…

「私の立ち位置の事まで気にする余裕は二課にはないでしょうに……心配してくれるのはありがたいですけど、今は立花響の事です。できれば戦わなくていい方向に進むといいんですが……」

「君はサイコメトラか何かか？」と笑って誤魔化してみるが、内心には怒りがあつた。

そう、アイムート・ヴァルトルト・フォン・キルヒアイゼン。

彼女の今の身分、いや、公的区分は“自立稼動する聖遺物”だ。ヒト、人類として扱われていないのが現状。

二課に好意的な政府高官は彼女の立場を保護しようと奔走してくれているが、米国からは彼女の接収要請も届いているそうだ。

故に俺たちは彼女の永劫破壊をセーフティの意味合いも兼ねて“活動位階”にセーブするよう指示されている。

これ以上の武力を見せて、米国を刺激しないためだ。

「私は第二次大戦を形成で駆け抜けました。メルクリウス水銀野郎のせいで前線に出る機会は少なめでしたが、多分、黒円卓のメンバーの次に敵を殺しましたね。」とは彼女の言だ。

彼女から伝え聞いていた黒円卓の面々の力を鑑みればそれに次ぐ、というのがどれほど凄まじいかよく分かる。しかも前線に出る回数が少なかつたにも関わらずとなれば……

上層部が危機感を覚えるのも無理からぬ話だった。

結果、彼女はかなり危うい立ち位置なのだ。

「司令、魔人が、ヒトならざるモノがヒトに溶け込もうとすればこうなるのはしょうがないですよ。司令が気に病む事じゃないです。今日は疲れて……なさそうです。がしっかりと休んでください。それでは、通信終了。」

「Sound Only」の表示が消えたのを見て、少し悲しくなりつつも彼女の言葉に

従って次の日に備えて体を休めることにした。

第四話 胸の奥にあるモノ

side 立花響

昨日の疲れが取れないまま憂鬱な気分で机に突っ伏していると、幼なじみで親友の “小日向未来” がリディアンに入学してからの友人 “安藤創世”、 “寺島詩織”、 “板場弓美” の3人を連れて来ていた。

なんでも、誘って行きたいところがあるそうで。

「ビッキー、これからふらわーに行ってみない？」

「ふらわー？」

初めて聞く名に聞き返すと、どうやら駅前にあるお好み焼き屋さんでおいしいと評判らしい。かなり魅力的な提案なのだが…

「ごめん、今日は別の用事が入ってるんだ。」

申し訳なく思いつつ断る。

今日は今から断れない大事な用事があるからだ。

昨日のメデイカルチェックの結果が出た、という事で私は地下に潜って二課の本部に行く事になっている。

「また呼び出し？ ホント、アニメみたいな生き様してるわねー」

「アハハ…」

「仕方ない、また今度誘うね。」

「それでは。」

3人に「別の用事」を先生からの呼び出しだと勘違いされてしまい、ショックを受け

「わたし、呪われてるかも。」と心の中で呟きつつ、身だしなみを整えて待っていると、後ろから服がはためく音がした。

慌てて確認すると、昨日の軍人(?)さんがいた。そしてその後ろに翼さんもいる。

「準備は済んでいるようだし。行こうか。」

「は、はい!」

肩にコートを掛け、歩く軍人さんを追いかける。

ちなみに、「軍人さんだったんですか?」と聞いてみると、「そうだよ。今は違うけどね。」という答えが返ってきた。

慌てて呼び方を変えようとするが、「そのままでもいいよ。」と言われた。

エレベーターまで着くと翼さんが口を開いた。

「∴彼女は重要参考人です。手錠を掛けるべきでは?」

「翼、私達以上の手錠なんてないでしょう？別にこれは放置してる訳じゃないから安心して。」

「…わかりました。」

などと言われている、内心気が気ではなかったけど、庇ってくれている…のかな？

エレベーターの急降下に冷や汗をかきつつ、昨日とは違う道を進む。途中で軍人さんとは別れたが、どうしたのだろうと思いつつ。突き当たりまでやって来た。

扉が開くと昨日の3倍はあろうかという大きさの部屋があった。

昨日の部屋は多目的ルーム。今日のここは二課の司令室らしい。

「それでは、メデイカルチェックの結果発表〜！」

休憩室のような所に案内されて、自分の顔写真や何らかのグラフが投影されているホワイトボードを見せられた。

「疲労は残っているが、『ほぼ』異常はない」らしい。

そのほぼの部分がかかなり不安だが、それより聞きたい事もある。

「んーまあ、そうよね。アナタが聞きたいのはこんなことじゃないわよね。」

「教えてください！あの力は一体なんなんですか!？」

向こうもメデイカルチェックの結果が本題ではなかったのか、話を聞く事ができた。

赤髪の『司令』と呼ばれていた男性、『風鳴弦十郎』さんが目配せすると、翼さんが胸元のペンダントを取り出して私に見せた。

それはアメノハバキリというセイイブツの欠片であり、トクテイシンブクノハドウ、即ち歌の力で起動して昨日私が纏ったような鎧になる。という事だけがわかった。他の事は、難しすぎて分からなかったのだ。

「だからとてッ！誰の歌、どんな歌にも聖遺物を起動できる力が宿っている訳では無いッ！」

“適合者”という単語について説明が始まったタイミングで翼さんが叫んだ。どこか悲痛さを感じさせるその叫びの意味を正しく理解していないのは自分だけのようで、他の人達は目を伏せていた。

雰囲気を払拭するために、先程まで説明してくれていた女性。 “桜井了子”さんが殊更明るい感じで説明を続けた。

それでもやっぱり…

「全然分かりません…」

「いきなりは難しすぎちゃいましたね。だとしたら聖遺物のからシンフォギアを作れる唯一の技術、“桜井理論”の提唱者が私であることだけは覚えてちょうだいね？」

とウインクされた。

しかし、疑問も残る。

その「シンフォギア」に、聖遺物の欠片が必要であるならわたしはそんなもの持って
いないはずなのに。

その事を質問すると…

見せられたのは今まで何度も見てきた自分のレントゲン写真。

そのほぼ中心にある、胸の傷と除去できない欠片。

そこから関連して、2年前のライブについても話した。

「調査の結果、この影はかつて奏ちゃんが纏っていた第三号聖遺物、ガングニールの欠片
であることが判明しました。……奏ちゃんの置き土産ね。」

すると、端の方で音がした。

そちらを向くと、翼さんがよろよろと退室していった。

それを見送りながらも、考える事がある。

それは、「この力は親友の未来に話していいのか」ということだった。ただ怒られるだ

けなら…とも思ったが、返ってきたのは、最悪の場合近しい人達の命に関わる、ということ。

「人類はノイズに打ち勝てない。人の身でノイズに触れる事は、即ち炭になって崩れることを意味する。そしてまたダメージを与える事も不可能だ。例外があるとすれば、それはシンフォギアを纏う奏者のみ。あとは、カウントはしたくないが、アイムート君の永劫破壊ぐらい、か。」

巻き込みたくない、話せない、と思っていた所に新しい単語が出てきた。エイヴィヒカイト…？なんだろうか？

「響君が『軍人さん』と呼ぶ彼女の術理だ。詳しい事は彼女本人に聞いてくれ。何がどうなってるのか、俺にはさっぱりわからん。」

「アハハハ…」

それって私も分からないんじゃない？と思いつつも、続く話を聞く。

「日本政府特異災害対策機動部二課として改めて協力を要請したい。

立花響君。君が宿したシンフォギアの力を対ノイズ戦に役立てて貰えないだろうか。」

「…わたしの力で、誰かが助けられるんですよね？」

司令は、力強く頷いてくれた。

だったら、大丈夫。わたしの趣味は「人助け」。大事な人達を守るためなら。

「分かりました！」

瞬間、警報が鳴り響いた。

退出していた翼さんも戻ってきた。

という事は…

「ノイズの発生を確認！」

「本件は我々が受け持つ事を一課に通達！」

「出現地特定！リディアンから距離200！」

「かなり近いな…」

「迎え撃ちます。」

目まぐるしく動く状況、わたしに今わかるのはリディアンの近くにノイズが現れたという事だけだった。

即座に迎撃に向かう翼さん、オペレーターの人が最短ルートを提示。流れるような連携だった。

戦うのであれば…そう思いわたしも出撃しようとして、司令に止められた。

まだ戦い方も知らないのでは出撃させられない。と。

でも…

「わたしの力が誰かの助けになるんですよね!? シンフォギアの力はノイズと戦う力なんですよね!?

だっただら行きます!」

ここから200mの距離、走れば追いつける筈だ。

そう思って、わたしは司令室から出た。

第五話 戦姫と魔人の夜中行脚

side 立花響

現場に到着した時には戦闘はもう殆ど終わっていて、自分なりに殲滅を手助けしたつもりだったけど……やっぱり、翼さんには及ばない。

それでも……

戦闘が終わった翼さんに駆け寄り、これから共に戦う仲間として関係を始めるために言葉をかけた、つもりだった。

「そうね、貴女と私、戦いましょうか。」

ノイズに向けられていた切っ先は、今度は私に向かう。

「へっ?」

side 風鳴弦十郎

「なッ!?何をやってるんだあいつ等は!?!」

突如響君に切っ先を向けた翼を見た。

驚愕が心を占めてしまい、一瞬行動が止まる。

「青春真っ盛りって感じね。」

了子君の冗談ともそうでないともとれる発言にため息を漏らす。

「つたく…」

「青春で人殺せる武器振り回されたらたまつたもんじゃないですよ…止めてきます。」

繋がった通信からアイムート君の声がした。

確かに、彼女なら制圧も容易だろう。

それに、まだ本調子ではないためフォニックゲインを補充する必要がある。

そう考えて許可を出した。

だが、彼女の通信の声音、呆れと驚きの奥に一瞬“怒り”を感じたのは気の所為か…

?

side アイムート

突如切っ先を立花響に向けた翼を見て、再起動に数瞬かかってしまった。

今も通信から翼達の会話が聞こえて来る。

「そういう意味じゃありません！わたしはただ翼さんと力を合わせて……」

「わかっているわ、そんな事。」

「だったらどうして!？」

「私が貴女と戦いたいからよ。私は貴女を受け入れられない。力を合わせ共に戦う事など風鳴翼が認められる筈もない。」

やっぱり私怨だった…と齒噛みしつつ、エレベーターシャフトを駆け上がる。後で給料が差し引かれるだろうが、エレベーターの上昇より私の跳躍の方が速い。

私が扉の前に到達した瞬間に開いて外が見える。

ありがたい。多分あおいさんだ。

開いた扉からシャフトの外に出て、そのままソニックブームが出ない程度の最高速で駆ける。

リディアンの外に出ると、そのまま本当の最高速へ。

1秒かからずに現場の高架下に到着。

そのまま跳躍。

ちょうど、翼が天の逆鱗を立花響に……ちよつと待って!? 天の逆鱗!? 広域殲滅系の技を奏者とはいえ人に向けて撃つな!

翼と立花響の間に割り込み、迎撃。

と言つてもまあ、腕を構えて突つ立つてるだけでいい。

“死の誘引”は聖遺物には効果がないが、そもそも永劫破壊によつて魔人の体はそんなものがなくても絶対的な防御を誇っている。

右腕と剣先の衝突の瞬間、同程度の衝撃をぶつけて相殺。

バランスを崩した翼をキャッチする。

司令だったらもう少し完璧にやるんだろうな、と思つたが、今ここにいるのは私だ。次に活かせばいいだろう。

…奏者同士の争いなんてもう起きて欲しくないが。

ふと割り込みをかけた時に水道管が破損していたのか、雨に打たれたようになってる。

ふと翼を見ると…

「翼…泣い…泣いてなんかいません！——涙なんて流していません。貴女だつて知つている筈です。風鳴翼はその身を剣と鍛えた戦士です！だから…」……私は先に帰るから。折り合いを付けて、戻つてきなよ。待つてるから。」

私はそう言つて、リディアンの方に歩いて戻つていく。

「翼さん…わたしがダメダメなのはわかつています。だから、これから一生懸命頑張つて——奏さんの代わりになつてみせます！」

そう言つた立花響は翼に張り手されていた。

「はあ…やっぱり地雷踏むタイプだったね…」

一旦2人の元まで戻り、立花響を引つ張つていく。

「えっわわわ…軍人さん…?」

「アイムート・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン。それが私の名前。貴女は?」

「た、立花響です! えーつと、アイゼンさん!」

アイゼン、そう来たか。なるほど、一年近く呼ばれてきたが、アイムートという名前はやはり階級呼びより語呂が悪かった。今後はこちらを推進していこう。

しかし、それよりも、だ。

「戦う事を選んだ貴女に、忠告しとく。

一つ、自らの戦いのカタチとそれに伴う覚悟を身につけるように。でなければ、早晚、後悔することになる。」

「は、はい。」

これは…よくわかってなさそうだな…はあ…

「二つ、人の心に立ち入る時、押し付けた善意は悪意と何ら変わらない。人の内面に踏み込む時、心に残した傷は、そう簡単には治らないのだから。」

「……!!」

こっちはわかるみたいで良かった。というか人の心が分からないタイプではないのか…なのに、よくもまあ、あそこまで見事に地雷を踏めるな…

「後は自分で考えなさい。他人に与えられた結論は、大事な時に役に立たないのだから…」

緒川さん、お願いします。」

そう言って、見送りを緒川さんに引き継がせる。

「気をつけなよ、私みたいにならないようにね。」

夜は更けていく。
戦姫の葛藤は未だ終わりが見えぬまま。

閑話 いつか辿り着くべき場所

sideアイムト

「了子、どう?」

「SC波形は規定値まで回復してるわ。もう本調子と言っていいんじゃないかしら?」

「そう…か。良かった。」

SC波形—SouIColor波形。この世界で了子と共に完成させた概念を示す波形だ。簡単に言えば人間の魂の汚染度、と言った所か。

ちなみに一般人は+30前後。

一般人詐欺の司令でも37だった。

翼は+71、立花響は測っていないが融合状態とはいえLinker無しでシンフォギアの起動に成功している事から65はあると考えられる。

ちなみに私は—89だ。

言い忘れていたが、SC波形は最高値+100、最低値—100で計測を行う。値が低い程汚染度が高いということになる。

しかし、私の場合汚染度が高いほどコンディションが上がってしまう。永劫破壊で聖遺物と共に数多の想念と融合した魔人だから、というのが私の推論だ。

ちなみに、これは精神の“純度”に関する値、ということまではわかっているのだが何をとり除けばこの“純度”が上がるのか分からないため、無闇に手出しできない領域でもある。

「相変わらず謎よねくだってこれ、いくら脳をスキャンしても関連性が見いだせないもの。」

「そうだね。提唱した私自身も感覚的なものでしかないから…寧ろここまで言語化できたのが奇跡なんじゃない？」

この値について考え始めたのはこの世界で初めてフォニックゲインとノイズをそれぞれ取り込んだ時の事だ。

ノイズは魂としての“格”が低いのだろう、殆どエネルギーに変換できない上、吸収時、かなり気分が悪くなる。

逆にフォニックゲインはエネルギー変換効率が高い…のだが、力…即ち連怨・共喰の呪劍の呪いが薄れていく感触があったのだ。

暫くすれば呪いが息を吹き返すようにフォニックゲインを塗り潰していく。恐らく世界に想念で持つて歪みを生み、最終的に塗り潰す永劫破壊とフォニックゲインはエネルギーの観点で相性が悪いのだろう。と私と了子は考えた。

その後了子と一緒に調べた結果 “こういう物がある、しかし詳細は分からない” となつてしまい、一応波形として計測できるようになったので、了子に命名を依頼して現

在の名前になった。という訳だ。

メデイカルルームから出ていく子を見送りつつ、思索にふける。

「もしかしたら…いや、形成位階到達も無理な現状試すのは躊躇われる…第一、過剰戦力だ。『創造位階』なんて…」

丑三つ時、時は過ぎていく。

可能性のみが、浮かび上がっては消えていく。

第六話 向けられた悪意

side 風鳴翼

思い出す。今でも鮮明に思い出せる。

2年前、あのライブの日。

その終わり。

絶唱を歌い上げ、アームドギアも握れず地面に倒れた奏。

そんな奏に駆け寄る私。

「奏……ッ！」

「どこだ……？翼……？真っ暗でお前の顔も見えやしない……」

「奏……ッ！」

「悪いな……もう一緒に歌えないみたいだ……」

「どうして……？ どうしてそんな事言うの……？ 奏は意地悪だ……！」

「だったら翼は泣き虫で……弱虫だ……」

「それでも構わない……！ だから……ずっと一緒に歌って欲しい……！」

「知ってるか……？ 翼……！ 思いつきり歌うとな……すっげえ腹減るみたいだ……」

涙を一筋流して、絶唱のバックファイヤで消滅していった奏。

全ては、私が弱かったせいだ。

私の弱さが引き起こした。

ならば…強くなる。剣になる。そこに…心は、いらぬ。

side 立花響

課題を進めていると、アラームが鳴り響く。

確認すると、二課の定例ミーティングだった。

時間が差し迫っている。

思わずため息をつく。

「こんな時間に、用事？」

「アハハハ…」

「夜間外出とか、門限とかはわたしでなんとかするけど…こっちはなんとかしてよね。一緒に流れ星見ようって約束したの覚えてる？」

そうやって未来が見せてくれたのは綺麗な流れ星の動画だった。

「なんとか、するから…だから、ごめん。」

その後、服を上手く着ることができなくて未来に手伝ってもらってから、わたしは二課に急いだ。

「遅くなりました！すみません…」

「では、全員揃ったところで仲良しミーティングを始めましょ。」

いや、翼さんがこっちを見てくれな…それも踏まえて言ってるのか…了子さん、性格悪いな…

なんて思ったところで、一つだけ気になることがあった。

「アイゼンさんは…どこに…?」

昨日や一昨日の行動から、彼女が二課の一員であることは間違いない筈なのだが…

すると、皆少し苦い顔をする。なんというか、意外だ。

「はい、アイゼンはここにいます！」

すると突然、アイゼンさんの声が響いた。

モニターに顔が映っている。

「了子、貴女の真似なんだけどどうだった？」

「うーん、40点ぐらいね。」

「なんとお!?という訳で響…そう呼ばせてもらうけど、私もいるから大丈夫! さあミーティング再開! 司令、任せました!」

「ああ、わかった。響君。これを見てくれ。」

そう言ってアイゼンさんの顔を映した画面が縮小。残ったスペース全てにリディアン近くの地図とその上に重なる赤い点。

「どう思う?」

司令がモニターを指してわたしに聞いて来る…感想を求められている…なら…

「うーん。いっぱいですね。」

「ぶつ…アハハ!全くその通りだ。これはここ一ヶ月に現れたノイズの発地点だ。では、ノイズについて響君が知っている事は?」

「ええと…まず無感情で機械的に人間だけを襲うこと。そして襲われてしまうと炭化すること。時と場合を選ばずに突然現れて周囲に被害を及ぼす特異災害として認定されていること。」

「意外と詳しいな。」

「今纏めてるレポートの題材だったのでなんとかありました！」

「ノイズの発生が国連で議題に上がったのは13年前だけど…観測自体は遙か昔からあったわ。それこそ太古の昔から…」

「世界各地の神話や伝承に登場する異形はノイズ由来の物が多いんだろうな。」

心の中でふむふむと納得した、専門的な用語が少ないから理解しやすい。

「ノイズの発生率そのものはそこまで高くないの。この発生件数は誰の目から見ても異常事態。だとすると、そこには何らかの作為が働いていると考えるべきなのでしょうね…」

わたしはその言葉に信じられず聞き返してしまった。

「作為…ということは誰かの手によるものだということですか？」

「中心点はここ、私立リディアン音楽院高等科。我々の真上です。サクリストD―デユランダルを狙って何らかの意思がこの地に向けられている証左となります。」

「あの…デユランダルってなんですか？」

「ここよりも更に下層、アビスと呼ばれる最深部で保管され、日本政府の管理下で研究されている。『ほぼ完全状態』の聖遺物、それがデユランダルよ。」

「翼さんの天羽々斬、響ちゃん胸のガングニールのような欠片は奏者が歌ってシンフォギアとして再構築させないと力を発揮出来ないけど、完全状態の聖遺物は一度起動すれば100%の力を常時発揮し、更に奏者以外の人間にも扱えるだろうと、研究の結果が出ているんだ。」

「それが私の提唱した『桜井理論』。でも完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲイ

ン値が必要なのよね…」

オペレーターのおおいさん、藤堯さんが解説し、了子さんが纏めてくれたけど一割もわかった気がしなかった。

司令曰く、今の翼さんなら起動出来るかもしれないこと。

更に「デュランダル」はベイコク：アメリカから渡せと言われていて、それによって実験もままならないらしい。

米国が関わっているとわかると司令室が一気に殺気立ち、翼さんも紙コップを握り潰していた。

「まあ、私も米国には行きたくないかな…何されるかわかんないし。」

と、アイゼンさんが言っている…え？

「ああ、戸惑うよね。私は公的には『自立稼働する聖遺物』だからさ。私も米国からの

要求リストに入ってるんだよ。」

そう…なんですね……ええっ！

「まあ、今は人間じゃないから、じゃんじゃん使つてよ。ね？」

「風鳴司令、そろそろ。」

誰も何も言えなくなったけど、それを破ったのは、最初にわたしが二課に連行された時や、昨日の戦闘の後に寮まで送ってくれた緒川さんだった。

「ああ、そろそろか。」

でも、そろそろ…何の時間なんだろう？

翼さんに向けて口を開く緒川さん。

「今夜はこれからアルバムの打ち合わせが入っています。」

「へ？」

なんのことが分からなかった。アルバム？

「表の顔は風鳴翼のマネージャーをやっています。」

差し出された名刺を受け取る。

「おお……！名刺をもらうなんて初めてです。これまた結構なものをどうも……」

そのまま仕事へ向かう翼さんと緒川さん。

それを見送rittつつ呟く。

「わたし達を取り囲む脅威はノイズだけではないんですね……」

「うむ…」

「どこかの誰かがここを狙っているなんて考えたくないです…」

その眩きを拾ったのは了子さんだった。

二課本部のセキユリティは異端二して先端、誰も寄せ付けけないのだ、と。わたしはそれを聞いて安心した。

だが、気になることも、ある。というか漠然とした疑問だった。

「どうしてわたし達はノイズだけでなく、人間同士で争っちゃうんだろう…どうして争いは無くならないんでしょうね？」

「それは…人類が呪われてるからじゃないかしら。」

耳を噛まれたりして、その後ドタバタしたがその言葉が妙に、耳に残っていた。

第七話 滴る雫、深まる後悔

sideアームト

「……現場に急行する！何としても鎧を確保するんだ！」

通信から聞こえる声に歯噛みする。タイミングが最悪だ。

私はどこからともなく現れ続けるノイズの対処に手一杯。

響と翼の援護に行けない。

というか、もう「偶発的」という規模を超えている。殆ど小型とはいえ2、300は倒してないか……？

現状「活動位階」の私は遠距離の攻撃手段を持っていない。

ノイズが勝手に自壊するとはいえ、市街地に向かわないよう抑え込むのはかなり難しい…

今だってかなりギリギリだ。

ネフシユタンの鎧の元までは行けない。

まあ、向こうはそう考えているのだろう。

魔人を侮ったな。

連怨・共喰の魔剣の呪いを緩める。

周りに人がいないのを確認しているからこそその荒業だが…

触れただけで崩れていくノイズ共。

「打ち止め…か。」

暫くして増えなくなったノイズを見て、元から潜伏襲撃アンブッシュのためにストックしていた分が止まったのだろうと考え、残りを殲滅、ネフシユタンの鎧と天羽々斬、ガングニールが争う公園へと跳躍した。

s i d e 立花響

「ネフシユタンの鎧だと…」

翼さんが呟いた単語、〃ネフシユタンの鎧〃。2年前のライブで起動実験を行ったけどその後消失した完全聖遺物…そう聞いたけど…

っ！翼さん戦おうとして…！

「やめてください翼さん！相手は人です！同じ人間です!!」

「いくさば戦場で何を馬鹿な事を！」

2人に一喝されて、わたしは強く出れなくなってしまった。
何も出来ないまま、状況は動いていく。

「どうやら貴女の方が気が合いそうね。」

「だったら仲良くじゃれ合うかい？」

わけの分からぬまま進む状況に目を回している間に戦いが始まってしまった。

翼さんがアームドギアを振るって攻撃を仕掛けていく。

自分が放った衝撃が掻き消えたのを見て剣を大振りにして接近、そのまま振り下ろす。

でもネフシユタンの鎧の少女は棘のついた鞭で翼さんの剣を弾き飛ばした。戦闘の素人の私でもわかる、隙だった。そしてそのまま翼さんの鳩尾に蹴りが入る。

顔を苦痛に歪める翼さん。余裕を滲ませるネフシユタンの少女。

「ネフシユタンの力だなんて思ってくれるなよ？ワタシのてつぺんはまだまだこんなも

んじゃねえぞ?」

「翼さん!」

「お前はお呼びじゃないんだよ。コイツらでも相手してな。」

ネフシユタンの少女がこちらを向くと右手に持った…銃のような物から光が照射された。そこには災害の筈のノイズがいた。

明らかに、人為的に呼び出されたものだ。

しかも…

「ノイズが操られてっ…!」

こちらに迫る4体のノイズから距離を取ろうとして、吐き出された粘液のような物に絡め取られた。

「その子にかまけて、私を忘れたかッ!」

「お高く止まるな！」

一瞬の攻防、大振りのアームドギアを維持したまま突撃した翼さんを鞭を両手で構えて受け止めたネフシユタンの少女。

更に、翼さんが足払いをかけて姿勢を崩したところにネフシユタンの少女に上段蹴り。でもこれも受け止められてしまった。

そのまま掴まれ、投げ飛ばされた翼さんの頭を踏みしだくネフシユタンの少女。

「のぼせ上がるな人気者！誰も彼もが構ってくれると思つてんじゃねえ！」

「くっ…」

蹴り飛ばされ、そのまま頭を押さえつけられる翼さん…

私にも聞こえるように放たれた一言は意外な物だった。

「この場の主役だと勘違いしてるなら教えてやる。ワタシの目的はハナツからコイツを
かつ攫うことだ。」

「え…?」

わたし…?

「鎧も仲間も、アンタにや過ぎてんじゃないのか?」

「繰り返すものかと…私は誓った!」

そう言ってアームドギアを傾ける翼さん。それが合図だったのか無数の剣が降り注
ぐ。

それを避けるネフシユタンの少女、続く戦闘に拘束されたまま立ち尽くすわたし。
そこでふと気づいた。

翼さんがアームドギアを使っていたように……わたしにもアームドギアがあれば……奏さんの代わりに……

そこでふと蘇る声。

“人の心に立ち入る時、押し付けた善意は悪意と何ら変わりない”

アイゼンさんの言葉だった。

もし、アームドギアを出せて、ネフシユタンの少女を倒す手伝いができたとして、それは……奏さんの代わりか？

そもそも、根本的に人は誰かの代わりになどなれるのか？

そう思ったわたしには2人の戦いを横目にアームドギア顕現に再度挑むも、失敗してしまった。

side 風鳴翼

鏢迫り合う鞭と劍つるぎに言の葉が思わず溢れる。

「鎧に振り回されている訳ではない……この強さは本物ツ……！」

「……に来て考え事かあ？度し難えー！」

繰り出される蹴りをなんとか躲したが……

照射される光、そして現れる小型のノイズ。

次々と繰り出されるソレを私は切り裂いていく。時に手に持つアームドギアで、時に降り注ぐ劍閃で。

ネフシユタンの鎧に迫る。

放たれる鞭を躲し、近接戦に入った。

しかし、攻撃はいなされ、防がれる。

“あの技”であれば……

技の前段階として小刀を投擲する、だが、反撃の想定が少し甘かったのだろう。黒白の球体を鞭に纏った攻撃を防ぎきれず吹き飛ばされた。

「まるで出来損ない。」

そうだ…その通りだ。

「確かに…：私ば出来損ないだ…：この身を一振りの剣と鍛えてきたはずなのに…：あの日無様に生き残ってしまった…：出来損ないの剣として生き恥を晒してきてしまった…：」

小刀が奴の影に刺さったのがわかった。これで、あとは、もう…

「…だが、それも今日まで…：奪われたネフシユタンの鎧を取り戻す事で…：この身の汚名を雪がせてもらおう…：！」

「そうかい…：脱がせるもんなら脱がして…：ッ！」

忍術、〃影縫い〃…短時間だが…相手の動きを封じる。
ノイズ戦で使うことはなかったが…これで…

「まさか…お前…」

「月が覗いているうちに、決着をつけましょう？」

「歌うのか!?!絶唱を!?!」

「翼さんツ!」

私の魂からの言の葉だ。

「防人の生き様、覚悟を見せてあげる。その胸に焼き付けなさい!」

剣を立軟弱者花響に振り向けて宣言した。

歌おう。防人が紡ぐ命の歌、『絶唱』を。

「…Gatrandis babel ziggurat edenall」

歌い出しにも関わらず、壮絶な力の奔流を感じる…

「…Emustolronzen fine el baral zizzl」

ネフシユタンの鎧がノイズを繰り出すが…笑止、どこを狙っているのやら。私はもう貴様を間合いに収めたぞ。

「…Gatrandis babel ziggurat edenall

Emustolronzen fine el zizzl」

ネフシユタンの鎧の肩を掴んで固定する。全身に巡る奔流が外へ溢れ出すのを感じる…同時に、私の命も。

周りが認識できない、ああ…目から出血しているから…
視覚が安定していないのか…

「翼さんッ！」

「無事か翼ッ！」

「翼ッ！」

ああ、三人の声が聞こえる…少し力を入れて、振り向く。

「私とて…人類守護の役目を果たす…防人…こんな所で、折れる剣じゃありません…」

…意識は暗転した。

蒼の戦姫は倒れた。
魔人はそれを見て、
何を思うか。

第八話 戦姫の見た夜明け

sideアームト

調子に乗っていた、のだろう。『活動』でもどうとでもなるのだと、この世界に舐めてかかっていた。

…でももう、遠慮して、躊躇って、大事な人達が…犠牲になるというなら、それ以外の全てを殺し尽くすことを私は躊躇わない。

翼の容態はかなり悪い。『絶唱』のバックファイアによる重症で病院に運び込まれた。

一命は取り留めたものの、容態が安定するまでは絶対安静…なのだそうだ。

司令はテキパキと指示を出し、鎧の行方を追っている。

私は既に二課の融合症例研究室、通称『保管庫』に戻っていた。ここはメデイカルルームと直通になっており、検査や永劫破壊の研究などを行っている。まあ、日本政府に出しているレポートは本質から逸れたもののため風鳴訃堂クソジジイに利用される予定もつもりもない訳だ。ざまあみろ。

響と緒川が話しているのを、保管庫に常設されたパソコンから病院のカメラをハッキングして覗き見ている。

緒川が一瞬こちらを見ていた。まあ、気づくとは思ってたけど…

「ご存知とは思いますが、翼さんはかつてアーティストユニットを組んでいました。」

「ツヴァイウイング…ですよね…」

「その時のパートナーが天羽奏さん。今は貴女の胸にあるガングニールのシンフォギア奏者でした。」

緒川は続ける。

「二年前のあの日、ノイズの襲撃を受けたライブの被害を最小限に抑えるため、奏さんは、『絶唱』を解き放ったんです。」

「『絶唱』…翼さんも言っていた…」

「奏者への負荷を厭わず、シンフォギアの力を限界以上に引き出す絶唱はノイズの大群を一気に殲滅せしめましたが…同時に奏さんの命をも燃やし尽くしました。」

「それは…わたしを救うためですか？」

答えはない。それも一因ということだろう。

緒川は購入したコーヒーを一口飲んで話を続ける。

「奏さんの殉職。ツヴァイウィングは解散、独りになった翼さんは奏さんの抜けた穴を埋めるべく、がむしやらに戦って来ました。」

私は一年しか翼を見ていないが、それでもわかる。いつも隣にいた人がいない。その喪失を、戦う間ずっと感じていただろう。

それでも、翼は止まらなかつた。膝を折る事を良しとせず、進み続けた。

「同年代の女の子が知って然るべき恋愛や遊びも覚えず、自分を殺し、ただ一振りの剣として生きて来ました。」

「そして今日剣として、死ぬことすら覚悟して、歌を歌いました。」

「不器用ですよね…でも、それが『風鳴翼』の生き方なんです。」

「そんな…酷すぎます…！…そしてわたしは、翼さんのことなんにも知らずに…なのに…一緒に戦いたいわって…！…奏さんの代わりになるって…！」

泣きじやくる響。それを見て思う。誰もが固有の人間性を持つ、れつきとした個人であるならば、他の何かになるためには自分を殺すしかない。陽だまりに入れるのは、^{一人}一つだけなのだから。

「僕も貴女に奏さんの代わりになつて欲しいなんて思つていません。そんなこと、誰も

望んでいません。」

「ねえ、響さん、僕からのお願い、聞いて貰えませんか？」

「…ツ…」

急いで涙を拭う響。

「翼さんのことを嫌いにならないでください。翼さんを世界に独りぼっちになんて、させないでください。」

「…はい。」

「ああ、あとアイムートさん、いつまで盗み見を？」

「へっ!?!」

私は響に電話をかけた。これが手っ取り早いのもあるし緒川含め二課所属メンバーとの直接の接触は禁則事項だからだ。

「もしもし、こちらアイゼン。」

「アイゼンさん……」

「頑張ったね。」

「えっ……?でも……」

「人同士の戦いは初陣だったんでしょ?なら、生き残ってガングニールを無事に持ち帰った。相手の目的は貴女の奪取だったのだから、ならそれは十分すぎる戦果。だから、誇っていい。翼の絶唱も究極的には貴女を守るためだったんだから。もし罪の意識を感じるなら、何のために戦うのか、考えておいて。」

「ッ……はい。」

「私が言いたい事は言ったから、緒川、響を寮まで送ってあげて。」

「わかりました。行きましょう、響さん。」

side 立花響

今わたしは車でリディアンリディアンの寮へ向かっている。

緒川さんの言葉。アイゼンさんの言葉。

考えなきやいけないことはたくさんで、それでも、一個づつ解決しなきやいけない。

そしてふと、思った。

「緒川さん。」

「どうしました？響さん。」

「アイゼン：アイムートさんが言っていた『自立稼動する聖遺物』って…？何があったんですか？」

一見すると普通の人に見えるアイゼンさん。でも、初めて見た時のあの恐怖が、今でも忘れられない。

「確かに、響さんも二課の一員、知っておいた方がいいのかもしれませんが。御説明します。」

そして緒川さんが説明してくれたのは、アイゼンさんの術理『永劫破壊』。そして、融合した聖遺物の生み出す『死の誘引』とその弊害——万象に平等な死の誘引は人間にも分け隔てなく適用されること。そしてそれがわかってから『保管庫』と呼ばれている場所に隔離され、基本的に人間との接触を禁じられていること、例外は高レベルのフォニックゲインを生み出せる奏者だけだということ。

「彼女は、いつも、大丈夫だと笑います。本当は寂しい筈なのに。だからこそできる限り支えたい、そう思うんです。」

緒川さんはそう言って笑った。

太陽は輝き始め、今日も長かった夜は終わった。

戦姫は知った。魔人の意味を。

しかし、その渴望を知るのは、まだ先…

第九話 霧中暗索

s i d e 立花響

あれから数日経ち、考え続けているけどなかなか答えは出てこない。緒川さんの「お願い」は元々そのつもり…だったから。

覚悟も意味も理由も知らずに、翼さんの心に踏み入ったわたし。

突然シンフォギアという力を手に入れて、勘違いしていた。

一人でできることは少ない。素人のわたしは特に、だ。

だから、まずは、翼さんに今までのことを謝る…んだけど…

翼さんはまだ集中治療室の中、今できるのは謝る時の言葉を考えるぐらいで…

「響。」

「未来……」

「最近一人で居る事が多くなつたんじゃない？」

「そ……そうかな……？　そうでも……ないよ？　ほら、わたしって一人じゃなんにもできないし……この学校にだつて未来が進学するから一緒に……決めてわけだし……え、いや、ここつて学費がびつくりするぐらい安いじゃない？　お母さんとおばあちゃんには負担かけずに済むかな……て……アハハハ……」

必死に掩し立てるわたしの手を静かに握る未来。その瞳はわたしを見つめている。

うん、そうだよね……

「やっぱり未来には隠し事できないなあ……」

「だつて響、無理してるんだもの。」

「でも…もう少し一人で考えさせて。これはわたしが考えなきゃいけないことなんだ。」

そう、アイゼンさんに言われた“戦う理由を考えろ”。という言葉。今まではなあなあで殆ど何も考えてなかった。人助けが趣味だから。そんなものは上辺の理由だ。考えることをやめちゃったただけだ。

だから、今、考えないと…

本当の意味で、取り返しがつかなくなる前に。

そんな思いを込めた言葉に未来は「わかった。」と頷いてくれた。

「あのね、響。どんなに悩んで考えて出した答えで一歩前進したとしても…響は響のまままでいてね。」

「わたしのまま…?」

「そう、変わってしまうんじゃないくて、響のまま成長するなら、私も応援する。」

「だって、響の代わりは一人もいないんだもの、いなくなつて欲しくない。」

「わたし…わたしのままでいいのかな…？」

「響が響のままじゃなきや嫌だよ。」

思い出すのは、先日 of 定例ミーティング的一幕。

わたしが泣きながら叫んだ、*“守りたいもの”* その一つはこういうかけがえのない人なのだと思うから。

立ち上がつて、静かに、だけど力を込めて拳を握る。

「ありがとう。未来。わたし、わたしのまま歩いて行けそうな気がする。」

「よかつた。あ、そうだ琴座流星群見る？動画に撮つておいたんだ。」

そう言つて貸してもらつた携帯カメラには何も映つていなかった。未来は光量不足

らしい、と言っていて…

思わずツツコミを入れてしまうわたし。

二人で大笑いした。

涙が止まらないけど、未来と約束した、一緒に「流星群を見る」って、何気ない日常、小さな約束。そういうものを守るために、わたしは…

わたしのまま、強くなる。

だったら、できることは沢山ある。

「たのもー!!」

インターホンが見当たらず、家の前で叫んで家主を呼び出すと、出てきたのは特異災害対策機動部二課、司令、風鳴弦十郎さん。

「わたしに、戦い方を教えてください！」

「俺が…君に…？」

「アイゼンさんが言っていました。『司令は対ノイズ以外は人類最強』だって！」

「…俺のやり方は、厳しいぞ？」

「厳しいのは、むしろどんとこいだ…翼さんは2年、いやもつとかけて今ぐらい強くなった。」

「わたしは年単位なんてことは言ってられないから。」

「時に響君。君は、アクション映画は嗜む方かな？」

「はい？」

「ここから弦十郎さん…師匠式の特訓が始まった。」

食べる？アクション映画を見る？映画の動きを再現するために訓練？帰って寝るの繰り返し、最初は運動しているという感覚だけがあったけど…

一日、三日、一週間、更に経って、わたしは成長を実感できるようになった。

何度か学校も休んでしまったけど…仕方ない…よね…

思い出すのは、ある日の未来の一言。

「ねえ響…」

「なに？」

「私、流星群の動画撮ってること響に黙っていたのは…少しだけ苦しかったんだ…」

「響にだけは、二度と隠し事したくないな…」

「うん…わたしだって…未来に隠し事、しないよ？」

嘘つきだ、本当は、ノイズのこと、シンフォギアのこと、二課の人達のこと…全部未来に隠してる、大嘘つきだ。

でも、未来を、大切な人達を守りたいから。

だから…

「どうした？」

わたしの顔を覗き込む師匠。顔に出ちゃってたかな…？

「大丈夫です！行きます！」

そう言って、わたしは師匠とスパークリングを続ける。

霽は、かかったままだ。

わたしは今二課、その司令室のミーティングルームで休憩させてもらっている。

なぜなら、リディアンは今授業中だ。

「はい、ご苦労さま。」

「ふああーすみません！」

差し出されたドリンクを一気に飲む。うん、美味しい。

「あの…自分でやると決めたことなのに申し訳ないんですけど…なにもうら若き高校生に頼まなくても、ノイズと戦える武器って他にないんですか…？外国とか…」

「公式にはない、ということになっている。日本だってシンフォギアは最重要機密事項として完全非公開だ。まあ、我々は唯一シンフォギア以外の例外を知っているが…」

「エイカイヒカイト永劫破壊です…か。緒川さんの説明だと危険なもの、という事しか分からなかったんですが…」

「そうだね…危険というか、ろくでもないというか。」

いきなり繋がった通信にはアイゼンさんの顔が映っていた。

「どういうことですか？」

「永劫破壊はシンフォギアと違って対ノイズを想定している訳じゃないの。ただ、〃聖遺物〃を使うから結果的にノイズが倒せるだけなのであって…ね。」

「なるほど…？それにしても、機密、ですか…わたし結構派手にやらかしてるかも…」

話を続けたくなさそうな雰囲気を感じ取り、無理矢理話題を変える。

するとオペレーターの人達が反応を返してくれた。

「情報封鎖も二課の仕事だから。」

「だけど、時々無理を通すから、今では我々を良く思っていない閣僚や省庁だらけだ。」
「特異災害対策機動部二課を縮めて『特機部二』^{トッキキブツ}なんて揶揄されてる。」

「情報の秘匿は、政府上層部の指示だったのに…やりきれない。」

「悲しいけど、そういうものね。世界はそうやって強い奴が弱い奴に都合を良いように押し付けられるようにできてる。永劫破壊がどーたらこーたらは関係なしにね…」

「そう、か…まあ上層部はいずれシンフォギアを有利な外交カードにしようと目論んでいるんだろう。」

「EUや米国はいつだって回伝の機会を伺っている筈…シンフォギアの技術は既知のものとは完全に別系統の場所から発生した理論と技術によって作られているわ。日本以外では到底真似できないから尚更欲しいのでしょうね…」

「今までの会話から考えるに…」

「結局やつぱり…色々とややこしいってことですよね…」

そこで気づく。シンフォギアを生み出し、いつもなら大きな声で場を盛り上げる人が、いない。

「あれ？了子さんは？」

「永田町さ。」

「永田町…？」

「政府のお偉いさんに呼び出されてね、本部の安全性、及び防衛システムについて関係閣僚に説明義務を果たしに行っている。仕方のない事さ。」

「上の人間は得てして頭が硬いから、懇切丁寧に説明しなきゃいけないの。」

「ほんと…何もかもがややこしいんですね…」

師匠、アイゼンさんの言葉にげっそりとした気分になる。

「ルールをややこしくするのはいつも責任を取らずに立ち回りたい連中なんだが…その点、広木防衛大臣は………了子君の戻りが遅れているようだな…」

「ほへー何があつたんでしよう？」

「大きな遅れではないからな。帰ってきた了子君から直接聞くとしよう。」

少しの疑問の裏で、少しづつ、破滅の塔は組み上がる。

その目覚めは、まだ、先だ。

第十話 望まれざる力

side 広木威権

「ハツハツハ、電話一本で予定を反故にされてしまったか…全く、野放図な連中だ。」

「旧陸軍由来の特務機関とはいえ、些か勝手が過ぎるものではありませんか？」

「だが、“特異災害”に対抗し得る唯一無二の切り札だ。私の役目は奴らの勝手気ままを守ってやることなのだ…」

秘書は困ったように笑って言う。

「『特機部二』とは、よく言ったもので…」

高架下に入り、そのまま出ようとした車列は唐突に横切ったトラックに阻害され、玉突きで事故。

そのまま中から軽機関銃を持った男達が。

…気づいた時には護衛を含め私を除いた全員が死んでいるように見えた。

だがしかし、この、ケースだけは…

突きつけられる銃。

「You ^広mas ^木tas ^防te ^衛be ^大de ^臣fen ^とse ^おmi ^見ni ^受ste ^けre ^しMr. ^まHi ^すro ^すki」

「貴様らッ…！」

銃声が鳴り響く。

side change

「たーいへん！長らくお待たせしまーした！…なーによ？そんなに寂しくさせちゃった？」

「広木防衛大臣が、殺害された。」

「ええっ？本当!？」

「複数の革命グループから、犯行声明が出されているが…詳しいことは把握できていない。目下全力で捜査中だ。」

「了子さん、連絡も取れないから心配してたんです!」

それを見てゴソゴソとポケットを漁り…

「壊れてるみたいね…」

ホツとした顔をする一同。

「でも心配してくれてありがとう。」

近くのソファにケースを置き、開く。

「政府から受領した機密指令も無事よ…任務達成こそ広木防衛大臣の弔いだわ。」

side 立花響

リディアン地下にある大型会議室、ここには今特異災害対策機動部二課のほぼ全メンバーが集まっている。

「私立リディアン音楽院高等科、つまり特異災害対策機動部二課本部を中心として周辺で頻発するノイズ発生事例から、その目的を本部最奥区画“アビス”にて厳重保管さ

れているサクリストD：「デュランダル」の強奪目的と政府は結論づけました。」

「デュランダル…」

「欧州連合が経済破綻した際、不良債権の肩代わりを条件に日本が管理・研究することになった、数少ない完全聖遺物の一つ。」

「ここでオペレーターの藤堯さんが疑問を呈した。

「移送するつたって、どこにですか？ここ以上の防衛システムなんて…」

「永田町最深部の特別電算室、通称『記憶の遺跡』。そこならば、ということだ。どちらにしても俺達が木っ端役人である以上、お上の意向には逆らえないさ。」

「ここです了さんが説明を引き継いだ。

「デュランダルの予定移送日時は明日、明朝0500マルゴマルマル詳細はこのメモリーチップに記載

されています。」

ここで数個の質問があつて、解散。

わたし達はそのまま司令室に戻り、デュランダルの搬出を見届けている。

「あそこがアビスですか…」

「シンフォギア作中に登場する電波塔東京スカイタワー三本分、地下1800mにあるのよ?」

「ふわあ…」

凄いスケールに思わず息が漏れる。

「はい、じゃあ予定時間まで休んでなさい。お仕事はそれからよ。」

「私が参加出来ないのは残念だけどね。」

休もうとした瞬間に通信で割り込んできたアイゼンさんが突如投げ込んだ爆弾に動きが止まる。

「政府からの命令は待機。珍しいのよ、いつもは二課に委ねられてる私への裁量権が今回だけは政府主導。まあいつもの如く上で見苦しい言い争いが続いているんでしょね。」

「ハハハ…」

アイゼンさんって政府の人に辛辣なんだよな…と思いつつも休むために司令室から出ていった。

でも、まあ、授業をサボって二課にいれば、当然こうなる訳で。

「ちよつと！朝からどこにいたの？いきなり修行とか言われても…」

いま、わたしは未来に問い詰められています。

「あーつとえーつと、そのー、ですぬ…」

「ちゃんと説明して！」

「もも、もう行かなくっちゃー！」

ごめん、未来。でも、未来に危険な目にあつて欲しくない。
だから…ごめん。

私は、急かすようにドアノブを捻り、外に出た。

二課本部の廊下でたまたま転がっていた新聞を手にとると…

「いへっ！」

そこには女性の下着姿を写した記事が。

男の人ってこういうの好きだよね…と思いつつ。

別のページを開くと、『風鳴翼、過労で入院』の文字。

でも、正直にネフシユタンの鎧の子と戦って入院と言える訳ないか…と思っている
と、緒川さんがやってきた。

「情報操作も、僕の役目でして。」

「緒川さん…」

「翼さんですが、一番危険な状態を脱しました。」

思わず笑顔になる。よかった。本当によかった。

「ですが、暫くは二課の医療施設で安静が必要です。」

そう、だよね…あんなにボロボロだったんだから…

「月末のライブも中止ですね…響さんも、ファンの皆さんにどう謝るか一緒に考えてくれませんか？」

ツ…！やっぱり…わたしのせいなんだ…

沈んだ顔をしていたのか、緒川さんが慌てて謝ってくれた。

そうだよね、二課の人達はそんな酷い人達じゃない。

「伝えたかったのは、何事も沢山の人間が少しづつ、色々なところでバックアップしているということですよ。」

「そうね、バックアップ自体は私もやるし。」

「アイゼンさん!？」

廊下に響いた声、その元を見るとアイゼンさん本人が立っていた。緒川さんが驚くのも無理は無い。

「S C波形がプラス値に近づいててね。通常値に戻るまでの少しなら外に出られる。いやあ…シャバの空気は美味いなあ！」

「刑期を終えた犯罪者みたいなこと言わないでください。」

「ハハ…冗談冗談。それでもやつぱり通常時は地下から出られないし…ね。今はここにいられるだけで十分だから別にいいけど。」

「アイゼンさん…」

「暇があつたら、今度訓練付き合おうか？司令が忙しい時とか。」

「は、はっ、はい！」

突然の誘いに少し戸惑ったけど、勢いで付き合ってもらうことにした。

「どんな力も使い方次第。私の永劫破壊だつてろくでもない力で、与えられたことを感謝なんて多分死んでもしないけど、色々と飛び越えて人を助けられる力になった。だから、今のまま頑張りな。進み続けることで見える物もある。」

そう言って、アイゼンさんは去っていった。

わたしも頑張ろう。わたしのできることを。

今はただ、夜も更けていくばかり、

魔人は星も見えぬ地の底に何を思うのか。

第十一話 完全聖遺物

side 立花響

「防衛大臣の殺害犯逮捕を理由に検問を配備、
『記憶の遺跡』まで、一気に駆け抜ける
！」

「名付けて、『天下の往来独り占め作戦』！」

了子さん、凄いネーミングだな…

と思いつつも後ろにデュランダルを載せた了さんの車に乗る。

暫く走っていると、本当に車が一つもないことがわかった。

緊張しつつも窓を開けて外を確認してみる。
できることをやろう…と思っただけど…

通過中の橋に突如入る亀裂。

「了子さんッ！」

了さんはすかさずハンドルを操作して回避したものの、私たちの左を走っていた護衛の車が崩落に巻き込まれた。

「しっかり掴まってね…私のドラテクは凶暴よ…？」

橋を駆け抜けたところで師匠から通信が来た。

「敵襲だ！まだ姿は目視できんが、ノイズだろう！」

「この展開…予想してたより早いかも…！」

師匠と了子さんの通信を聞いていると、私たちが通過した直後のマンホールから大量の水が噴射され後列の車が吹き飛んだ。

「ひっ…」

「下水道だ！ノイズは下水道を伝って攻撃してきている！」

直後、前列の護衛の車が同じ方法で私と了子さんの乗った車に飛んでくる。

それを器用なハンドル捌きで躲す了子さん。

少しブレた軌道のまま道端のゴミ箱に突っ込むけど、そのまま突破していく。

「弦十郎くん…！ちよつとやばいんじゃない？この先の薬品工場で爆発なんて起きたら、デュランダルは…ッ！」

「わかっている！さつきから護衛車を的確に狙い撃ちしているのはノイズがデュランダ

ルを損壊させないよう、制御されているとみえる！」

師匠の言葉の途中で何故か舌打ちした了子さん、なにかマズかったのだろうか…？

「狙いがデュランダル确保なら、敢えて危険な地域に滑り込み攻め手を封じるって算段だ！」

「勝算は!？」

「思いつきを数字で語れるものかよっ！」

「こういう時の司令の勘は役に立つから！」

師匠とアイゼンさんの言葉を受けてそのまま薬品工場に突入する車列。

マンホールからノイズが飛び出し、乗っていた人は脱出したものの、生き残った車は了子さんのものだけ…

「あわわわ！」

しかし、そうは問屋が卸さなかった。

進路上にあったパイプに衝突した車は横転どころかひっくり返り、わたしと了子さんはなんとか車から出た。

周りを見渡すとノイズだらけ。

「了子さん…これ…重い…」

「だったらいつそのことここに置いて私たちは逃げましょ。」

「そ、そんなのダメです！」

「そりゃそうよね…」

襲いかかるノイズを了子さんとなんとか回避したけど、乗っていた車が爆発して吹き飛ばされる。

師匠達との通信も途絶えてしまった。

痛みに動きが止まって、ちよつとして目を開くと、紫色の壁でノイズを防いでいる了子さんの姿が。

「了子…さん？」

「しょうがないわね…あなたのやりたい事をやりたいようにやりなさい。」

色々よく分からないことばかりだけど、了子さんの言う通りだ、だから、今は…

「わたし、歌います！」

「Bal^喪wis^失ysal^まl^でne^のsc^カell^ウgun^ンgnir^トtron^ダ」

シンフォギアを纏う。

迫って来るノイズを避けたけど……

ヒールが邪魔だった、姿勢制御にも攻撃にも必要ない、だから、壊す。

再度拳を構えて、迫るノイズに師匠の教え、稲妻を食らい、雷いかづちを握り潰すように打つべし”。をできるよう攻撃してみる。

飛びかかってきた一体に拳を突き刺し、吹き飛ばす。

更に手刀を振り下ろし、蹴り碎き、投げ飛ばす。

よし……これなら……

意識を変え、テンポを上げて連打や衝撃波で複数体を相手取る。

上下左右から迫る触手を躲し、拳を突き刺して破碎する。

すると、見覚えのある鞭がしなりながら伸びてきた。

咄嗟にバク転して避けても、飛び蹴りを頬に受けてしまった。

まだ、シンフォギアを使いこなせていない……どうすれば、アームドギアを出せるんだ……？

上手く受け身が取れず、そのまま落下する。

着地したネフシユタンの鎧の子は、空に浮かぶナニカを見ている。

……あれは、デユランダル!? ……取られちゃダメだ!

「渡すものかーッ!」

デユランダルに向けて跳躍。ネフシユタンの鎧の子を追い越して、突き飛ばし、掴んだ。

瞬間、世界が反転した。

sideアームト

二課本部でパソコンを操作しているように偽装した上で、戦闘が始まってから、急いで現場に向かったのだが…

なに…この波動…エネルギーの量がとてつもない。

しかもどんどん増えてる…

このエネルギーの上昇率…いずれは形成レベルまで…まさか…デュランダルが起動した!?

直後、赫の光剣が天を衝く。

薬品工場の設備を溶断しながら振り下ろさるソレは、絶大な破壊力を持っていた。

海も陸も爆風が支配し、私もそのあおりを盛大に受けた。

ネフシユタンの鎧の少女が撤退したのも確認した…
私がいっても、できることは無い、か。

監視網に引つかからないよう、素早く、されど目立たないように二課本部に戻った。

歌は破壊を呼び、祈りもまた、その様に。
魔人と戦姫は己の無力に歯噛みした。

第十二話 三者三様の祈り

s i d e
???

湖畔の棧橋、そこに一人で立っている。

ここは、フィーネの隠れ家兼研究施設の近くにある湖……ここに来ることはそうそうないのだが……

完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲインが必要だとフィーネは言っていた……

アタシがソロモンの杖に半年もかかずらったことをアイツはあつという間に成し遂げやがった……

そればかりか、無理矢理力をぶっぱなして見せやがった……

化け物め……まあ、このわたしに身柄の確保をさせるぐらい、フィーネはご執心な訳だが……

アイツを確保すれば、また……アタシはひとりぼっちになる訳だ……

こういうのをセンチな気分って言うのか……？

だが……

「わかってる。自分に課せられたことくらいは……！」

「こんなものに頼らなくともアンタの言うことぐらいやってやらあ……！」

金髪に紫紺の瞳、黒い衣装の女性……フィーネに向けて完全聖遺物「ソロモンの杖」を投げ渡す。

「アイツよりもアタシの方が優秀だ……！ ことを見せてやる……！ アタシ以外に力を持つやつはこの手で全部ぶちのめしてくれ……！ それ……！ アタシの目的だから……！」

朝焼けが祝福するのは、どちらか。

side 立花響

未来と一緒に走りつつも、思い出すのは“あの時”のことだ。
怖いのは、力を制御できないことじゃない。

躊躇いもなく、振り抜いてしまったこと。

わたしがいつまでも弱いばかりに…

悔しさを抑えきれない。

わたしはゴールで終わっちゃダメなんだ。

もつと…遠くへ…

わたしはこの後、未来より三周多く走り続け、驚かれた。

場所は変わって、リデイアンの寮。未来とわたしの部屋のお風呂で未来と一緒に入浴している。

いっぱい食べて、ゆったりお風呂に入って、ぐっすり寝る。

やはり、これ以上の休息はない。

まあ、朝だから二度寝するのは良くないんだけど…

土曜朝、自分でも結構走ったのだが、未来は元陸上部。体力も足の速さも磨かれています。

気持ちよかったと言っているし、誘ってよかったな。

その後、未来に全身を観察され、筋肉量や傷跡から危うくノイズと戦っていることがバレるところだった…

恐るべし、未来。

sideアイムート

黒のスーツで司令室に帰ってきた風鳴司令。

そうか、今日は…

「亡くなられた広木防衛大臣の葬儀後、本来別日程で行う法要の時期を早めて行うこと
繰り上げ法要でしたわね。」

そう、了子の言う通り今日はそういう日、なのだ。

私も彼には世話になった。

「ああ、ぶつかることもあったが、それも俺達を庇ってのことだ。心強い後ろ盾を、失っ
てしまった…こちらの進行はどうなっている?」

「予定より、プラス 17パーセント!」

「デュランダル移送計画が頓挫して正直安心しましたよ。」

「そのついでに、防衛システム、本部の強度アップまで行うことになるとは…」

確かに、都合がいい…いいのだが…えも知れぬ不安に包まれる。

まあ、気のせい、だろう。

「ここは設計段階から限定解除でグレードアップしやすいように織り込んでいたの。それにこの案は随分昔から政府に提出してあったのよ？」

「でも確か…当たりの厳しい議員連に反対されていたと…」

そう、そして…

「その反対派筆頭が広木防衛大臣だった。非公開の存在に血税の大量投入、無制限の超法規的措置は許されないってな。」

コーヒーを飲んで一息ついた司令は続きを語った。

「大臣が反対していたのは俺達に法令を遵守させることで俺達に余計な横槍が入ってこないよう、取り計らっていたからだ。」

そう、あの人はそうやって政府上層部と二課との緩衝材になってくれていた。

私の扱い、〃自立稼動する聖遺物〃についても、あの人の発案だった。

聖遺物という括りに入れることで、私のデータを秘匿情報にできるよう取り計らってくれたのだ。

「司令、広木防衛大臣の後任は…」

「副大臣がスライドだ。今回の本部改造計画を後押ししてくれた、立役者でもある…あるんだが…」

「どうかしましたか？」

…間違いない都合の悪い人選なのだ、二課、いや日本の国防にとって。

「強調路線を強く唱える、親米派の防衛大臣の誕生だ。つまりは日本の国防政策に対し米国の希望が通りやすくなった訳だ。」

全部が全部、米国の言いなりでは無いだろうが…それでも、マズい事態なのだ。

あの国にシンフォギアなどの異端技術が渡るところなど考えたくもない。

まあ、昔の敵国だから、ということもあるのかもしれないが…

それでも、あの国には好感を持ってない。

「まさか、今回の大臣暗殺にも…米政府が…!?!」

沈痛な空気が流れた瞬間、強化工事中のトラブルが発生。了子は確認しに行くという。

まあ、丁度いいタイミングではあったのだろう。

そうだ、翼も目を覚ましたそうだし、電話でもかけてみるか。
病室もすごいことになってるんだろなあ…

コール音が真つ白な部屋に鳴り響く。
何もない部屋だ。

なんというか、虚しいな。

数瞬の後、翼が電話に出た。

「もしもし。」

「もしもし、こちらアイゼン。」

まあ、今は仲間との電話で、この渴きが癒されることを祈って。

魔人は打ち明けられない。

それがどんな結果を引き起こすか、知っている筈なのに。

第十三話 兆しの行方は

side 風鳴翼

「もしもし。」

「もしもし、こちらアイゼン。」

ICUを出て少しした今日、緒川さんの代わりに立花が私の見舞いにやって来た。

私の部屋の様子を見て、誘拐と勘違いされ捲し立てられた。

真実は、単純に私とその辺りに気が回らなかつただけだったのだが…

電話がかかってきたのは、立花が私の病室の片付けをしようと行って止める間もなく始

め、足の踏み場が見えてきた頃のことだった。

私は病室から一旦出て、通話ボタンを押した。

「ああ、アイゼン女史でしたか。」

「うん。翼、調子はどう？あの日、間に合わなかった私が言えることでもないけど…」

「いえ、あの日アイゼン女史がいなければ、多大な被害が出ていたと聞いています。それを知って感謝こそすれ、責めるいわれはありません。」

「そう言ってもらえると、ありがたいんだけどね…あ、そういえば、病室はどんな感じ？散らかってる？」

無理矢理話題を変えたこともあり、少し動転した。

「い、いきなり何を…」

「またまたーそのところどんな感じ? ……誰か片付けているみたいだけど、緒川さんじゃないね、誰?」

「わ、わかるんですか? 立花です。見舞いに来てくれて…」

叔父様もそうだが…アイゼン女史も中々どうして規格外だ。
恐らく反響定位なのだろうが…個人まで特定するなんて、精度が高すぎる。

「ほほー? 仲良くなっちゃって羨ましいなーこのこのー!」

「わ、私と立花はまだ…」

「わかってる。まだ、認めきれてないんでしょ?」

「…」

そう、その通りだ。私は、まだ…

「いいんじゃない?」

「え?」

「天羽奏は天羽奏。立花響は立花響。それぞれ全く異なる個人だし、だから同じ関係を築く必要はない。そこは柔軟にやらないと。前にも言ったでしょ?人間の選択に、絶対の正解はないって。自分が後悔しない道を選ばなよ。二人で話し合ってさ。」

「それは…」

許せる、だろうか。奏のいた場所に立花を置くことを、自分が。

「仲間も家族も超えた特別。風鳴翼にとって天羽奏という少女はそういう存在なんですよ? 仲間のカタチ、友人のカタチ、家族のカタチ…そして、特別のカタチ。誰もが別ものを思い描いていて、それでいて一つずつじゃない。一つずつに絞る必要もない。」

論すようにゆつくり溢れる言葉。私はそれを聞きながら、その声音にどこか寂しさを感じた。

「だからさ、自分の思ったことを、相手の思ったことを、咀嚼して、考えて…そこから解を出せばいい。仲間か、特別か、はたまたそれ以外か、そんな事は、その時考えればいい。」

「……はい。」

「頑張りな。私に言えることはこれくらい。後は当人間の問題だ。部外者は退散するでしょうか。」

「ありがとう、ございました。」

電話が切れた。

…話そう。立花と。

自分が何を思っていて、立花が何を思っているか、全力で語り合おう。でなければ、折角もらった言葉が流れるばかりだ。

私は病室に戻った。

sideアームト

「フフツ…ハハツ…ハハハハハハ！何言ってるんだか…似合わないことを…なんというか、こつちが惨めだなあ…」

電話を切り、携帯端末を懐にしまった。

仲間？あんな狂人共がどうして仲間と言えるのか。

友人？ああ、いたよ、何人か。死んだけど。

家族？まあ、もしかしたら姉さんもどこかの世界で生きているかもしれないが……まあ、期待は出来ない。

特別？ハハツ……？

おっと、変なことを言うところだった。

まあ、とりあえず。

私は今も、どこか夢心地なのだ。

この世界が水銀野郎ロクでなしの作った泡沫の夢なのではないかと。どこかでそう思っているから。

あの状況で生きている方が不思議なのだ。

まあ、それは、今はいい。

ただ……今だけは、この幸せな夢に……

「ネフシユタンの鎧を纏った少女がこちらに接近してきます！」

敵襲!? あれ…? なにしてたんだっけ?

行かないと…

「司令! 行きます! 私への裁量権は戻ってますよね！」

「あ、ああ! 頼んだ、アイゼン君。」

周辺住民への避難警報を発令! 響君にも連絡だ!

事態は刻一刻と動いてゆく。

s i d e 立花響

司令から連絡を受けて、予想到達地点に向けて走る。
携帯をしまうと、未来がいた：

「未来…？」

ツ！マズい！

ネフシユタンの鎧から放たれた鞭は地面を抉り、未来を吹き飛ばした。

衝撃で跳ね飛んだ赤い車体が、未来に迫る。

…させない…！わたしの陽だまりに…手を出すなツ！

「B喪a失lへwのiカsウsンyンaトlダlウ nンeンsンcンeンlンlン gンuンnンgンnンiンrン tンrンoン」

シンフォギアを纏い、車を殴って弾き飛ばす。

「響…？」

「ごめん…！」

未来の声が、困惑と少し恐怖を混ぜたような声が、痛い。
でも…

思考を戻す。だが、考えるほどに…

ここでは戦えないッ！

推測でしかないけど…こうすれば！

わたしは人気のない方へ移動することにした。
彼女の目的が「わたしを攫う」このままだったら…行けるはず!

暫くして、止まる。

向こうもちゃんと着いてきてくれた訳だ。

「ドンくせえのがやってくれる…!」

その言葉にムカツとしたわたしは言いたいことを全部言ってみることにした。

「どんくさいなんて名前じゃない!」

「わたしは立花響、15歳!誕生日は9月の13日で血液型はO型!身長は…この間の測定では157cm!体重は…もう少し仲良くなったら教えてあげる!趣味は人助けで、好きなものはごはんアンドごはん!あと…

「彼氏いない歴は年齢と同じイ!」

「な、何をとち狂ってやがるんだお前…」

まだだ、まだ言い足りない！

「わたし達はノイズと違って言葉が通ずるんだから、ちゃんと話し合いたい！」

「なんて悠長…この期に及んでッ！」

迫る鞭、でも、わたしだって、一歩ずつでも進んでいるんだ！

余裕を持って回避しながら叫ぶ。

「話し合おうよ！わたし達は戦っちゃいけないんだ！だって、言葉が通じていれば、人間は…」「うるせえ!!」ッ！

「分かり合えるものかよ、人間がッ！そんな風に来ていれるものか！気に入らねえ…：気に入らねえ…：気に入らねえ…：気に入らねえ！わかっちゃいねえことをペラペラと口に

するお前がアツ！」

かつて体感したものはレベルの違う「怨嗟」がそこにあつた。

「お前を引き摺ってこいと言われたが…もうそんな事はどうでもいい…お前をこの手で叩き潰す！今度こそお前の全てを踏み躪ってやる！」

「わたしだつてやられるわけには…」

わたしがそう言った瞬間、振り下ろされた黒白のエネルギー球。かつて翼さんが受け止めきれず、ダメージを受けたソレ。

「もってけダブルだ！」

更に二発目。

でも、わたしだつて、ここでツ！

胸に宿る思い、それを形にするアームドギア。
生成が間に合わず、エネルギーそのものをぶつけた。

それによつて、思つたよりダメージを受けずに済んだ。

でも、やつぱりギアの形に固定出来ない：

エネルギーはある。それをさつきのようにぶつける！それでツ！

迫つてきた鞭を握り、引つ張る。

雷を…握り潰すようにイイ…！

最速で！

最短で！

?????最短で！
真つ直ぐに！

????????????????

一直線に！

この思いをツ！胸の響きを伝えるためにイイイイ！

エネルギーを解き放つ！

瞬間、轟音が鳴り響いた。

鎧を砕きし戦姫の拳。

風穴開けずとも、思いだけは貫かんとす。

第十四話 末路

s i d e
???

衝撃で身体の動きが鈍っている…

にしても、なんて無理筋な力の使い方をしやがる…

この力、風鳴翼あの絶唱に匹敵しかねない…

未形成のアームドギアで…ッ！

ネフシユタンの侵食が始まった。

痛みに顔を顰めてしまった。

食い破られる前に片をつけなければ…

…ん？追撃が来ない…？

振り向いて前を見ると、突っ立って構えすら取っていない立花響トクくせいのがいた。

コイツ…!!

「お前！バカにしてるのか！アタシを！雪音クリスマスを！」

「そっかクリスマスちゃんって言うんだ。」

その言葉で気づいた。敵に余計な情報を与えてしまった…と。

「ねえ、クリスマスちゃんこんな戦い、もうやめようよ！ノイズと違ってわたし達は言葉を交わすことができる。ちゃんと話をすれば、きっと分かり合えるはず！だってわたし達、同じ人間だよ？」

腸が煮えくり返るとはこういう事か。

イライラする、腹立たしい、叩き潰してしまいたい。

その全てを乗せて、口を開いた。

「クセエんだよ…嘘くせえ…！青くせえ…！」

接近し振りかぶる。相手が腕で防御しようとするが…バーカ！こっちはフェイクだよッ！そして拳で体制を崩して、本命の蹴りを入れた。鞭を使うとか、そんなことは全く考えなかった。

コイツだけは…アタシがッ！

起き上がった立花響ドンクセエのに飛び蹴りを入れる。

が、コイツを叩き潰すより鎧の侵食の方が早え…

「クリスちゃん…」

コイツ…この期に及んでツ！

侵食も進んでる、このままじゃ何もできずに負けるだけ…

業腹だが…歌うしかねえ…

「吹っ飛べよ！アーマーパージだ！」

歌う…：しょうがないから、どうしようもないから、大嫌いな歌を…歌ってやらア！

K銃ill爪lにtかeけrた I指chでhをaなiぞvるalを tなrぞoるn

「この歌って…」

そうだよ！目エかつぽじってご覧しろ！

「イチイバルの力だ！」

「クリスちゃん…わたし達と同じ…」

同じ…？ああ！同じだよ、同じだなクソツタレ！

「アタシに歌を歌わせたな…？…アタシに歌を歌わせたな…!!教えてやる!!!アタシは歌が大嫌いだ!!」

「歌が…嫌い？」

ぼさつとするならそのまま叩き潰す！

クロスボウ状のアームドギアを展開して、射殺さんと矢を放つ。

吹っ飛ばす！

狙い通り徐々に近づいてきたドンくせえのを蹴り飛ばす。

まだだ…こんなもんじゃ足りねえ！

アームドギアを機関銃に変形。そのまま連射する。
腰部のミサイルポッドも全弾発射だ！

字義通り最大火力…これでツ！

爆発が前方を埋め尽くす。

だが、爆煙の先から現れたのは…

「盾…?」

「剣つるぎだツ！」

風鳴翼…もう復調したってのか？

「死に体でお寝んねと聞いたが？足手まといを庇いに現れたか。」

「もう何も、喪うものかと決めたのだ。」

「翼さん……」

「気づいたか、だが私も十全ではない。力を貸して欲しい。」

なんだよ……アタシは眼中にないってか!?

機関銃の掃射を叩きつける。

が、ひらりひらりと躲され接近される。

マズい……コイツのギアは接近戦仕様……

咄嗟に下がり、上段からの斬り下し、下段からの斬り上げを避けたが、先回りされて頭部への切り払い。

これもなんとか頭を下げたが、機関銃を柄で弾かれただけでなく後ろに先回り

され背中合わせの状態で首筋に刀を当てられた。

この女…以前とまるで動きが…

「翼さん…」

「わかっている。」

オメエもそのクチに鞍替えかよッ！

機関銃の後背部をぶつけて背中合わせから脱する。

睨み合いから攻撃に移ろうとした瞬間、機関銃がノイズによって破壊された。

…え？だって、ノイズを操るソロモンの杖はフィーネが…

アタシにも、高速でノイズが飛来するのを見て、訳が分からなくなった。

sideアームート

私専用の直通通路で地上まで出た。響に加勢しようとして…

「ノイズの反応を検知！」

「なんだとツ!? すまん、アイゼン君。そちらに向かってくれ！」

「…了解！」

指定されたポイントまで一瞬で加速すると、確かにわらわらとノイズがいた。

「今、なんだか無性に腹が立っててさ…ちよつと付き合つてよ！」

そのまま身体強度頼りにノイズの群れに突撃する。

そこで気づいた。

ノイズ共が自壊するまで時間がかかってる…？

“死の誘引”が収まつてる？いや、範囲が狭くなってるんだ。

方針を変更、漏らしが発生する可能性も鑑みて、衝撃波で破砕する方向へシフト。

少しづつ進んで、気づいた。

あーこれ道だ。ノイズで作られたやつ。

意味は…こつちまで来いつて事か…

いいよ！乗ってやろうじゃん！

なんか、猛烈に渴いてしようがないんだよね！

私はそのままノイズ共を破砕しながら進んだ。

暫くすると、ノイズが途切れた。

味はマズかったけどエネルギーにはなつてたんだよな…

とぶんすかしていると、翼と響に：アレはネフシユタンの中身か。雰囲気がそれっぽい。

「命じたことも出来ないなんて…貴女はどこまで私を失望させるのかしら？」

「フイーネ…！」

フイーネ…フイーネねえ…最終楽章、転じて「終わり」か。

それを名前にするなんて随分と酔狂な奴だな…

というか…この感じ…なんだろう…？なんだか頭がフラフラして…

「こんなヤツがいなくなつて戦争の火種ぐらいアタシ一人で消してやる！そうすればア
ンタの言うように人は呪いから解放されてバラバラになった世界は元に戻るんだろ…
？」

なんか…今度はグラグラしてきた…

「もう貴女に用はないわ…」

フィーネと呼ばれた女の手が光って、何かが集まっていく。

ネフシユタンの鎧を、回収しているのか…？

そこでようやく、女を直接見た。

その魂の波長を見て、気づいた。

「え…？嘘でしょ…ねえ？どうしてッ!？」

なるほど、これは夢だ、だって、彼女が、そんな…

「聖遺物の使徒、魔人か…貴女にも結構感謝してるのよ？」

「…嘘だ…そんな…」

「もう、使い物にもならないか…」

ふざけるな…ふざけるなッ！

「その声音でッ！邪悪を語るなッ！」

私はフイーネに向けて跳躍した。

「使徒も堕ちればまた獣、か…残念ね…」

音が聞こえる…気づくと周囲をノイズに囲まれていた。

コイツらかッ！

私はその中のヒトのカタチをしたノイズに向かって“死”を振り向けた。

失せろッ！

そして、その瞬間、内側から身体の制御を奪われた。

side 風鳴翼

「アイゼン女史？」

フィーネと呼ばれた女とネフシユタンの鎧の中身が海へと逃走しているのをノイズを斬りながら確認した瞬間、気づいた。

アイゼン女史がいつもより、いや出会ってからの全ての瞬間より恐ろしい気配を放っている事に。

ナニか…剣のようなモノが右手に握られているように見えるが…

黒い気配は…周囲に拡散した。一瞬で。暴風の如き威容で以て。

私と立花の周りにいたノイズごと、私達を吹き飛ばした。

ギアはひび割れ砕け散り、次は己と覚悟する程のものだった。

何故なら今の風は、余力を残した試運転だとわかってしまったからだ。

だが、その瞬間、それが一気に霧散したのだ。

「風鳴翼さん……？はじめまして、かな？」

いつもと同じ顔、いつもと同じ声音のはずなのに、確かに初対面の印象を受けた。そう、髪色が白なのだ、これだけの事で印象がかなり異なる。

「貴女は……？」

「わたし？こアイムのートの守役……かな？」

「守役……？」

「うん、誰より純粋なこの子が、押しつぶされないよう、守ってあげるのがわたしの役目。」

責任とか、義務とも言えるね。」

「それは…」

思いもよらない答えだった。

「この子のこと、大事にしてあげて？ 多分、この子に一番性質が近いのは君だから。」

「…！ わかりました。」

そう言うと、アイゼン女史は髪色が戻り、地面に倒れ伏した。

魔人、その化けの皮は未だ厚く、暴走して尚明かされぬ真実。

戦姫は守り人の願いに如何にして応えるのか。

第十五話 ヒトならざるが故に

side 風鳴翼

二課本部へと繋がるエレベーター。

その中で、私は自らの思いの在り処に思索を巡らせている。

今日の戦いで奏が何を思い何のために戦っていたのか、少し、わかったような気がした。

だけど、それを理解するのは正直怖い。

人の身ならざる私に受け入れられるのだろうか。

「自分で人間に戻ればいい。それだけの話じゃないか、いつも言ってるだろ？あんまり

ガチガチだとポツキリだ……って。なんてまた、意地悪を言われそうだ。」

だが今更、戻ったところで何ができるといふのだ。

いや、何をしたいのかすら分からないではないか……

“好きなことすればいいんじゃない？ 簡単だろ？”

エレベーターから降りた私は後ろから聞こえたその声に思わず振り返る。

好きなこと……言われて気づいたがもうずっとそんな事を考えていない気がする。

遠い昔、私にも夢中になった事があつたはずなのだが……

sideアムート

本当に、元一般人が遠い所まで来てしまった。そう思う。

ドイツ貴族の次女として生まれ、姉に倣い軍に入った。
魔術師と出会い、魔人になった。

第二次大戦で父母を含めた家族や多くの人々を斬り殺し、紆余曲折の後に姉と共に
聖櫃スワステカに取り込まれた。

筈だったが、今、更に別の世界でノイズという害獣、そしてそれを操り何事かを成そうとする者達と戦っている。

ふと、己の渴望を口にする。

『大いなる者よ我に跪け』

我ながら浅ましい渴望だ。

叶う筈もない。自分の器量は理解している。

黒円卓に正しく名を連ねた面々と私は違う。

私は聖遺物に引き摺られて形成に到達し、僅かばかりの渴望が聖遺物の特性を引き出

したに過ぎない。

奇跡は代償を求める。

私は何も支払いたくなかった。

故に何も得られず、力の不足は全てを取りこぼす要因になった。

私は、罪深い人間だ。いや、最早人間でもないのだが…

それはそれとして。

私は変化が怖かった。己の渴望が己を変えることが怖かった。

姉のように、まともでいられる自信が無かったのだ。

だから、メルクリウスの掌の上にならないこの世界が…なんだか夢のようで…

それに縋った。この世界を夢だと断じて、でも…何が悪いのだろう。夢を夢のまま、微睡みのままに…

s i d e 立花響

「外傷は多かつたけど、深刻なものがなくって助かったわ。」

「つまり、すっかり平気ってことですよね。」

「常軌を逸したエネルギー消費による…いわゆる過労ね。少し休めば、またいつも通りに回復するわよ。」

「どうやら、私の怪我は大したことないらしく、命に関わるものでもないらしい。」

「じゃあ、わたしは…」

「では寮に帰ろうと、というタイミングで体に力がいらなくなってしまった。」

「だから、休息が必要なーの。」

了子さんに諭されてしまったが…やっぱり心配だ。

「わたし…呪われてるかも…」

「気になるの？お友達のコト。」

「はい…」

「そうだ、心配、な筈なんだ…」

「心配しないでダイジョーブよ。今緒川くん達に事情の説明を受けている筈だから。」

「そう、ですか…」

「機密保護の説明を受けたらすぐ解放されるわよ。」

「はい…わかりました…」

…今の私は、何が心配なんだろう？

s i d e
???

「まさか、イチイバルまで敵の手に…そしてギア奏者候補であつた、雪音クリス。」

「聖遺物を力に変えて戦う技術において我々の優位性は完全に失われてしまいましたね…」

深刻な顔で呟く藤堯さんとあおいさん。

確かにそうなんだろう。わたしは見ていただけだったから、あまり詳しく言える立場にないけど…

「敵の正体…フィーネの目的は…」

「深刻になるのはわかるけど、シンフォギアの奏者は2人とも健在。頭を抱えるにはまだ早すぎるわよ?」

そう言つて、翼さんと響さんを連れて入ってきた桜井了子さん。

逃げて押し付けた私からするとあまり強くは言えないけど、やっぱり…

「翼、まったく無茶しやがって…」

「独断については謝ります。ですが、仲間の危機に伏せているなど出来ませんでした…!」

「立花は未熟な戦士です。半人前ではありませんが、戦士に相違ないと確信しています。」

そうか、翼さんは響さんを認められたんだね。

話す二人を見てみると、弦十郎さんの目線がこちらを向く。

「響君のメデイカルチェックの結果を気になるところだが…」

「ご飯をいっぱい食べて、ぐっすり眠れば元気回復です！」

少し暗い顔をする響さん。

でも、私は真の意味で“部外者”だから…

「そうか…では…」

声をこちらへ向ける弦十郎さん。つまり…

「私が何者か、という事ですね。」

ようやく声を発した私に、司令室にいた全員の視線が向いた。

「はじめまして、特異災害対策機動部二課の皆さん。アイムートの名はいつも皆さんが
会っている彼女に押し付けてしまったので…白^{ヴァイス}とでも名乗りましょうか。」

実際、髪色は白ですからね。

“ そう、正しい意味では私が “ アイムー トー ヴー アル トルー トー フォン “ キル ヒ アイゼン
“ なのだから… ”

罪に塗れた白は戦姫達と邂逅する。
そのココロは何を語る？

第十六話 罪のカタチは

side 風鳴翼

その挨拶は、私以外の面々を驚愕させた。

いや、私も驚いてはいるのだが一度面識があるだけに落ち着いて状況を見ることができた。

「名を、押し付けたというのほ？」

叔父様の疑問に、もう一人のアイゼン女史：ヴァイスさんは少しづつ語り始めた。

「始まりは、ただただ純粋な『渴望』でした。私が聖遺物に託した渴望は、『わたしではない誰かになりたい』という求道寄りのもの。はつきり言って外界に作用するとは思ってもみませんでした。でもわたしも聖遺物に少なからず影響を受けていたよう

で。」

そこに緒川さんが反応する。

「まさか、連怨・共喰の魔剣の『死の誘引』が共鳴して…?」

「察しがいいですね、緒川さん。その通り。彼女は、アイムートは元々は『死んだ人間の魂』だったんです。尤も彼女がやってきたのは完全に偶然でした。」

「しかし、わたしはただ巻き込まれただけの彼女に強制的に体の支配権を与え、わたしは精神の奥底で眠り続けていました。わたしは『黄金の獣』には及ばないものの回帰の記憶を多く持つ人間でした…だから向き合うのが嫌になって…結局ただの言い訳ですね。わたしは逃げたんです。自らの運命と、守るべき家族の命から。」

そう言つて、彼女は口を閉じた。

深い哀愁と後悔を感じさせるその目は、昏く濁っていた。

白い肌、白い髪を持ちながら、目だけが『昏い』。

その雰囲気に全員が気圧されていた。
そんな時だ。

桜井女史が、立花の胸をつついた。

「んにゃあああ！にゃんてことおお！」

「暗くなってもしょうがないでしょ？もつと建設的な話をしなきや。ヴァイスちゃん。アイゼンちゃんが目覚めるのはいつ？」

「彼女が望めば、私にはいつでも身体を明け渡す用意があります。しかし…」

「そう…ということは…」

「今の彼女は目覚めを拒否しているんです。同様のとまでは行きませんがわたしも“魔人”。できることはあります。彼女が目覚めるまではわたしがアイムートの代わりに

なります。」

先程とは打って変わって覚悟を決めた眼差しをするヴァイスさん。

だが、彼女が見ているのは私達ではない気がした。

s i d e 立花響

アイゼンさんがヴァイスさんになった事がわかって今後の仕事の割り振りなどが決まっただけから、わたしは寮に帰った。

よく考えれば、わたしの「未来なら許してくれる」という考えは傲慢以外の何者でもなかった。

だから…

「嘘つきッ！隠し事はしないって言った癖に！」

わたしはその言葉に立ち尽くす事しか出来なかった。

この後の事はよく覚えていない。

わかったことは…結局、わたしは未来を騙していたということ。

だから、あの後何度も話しかけても、口も聞いてもらえなくて、ベッドに入っても、不安がいつばいで…

身勝手だなあ…わたし…

次の日、先生に怒られたりしながら、昼休み。
やっぱり、口は聞いてもらえなくて。

弓場さん達がやってきた後も、“バイト”という言葉に反応した未来は、屋上に向かつて走り出した。

「未来ッ！」

わたしも慌てて追いかけた。

「謝らなきや。」その一心だった。

「未来……ごめんなさい！」

心の限りを絞って謝った。

「どうして響が謝ったりするの？」

だってそれは……！

「未来はわたしに対して隠しごとしないって言ってくれたのに、わたしは……未来にずっと隠しごとしてた！わたしは……それ以上言わないで……！」

「これ以上……」

「私は、響の友達じゃいられない……!」

未来はわたしの横を走り去った。

わたしはわたしの陽だまりを失った。

sideヴアイス

「あったかいものどうぞ。」

「あったかいものどうぞ。」

あおいさんに渡されたコーヒーを飲んで、作業を再開する。

わたしが今やっている作業というのはイチイバル奏者、*“雪音クリス”*さんの搜索。

とどこどこ途切れた監視カメラの記録から探しているもの、やはりアイムートほど手際良くとはいかない。

地上は夜の時間だが、作業は難航している。

ちなみに、今わたしがいるのは二課本部の司令室だ。

何故ならわたしが表出している間は「死の誘引」は起きないからである。

わたしと連怨・共喰の魔剣の霊的接続はなくなっている。

あの剣の性質がわたしの精神を伝播して流れ出るといふことは無いのでこの部屋にいることができる。

なんとというか、皮肉な話だ。

彼女が望んだ景色が彼女の預かり知らぬところで完成してしまった。

わたしが表出している状態は完全にイレギュラーな事態だ。

早く戻ってきてくれるといいんだけど…

「ん？」

二時間前の映像に映ったのは探していた後ろ姿。

これは…廃棄されたダムの方角に？

「捨てられても、忘れられない、か…」

帰巢本能というやつだろうか。

「弦十郎さん。わたしも捜索に出ます。雪音クリスの現在位置の予想円はモニターに出しておくので…」

そう言って、“保管庫”の直通エレベーターからではなく、通常のエレベーターで地上に出る。

雪音クリスさん。

あなたは、何を成そうとして、何故捨てられたんだろう？

わたしは…何を…

地上に出たわたしは月を見上げて、その眩しさに目を細めた。

吐き出された“白”の罪。

全てを押し付けられた者は、未だ夢現の中。

第十七話 揺れ動く白

side ヴァイス

「雨、か…」

地上に出た時はまだ小雨だったが、朝方になる頃には傘が必要なほどになっていた。

しかし、今のわたしには傘の手持ちがない。

唯一の救いは、今着ている服の防水加工をアイムートが既にやってくれたこと、
だろうか。

比較的被害は少なそうだ。

『Be ambitious』とデカデカと書かれたTシャツの上に白衣、下はダボツとしたズボン…ファッションセンス的にはどうなのだろうか。少しアレな気がするが…

気にしてもしようがない事なので無視することにした。

すると、路地に倒れた女の子を見つけた。

その人相と格好には見覚えがあつて：

「大丈夫ですかッ!？」

急いで駆け寄る。肩を揺らして、気づいた。

服がびしょ濡れで、息が荒い。

つまり、あの後雨宿りもせずに雨に打たれ続け、体調を崩したようだ。しかも、周りに散らばる灰：ノイズか。

その戦闘の時点で無理をしていたのだろう。

どこか、彼女を二課の目に晒さずに療養させられる場所は：

…最悪だな。今わたしがやろうとしていることは裏切り行為に他ならない。そう思つて自嘲すると、ふと人の気配を感じて顔を上げた。

そこには響さんの親友だという小日向未来さんがいた。
彼女なら…

“また巻き込むの？ 平和の中で生きてきた人を”

これは…彼女の言葉か。

うん、そうだね。…わたしの本質は、他力本願は、多分変えられない。

でも、この思いは、助けたい願いは本物だと思うから、仲間響さんが信じた人を助ける縁よすがを、わたしに下さい。

「巻き込んでごめん下さい。この子を、任せていい？」

未来さんは数瞬考えて、不安げな顔をして、それでも頷いてくれた。

わたしの罪が、また一つ増えた。

s i d e 立花響

「ノイズですか？」

朝、どこかに行った未来。先に登校したのだろうかと思つたわたしは、追いかけるように教室に向かった。

そんな朝、師匠から電話がかかってきた。

「市街地第五区域にノイズのパターンのパターンを検知している。未明ということもあり、人的被害がなかったのが救いではあるが…ノイズと同時に聖遺物“イチイバル”のパターンも検知したのだ。」

それって…

「ということは師匠、クリスちゃんがノイズと戦ったということでしょうか？」

「そうだろうな。」

でも、それじゃあ…

「どうした？」

師匠に思ったことを言ってみた。

「あの子、帰るところないんじゃないかって…」

「そう…かもな。この件についてはこちらで引き続き捜査する。響君は」

「はい。わかりました。」

電話を切ったわたしは、教室に入ったんだけど…

「未来…?」

未来は席にいなかった。

先によつてきていた弓場さん達も居所を把握していないらしい。

「小日向さん、今まで無断欠席なんてなかったんですが…」

確かに、そうだ。未来はわたしみたいなタイプじゃない…

じゃあ、どうして?

三人と話をしながらも未来のことを考えるのをやめられなかった。

side 小日向未来

特異災害対策機動部二課響を巻き込んだ人達に所属するヴァイスさんに託された女の子は著しく体力が失われかなりマズイ状況だった。

ふらわーのおばちゃんに無理を言つて二階のこの部屋を貸してもらつた。今度恩返ししなきゃ…

そして、任された女の子は今も熱に魘されて苦しそうだ。

ヴァイスさんも可能な限り様子を見に来るつて言つてたけど…

すると、女の子が跳ねるように起き上がった。

周囲を見回していた。

「よかつた。目が覚めたのね。びしょ濡れだったから着替えさせてもらったわ。」

それを聞いて

「か、勝手なことを！」

と立ち上がる女の子。でも、下着の替えまでは持つてないから…

と、急いで弁明する。

「未来ちゃん、どう？お友達の場合は。」

聞こえたのは二階に上がってきたふわーのおばちゃんの声。私は感謝の意を示した。

「目が覚めたところです！ありがとうございます。布団まで貸してもらっちゃって…」

「気にしないでいいんだよ。あ、お洋服、洗濯しておいたから。」

重ねて感謝を示しつつも、たくさんの洗濯物の入ったカゴを持っているおばちゃんに、手伝いを申し出た。

お礼ということで、手伝うことにしたのだ。

洗濯物を手伝って、女の子のところまで戻ってきた。
今は体を拭いているところだ。

「あ、ありがとう…」

背中を拭きつつ、気になる事に蓋をして黙々と作業を進める。

「何も…聞かないんだな…」

確かに、この子の恐らく痣であろう傷跡。

何が原因でこうなったのか、気になってしまう。

それは確か。だけど…でも…

「私、そういうの苦手みたい。今までの関係を壊したくなくて…なのに、一番大切なものを壊してしまった。」

そう、感情が溢れ出して、響にたくさん酷いことを言ってしまった。関係を壊したの

は、私だ。

「それって…誰かと喧嘩しちまったってことなのか？」

アハハ…痛いところ突いてくるなあ。

「うん…」

今も、この子の背中を拭くことに集中しているつもりで、別の話題で頭を満たしたつもりで、延々考えてしまう。

私…どうすればいいんだろう…？

side Re 立花響

リディアンの屋上、昨日陽だまりを失った場所で呆然と口に出す。

「未来…無断欠席するなんて一度もなかったのに…」

その時、屋上に繋がる扉が、開いた。

そして開いた先、そこに居たのは…翼さんだった。

二人でベンチに座る。

「わたし、自分なりに覚悟を決めたつもりでした。守りたいものを守るためにシンフォギアの戦士になるんだって…でもダメですね…小さな事に乱されて…何も手につきません。わたし、もっと強くなりたいのに、変わりたいのに…」

「その小さなことが、立花の本当に守りたいものなのだとしたら…今のままでもいいんじゃないかな?…立花は、きっと、立花のまま強くなれる。」

「翼さん…」

わたしの小さな言葉に翼さんは真剣に向き合ってくれた。

「奏のように人を元気づけるのは、難しいな…」

「いえ…そんなことありません…！前にもここで同じような言葉で親友に励まされたんです。それでもわたしは…また落ち込んだんじゃない。ダメですよー…」

空を見てから、話題を変える。

「翼さん、まだ痛むんですか？」

「大事を取っているだけ、気にするほどじゃない。」

「そっか、良かったです。」

そして翼さんは続けて口を開いた。

“絶唱”。敵味方問わず、全てを破壊する滅びの歌。

その代償と考えれば、安い…と。

でも、わたしは思った。

2年前、ライブの直後、辛いリハビリに耐えられたのは、翼さん、そして奏さんの歌に励まされたから。

そう思い、そう伝えた。

翼さんの歌は破壊の、滅びの歌だけじゃない。

聞く人を元気にする歌だって、わたしは知っている。

それも、合わせて伝えた。

「だから、早く元気になってください！わたし翼さんの歌が大好きです！」

「なんだか、私の方が励まされているみたいだな。」

その言葉にわたしは驚いて、変な声を出した。

sideヴアイス

「たった一人、理解してくれると思った人もアタシを道具のように扱えばかりだった。誰もマトモに相手してくれなかったのさ。」

服を着替えた女の子、クリスさんはそう語った。

親を殺された自分は一人で生きてきた。友達どころではなかったのだと。

「大人はどいつもこいつもクズ揃いだ。痛いと言っても聞いてくれなかった。やめてと言っても聞いてもらえなかった。アタシの話なんて、これっぽっちも聞いてくれなかった。」

ねえ、どう思う？ 囚われの人？

あなたも同じような気持ちだったのだろうか。

答えて欲しい。わたしはあなたのことを知らなければならない。

いや…それすら自己満足か。なるほど、悪辣で、傲慢だ。

結局、自分のことだけ考えて、最後の最後で自分は何もしない。選択を他人に任せてしまう。

話は終わつたか…

壁に寄りかかるのをやめて “ふらわー” 近くの路地裏から出ようとして…警報が鳴った。

クソツタレ水銀の声が聞こえた気がした。

「さあ、此度の恐怖劇グランギニョルを始めよう。」

世界が変わっても、わたしは囚われたままか…!

忌々しい…!

白は走る。

背中を押すのは義務感か、怒りか、それとも焦燥か。

第十八話 贖罪の一步

side 雪音クリス

突如鳴り響いた警報音にアタシは戸惑う。

「おい…一体なんの騒ぎだ…?」

「なについて…知らないの!?!ノイズが現れたのよ!警戒警報知らないの!?!」

アタシは未来の言葉に愕然とした。

それってつまり…

「クリス…!?!」

未来の声が聞こえた気がしたけど、それを気にしていられなかった。
バカ…アタシってばなにやらかしてんだ…！

ノイズが現れたのは、アタシがここまで来たからだ。

もつと言えば、アタシがソロモンの杖を起動させたから…

戦争の火種を消すために…フィーネの役に立つために…

理由なんざどうでもいい、ただ…

「アタシのせいで関係のないやつらまで…！」

最も許せないのはこの惨状を生み出した、自分自身。

叫び、悔しさに膝から崩れ落ちた。

頬を何かが伝う。

「アタシのしたかった事はこんなことじゃないッ……でもいつだってアタシのやることは……いつもいつもいつもッ！」

ノイズがやって来た。

朝とは比べものにならない量だ。

この統制された動き……間違いなくソロモンの杖で制御されている。

フィーネが……差し向けたんだろう。

「アタシは……だからッ！関係ないやつらのところになんて行くんじゃないやねえ！」

ノイズが迫る。

フィーネに操られたソレは動きに人の意図がある。

それを見て、避ける。

「Killter Ichai……ゴホッゴホッ！」

歌おうとして……しくじった。迫るノイズ。

クソツッ！まだ何もできて…！

だけど、アタシの命は何故か尽きなかった。

目の前に現れた赤髪の男が、コンクリートを捲り上げて飛行型ノイズの攻撃を防ぎ、更には周りの小型ノイズにぶつけて反撃までしてみせた。…理解できなかったのは、足を地面に叩きつけた振動で、つまり単純な脚力でコンクリートが捲れたことだが。

「はああ…！」

小型ノイズの突進まで同じ方法で防いだその男は、アタシを抱えて近くのビルの屋上まで飛び上がった。

「大丈夫か…？」

思わず離れてしまったが…そこに飛行型ノイズが現れた。
今度こそ…

「Killiter Ichivaltron」
銃 爪 に か け た 指 で 夢 を な ぞ る

イチイバルのシンフォギアを纏ったアタシは、アームドギアを出して飛行型ノイズを迎撃し、ノイズは爆散した。

「ご覧の通りさ！アタシのことはいいから他のやつらの救助に向かいな！コイツらはアタシがまとめて相手するって言ってるんだよ！」

屋上から飛び降りて、ノイズを迎撃する。

「着いてこいグズ共！」

ノイズを川辺に誘導し、襲いかかってきた飛行型をすれ違いざまに攻撃、破碎した。

機関銃で、ボウガンで、時にミサイルで、アタシはノイズを殲滅していく。

アタシは、アタシにできることを……！

s i d e 立花響

ノイズ発生 of 報告を聞き、走っていると、ヴァイスさんから通信が来た。

「響さん、ごめん。そちらに行けそうにない。面倒なやつに遭遇した。」

「……わかりました！」

ヴァイスさんは「死の誘引」……わたし達奏者で言うアームドギアがない状況だ。

あまり時間をかけてはいられない……

しかも、ノイズが一斉にどこかへ向かって……

瞬間、悲鳴が聞こえた。

その発生源と思しき建物に入り、中を見回す。

「誰かー！誰か今…ッ！」

声を出したのと同じタイミングでノイズの触腕が下りてきた。

咄嗟に避け、崩落する床から抜け出して着地したけど…

上方にいるノイズを目視する、まるでタコのような形だ。危なかった。そう思って大きく息をしようとして、誰かに口を塞がれた。

そこに居たのは、わたしの陽だまり、未来だった。

未来は携帯電話の画面に文字を表示して、ノイズの特徴と状況を教えてくれた。

このタコのようなノイズは、大きな音に反応する。

そして近くに未来と、一緒に逃げていたふらわーのおばちゃん。

つまり、シンフォギアを纏うために歌うことができない。

どうしよう…そう考えていた時、未来は新たな文章を画面に表示した。

それを見て目を見開く。

咄嗟に携帯を取り出し、拒否しようと文章を表示して、未来に見せた。

それに対する未来の返答を見て、わたしは嬉しくなった。

でも、それでもダメだ、未来を危険に晒したくない…！

そう思って、文章を打とうとして、未来がやんわりとその手を押さえた。

わたしの耳に囁く未来。

「わたし、響にひどいことした…今更許してもらおうなんて思っていない…それでも一緒にいたい…私だって戦いたいんだ…！」

「ダメだよ…未来…」

「どう思われようと関係ない……！響一人に、背負わせたくないんだ……！」

立ち上がった未来は、声を大にして言った。

「私、もう迷わない！」

ノイズが、未来の声を捉え動き出した。

駆け出す未来とそれを追うノイズ。

それが建物から出たのを見計らってふらわーのおばちゃんに近づき……戦うために、歌った。

「Bal^喪wis^失syal^まl^でnes^のcell^カgun^ウgnir^ンtron^ト」

建物から出て、緒川さんにおばちゃんを託して未来を探すために走る。

未来は今も走っている。

囿になって、ノイズの気を引くから、と。

陸上部の逃げ足ならなんとかなると、わたしが助けられると信じているから、と。

ただの文字から未来の思いが痛いほど伝わってきた。

わたしに…託してくれたツ！

応えたい！

シンフォギアでみんなを助けるなんて思い上がりだった。

人助けは一人ではできない…助ける人も、助けられる人も、一生懸命だから、初めて
“人助け”なんだ！

だから、二年前のライブのあの日、あの場所で奏さんはわたしに「生きるのを諦めるな」と叫んでいたんだッ！

今なら…わかる！

未来の悲鳴が聞こえた。

まだ遠いッ！

そうだ、今ならわかる。この助けたいという思いは…惨劇を生き残った思い出なんかじゃない。託された…思いなんだッ！

脚部のジャッキを伸ばして、足と一緒に蹴る！

ノイズのストンプで道が壊れ、下に落ちていく未来、見つけたッ！まだ…間に合う！

腕のパーツにエネルギーを集め、ノイズに向けて押し込んだ。
爆砕するノイズを無視して未来の元へ。

空中で抱きかかえて、そのまま着地体勢へ。
腰部ブースター、脚部ジャッキを最大展開。

着地と同時に地面に叩きつけた。

それでも勢いを殺しきれず、二人で川縁を転がった。

「かつこよく着地するって難しいんだなあ…」

「あつちこつち痛くて…でも、生きてるって感じがする。ありがとう。響なら絶対に助けに来てくれると信じてた。」

「ありがとう。未来なら絶対に最後まで諦めないって信じてた。だって、わたしの友達だもん。」

お互いに感謝と思いを伝えると、未来に押し倒された。

「怖かった…怖かったよお…」

「わたしも、怖かった…」

「私、響が黙っていたことに腹を立ててたんじゃないの…！誰かの役に立ちたいと思っ
ていたいつもの響だったから…でもッ！」

「悲しいこと、苦しいこと全部背負って、私はそれがたまらなく嫌だった…また響が大き
な怪我をするんじゃないかって心配してた…」

「だけど、それは響を失いたくないわたしのわがままで…そんな気持ちに気づいてし
まって…今までと同じようになんてできなかつた…！」

その言葉は、未来の思いと葛藤の凝集だった。

「未来…それでも未来はわたしの…ヘッヘ…ハッハハハ！」

未来は戸惑ってるみたいだけど、だけど…

「だってさ…髪の手ボサボサ、涙でぐちゃぐちゃ、なのにシリアスなこと言ってるし…」
「もう、響だって似たようなものじゃない！」

「ぬえっ…嘘ッ！未来、鏡…貸して！」

すると、未来はおもむろに携帯電話を取り出して

「鏡はないけど、これで撮れば…」

そうして、わたしと未来は写真を撮った。

それを見てみると、

「ぬわああ…す、すごいことになってる…呪われてるレベルだ…」

「私も想像以上だった…」

わたし達は、二人で笑いあつた。
やっぱり、わたしの守りたいものは、ここにある。

一人は陽だまりに帰り、一人は夜を彷徨うまま。
そして魔人は…元凶と対峙していた。

第十九話 幕の裏側にて

sideヴアイス

「聞きたい事はありますが、アイムートが望んでいないので聞かないことにしますよ。しかし：芸がない。単細胞生物でももつとマシなことをしますよ。ぶっ飛ばされたいんですか？」

ノイズの“道”によって、わたしは痴女の元に歓待を受けた。

誰かを招く時、普通、同じことをそっくりそのまま繰り返すか？ 答えは否だ。少しは趣向を凝らすだろう。

「煽ったつもりか？ 今の貴様は“ノイズに接触できて身体能力が高いだけ”だ。私に勝てるっても？？」

「なら…試してみますか？」

わたしの宣言が合図となって戦端が開かれた。

飛来する七体の飛行型、地上にも二桁単位でノイズがいて、全てがわたしを標的にしている。

甘いッ！わたしがDie^あのira^世時^界空で何度戦いを繰り返したと！

わたしに向けて空から飛来するノイズを最小のステップで躲す。

そしてそのまま掌底を、蹴りを叩き込んでいく。

痺れを切らしたのか地上のノイズもわたし目掛けて襲いかかってくるが、震脚で地面を砕き、周囲に破片を蹴り飛ばす。

聖遺物による位相差障壁の無効は、わたしでも可能だ。

「なるほど、腐っても魔人。聖遺物の特質を失ってなお、これ程か。だが、それ故に惜しいな。」

「どういうことですか？」

終わりの名を持つ蛆虫ことフィーネの言葉に眉を顰める。

「貴様とて、無敵ではないということだ。」

そう言って尊大な調子を崩さないフィーネ。

まずはあの腕を折ろう。あの杖でノイズを操っているならそれを操作できなくさせる。

しかし、わたしが一步踏み出したところで、ノイズの大量召喚。

小型ノイズを吐き出す大型が五体。城塞のような超大型が一体。小型は数えるのも億劫になる程だ。

「なっ！」

これにはわたしも驚いた。

なるほど、 “死の誘引” がない今最も効果的な方法だ。

「貴様なら、しばらくすればこれも突破してしまうのだろうが…本来なら一分もかかるまいに…無様だな。貴様は私の悲願の成就まで静かにしている。」

そう言って去っていくフィーネ。

「待て…」

「そこで無様に足掻いている。」

「フィーネエエエエエ！」

わたしがノイズを全て倒したのは一時間後、超大型一体、大型5体、吐き出された小型を含めて713体。

周辺の人的被害は事前の避難誘導もあつてなんとか0に抑えられた。しかし…この結果はわたしの中に凝りとして残った。

s i d e 立花響

未来との仲直りから一日経って、わたしは未来を連れて二課の本部に来ていた。

「学校の真下にこんなシエルターや地下基地が…」

わたしが初めて見た時はそれどころじゃなかったから未来がちよつと羨ましい。

そう思っていると、廊下の先に翼さんがいた。

呼びかけて駆け寄る。

「立花か。そちらは確か、協力者の…」

「はじめまして、小日向未来です。」

「うえっへん。わたしの一番の親友です！」

一番大事なことを言っただつともりだつただけど…

「立花はこういう性格ゆえ、色々と面倒をかけると思うが支えてやってほしい。」

「いえ、響は残念な子ですのでご迷惑をお掛けしますがよろしくお願いします。」

と、二人で話していた。

え、スルーされた？

「ぬえっ？何？どういうこと？」

「響さんを介してお二人が意気投合しているということですよ。」

結局、緒川さんにはぐらかされ、真意は掴めなかった。

「でも、未来と一緒にここにいるのは、なんかこそばゆいですよ。」

「小日向を外部協力者として異色登録させたのは司令が手を回してくれた結果だ。それでも不都合を強いるかもしれないが……」

「説明は聞きました。自分でも理解しているつもりです。不都合だなんてそんな……」

「……そういえば師匠は？あと、ヴァイスさん。」

「私達も探しているのだが、二人とも見当たらないのだ。」

翼さんも知らないらしい。

「あくらあ…いいわね。ガールズトーク。」

「どこから突っ込むべきか迷いますが、取り敢えず僕を無視しないでください。」

「了子さんもそういうのも興味あるんですか？」

「モウチのロゥン！私の恋バナ百物語聞いたら夜眠れなくなるわよ？」

「まるで怪談みたいですわね…」

了子さんの恋バナ…！きつとうつとりメロメロオシャレで大人な銀座の恋物語に違いないッ！

という心はダダ漏れだったらしい。

「そうね…遠い昔の話になるわね…こう見えて呆れちゃうぐらい一途なんだから…」

「おぉー！」

わたしと未来の声が重なる。

「意外でした。桜井女史は恋というより研究一筋であると…」

確かに、翼さんの言う通り、意外だ。でもそれだけに気になるッ！

「『命短し恋せよ乙女』と言うじゃない。それに女の子の恋するパワーって凄いだから。」

「女の子…ですか。」

緒川さんが呟いた次の瞬間、恐らく緒川さんは星を見たのだろう。とだけ言うことにしたい。

気づいたら緒川さんの隣に瞬間移動もかくやというスピードで動いていた。南無三。

「そもそも、聖遺物の研究を始めたのも…そもそも…」

何かに気づいたように言葉を止めた了子さん。

わたしと未来はその先を急かしたが、結局はぐらされてしまった。

「と、に、か、く。できる女の条件は、どれだけいい恋できるかに尽きる訳よ！ガールズ達もいつかどこかでいい恋、なさいね。」

そう言つて去つていく了子さん。

ガードは固い…しかしいつか聞き出してみせる…！

「ふひー…疲れた…」

しばらくするとヴァイスさんが戻つて来たようだった。

「ヴァイスさん。 師匠を見ませんでしたか？」

「司令ですか…？今は多分“任された仕事”を完遂しようとしているんだと思います。街の方にいらつしやいましたし、恐らくそうではないかと。」

「その…任された仕事というのは？」

翼さんがわたしも気になることを聞いてくれた。

「二年前に司令が受け持っていた“とある少女の搜索、保護”の事です。これ以上は言わなくてもいざれ分かると思います。」

緒川さんと翼さんはピンと来た顔をしていたが、わたしにはよく分からなかった。

「と…う…は…」

「はい。司令が戻ってくるのはもう少し先になるかと。」

「なるほど…次のスケジュールも迫って来ましたね…」

わたしは緒川さんの言葉に驚いた。

「もうお仕事入れてるんですか!?!」

「少しづつよ。今はまだ慣らし運転のつもり。」

「じゃあ、以前のような過密スケジュールじゃないんですよね!」

「だったら翼さん、デートしましょう!」

「デート?」

「突飛だなあ…」

翼さんは驚き、ヴァイスさんは苦笑いしていた。

変わったのか、変えられたのか、
そう問う者達の中で未だ変わらぬ魔人が一人。

第二十話 夢と祈りと

side ヴァイス

「ねえ……やっぱりダメなのかな……？」

あおいさんに貸してもらった傘で雨を凌ぎつつ街を歩く。

今は司令を探すという名目で外に出してもらっている。要は息抜きの散歩だ。

試しに、自らの内側に閉じこもって出てこない眠り姫アイムトに呼びかけるも、結果は芳しくない。

それにしても街というのは進む度、様々な音が聞こえる。

自然の音、人の声、機械の駆動音：

中には、窓ガラスが割れる音もあつたりする。

右上に視線を向けると、第二号聖遺物“イチイバル”の奏者、雪音クリスさんの姿が見えた。

彼女はマンションの一室から飛び出し、そのままシンフォギアを纏ってどこかへと去っていった。

「難儀してるな…司令も。」

彼女、クリスさんは恐らく分からなくなっているのだ。

自分が何のために、何をしたいのか。

誰が敵で、誰が見方なのか。

そんな彼女に司令の言葉はどれだけ響くのだろうか。

正直、彼女には仲間になって欲しいと思っている。

わたしもそろそろガス欠だ。フィーネの前では強がってみせたが、向こうも気づいただろう。

果たして彼女がどんな道を選ぶのか。

わたしにはそれがアムートと彼女の大切な人々にとってより良い選択肢になることを願うしかない。

雨は降り続くばかりだ。

side 立花響

翼さんとの外出——デートが楽しすぎて眠れなかったわたしは未来が全力で揺すり起こした事で最悪の事態を回避：できなかつた。

翼さんとの待ち合わせの時間に遅刻してしまったのだ。

「すみません翼さん！」

「お察しの事とは思いますが…響のいつもの寝坊が原因で…」

遠回しにわたしを咎める未来の言葉、その通りなだけにわたしは何も言えない。

荒い息を整えて、顔を上げたわたしと未来の目にはボーイッシュな服装の翼さんが映った。

凄い力の入れ様だった。

「すっごい楽しみにしてた人みたいだ…」

「誰かが遅刻した分を取り戻したいだけだ！」

小声で呟いたはずだったが、翼さんにバツチリ聞こえていたらしい。

なるほど…

「翼イヤーはなんとやら…」

その後は3人で小物を物色したり、映画に感動して涙を流したり、ソフトクリームを食べ歩きながら辺りを見回ったりもした。

服飾店では服を試着して楽しんだ。

道中、翼さんを見たというファンが全力で翼さんを探し始めたのでそれを3人でやり過ぎしたり。

ゲームセンターでぬいぐるみを手に入れるために悪戦苦闘した時は変な声を出してしまったり、怒りに駆られてシンフォギアを纏おうとして翼さんに止められたり。

結局、大声を出しまくったわたしを収めるためにカラオケへとやってきたのだが、ここで意外な事実が判明した。

翼さん、演歌が大得意だったのだ。

そのカツコイイ姿に痺れたりして過ごしつつも、時間は日が沈む頃になった。

わたし達は、高台にある公園へとやってきた。

「翼さん！」

「二人とも…どうしてそんなに元気なんだ…？」

「翼さんがへばりすぎなんですよ〜」

「今日は慣れない事ばかりでしたから…」

「防人であるこの身は、常に戦場いくさばにあつたからな…」

翼さんは一呼吸置いて続けた。

「本当に今日は、知らない世界をばかり見ていた気分だ。」

その言葉を聞いて、思ったことを伝えようと思ひ翼さんの手首を掴んで引つ張った。

「おい、立花何を……！」

翼さんが息を呑んだ。綺麗な夕焼け。海岸線と街並み。

これは、翼さんが守ってきた景色。

わたしは遠くを指さして言った。

「あそこが待ち合わせした公園です。みんなと一緒に遊んだところも、遊んでいないところも、ゼーんぶ翼さんが知ってる世界です。」

「昨日に翼さんが戦ってくれたから、今日みんなが暮らせている世界です。だから知らないなんて言わないでください。」

「そうか……これが奏の見てきた世界なんだな……」

翼さんは、過去を懐かしみつつも、未来を見据えた眼差しをしていた。

「えっ?! 復帰ステージ!?!」

翌日、翼さんが教えてくれたのは翼さんの復帰ステージの情報だった。

「アーティストフェスが10日後に開催されるのだが、そこに急遽ねじ込んでもらったんだ。」

「なるほど…」

「倒れて中止になったライブの代わりということだな…」

チケットの裏面の会場を見て、目を見開いた。

2年前の惨劇の日の会場。

修復されたとは聞いていたけど…

「翼さん……ごこつて……」

「立花にとつても辛い思い出のある会場だな……」

翼さんはそう言うけど……

「ありがとうございます。翼さん。」

「いくら辛くても過去は絶対に乗り越えて行けます……そうですね！翼さん！」

「そう在りたいと、私も思っている。」

翼さんは凛々しい顔を、していた。

side Re ヴァイス

「ノイズ……ですか。」

今日は翼さんの晴れの舞台復帰ステージなのだが…
フィーネめ、こちらの嫌がることをするのが余程好きと見える。

「師匠！現場にはわたしだけで…」わたしも出撃します。「ヴァイスさんも一緒でお願いします！今日の翼さんには自分の戦いに臨んで欲しいんです。あの会場で、最後まで歌いきって欲しいんです。お願いします。」

響さんに言いたいこと全部言われちゃったなあ…

「司令、わたしも同じ気持ちです。今の翼さんはようやく夢に向けて踏み出せた一人の女の子です。邪魔するのは無粋でしょう？」

「響君、やれるのか？」

「はい！」

「ヴァイス君は…聞くまでもないか。」

「ええ。勿論です。」

わたしと響さんは現場に急いだ。

「またコイツかッ！」

ライブ会場から少し離れた地点に、先日フィーネが召喚した城塞形状の超大型ノイズとそこから吐き出されたかなりの量の小型ノイズがいた。

すると、ノイズに攻撃が加わる。

銃撃とミサイル…位相差障壁を突破している…これは…!!

そこに居たのは、イチイバルの奏者、雪音クリスさん。

加勢してくれるのか…!

艦砲射撃で吹き飛ばされたクリスさん。

それを見て、回収に動く。

もしかしたら味方なのは今回限りかもしれないが、それでもむぎむぎ仲間を死なせるようなことはしない！

ダメージで起き上がれないクリスさんの目の前に割り込み、弾丸と化したノイズを蹴り碎いた。

その隙に響さんが小型を粗方一掃するが……
しかし、その先には超大型の射線が通っている。

放たれた弾丸をクリスさんが、砲身をわたしが破壊して響さんを間一髪で守る。

「貸し借りはなしだッ！」

素直じゃないなあ……

「ありがとう！」

「礼もいらねえ！」

「響さんッ！デカいの固定するからぶっ壊して！」

「はいッ！」

「スルーかよッ！」

「クリスさんは小型狩りながらデカいの牽制して！」

「わーったよ！」

わたしは指示を出し終わると直上まで飛び上がる。

回転しながら運動エネルギーを貯めていく。

艦砲射撃はクリスさんが妨害してくれている。

ここだッ！

体を捻りながらノイズの上部に掌底を叩き込んだ。

超大型は地面にめり込み、瞬間、わたしに合わせて飛び込んで来た響さんの全力右ス
トレートが側面に突き刺さったノイズは、そのまま爆散した。

い。
あとから聞いた話だが、翼さんの曲の終わりとはほぼ同タイミングの出来事だったらし

気づいた時にはクリスさんはいなくなっていたが…

遠からず、彼女の道は響さん達と交わる。

それが確信できた。

これなら…

「ヴァイスさんッ!？」

わたしは意識を失った。

夜と朝と交わる時間の少女達の戦いは一旦幕を引いた。
ただ、そこに魔人はいない。

第二十一話 夢を見る

side 立花響

「う…あ…」

「ヴァイスさん！大丈夫ですか!？」

「目覚めたばかりで声が…響きますね…ハハハ…」

「冗談言ってる場合でもないだろう。」

師匠もメディカルルームに入ってきた。冗談言ってる場合じゃないって…

「SC波形がはっきり測定出来ん。はっきり言って異常だ。何があつた？大体の想像はつくが。」

その言葉を聞いて押し黙ったヴァイスさん。
しばらくしてその口を開いた。

「今のわたしは云わば『充電口の壊れた携帯電話』です。外からエネルギーを入手できず、自分の魂を削って自らを稼働させるだけのエネルギーを生成しています。」

ヴァイスさんの口から飛び出したとんでもない発言に血の気が引く。それはつまり、命を削っているのと同義ではないのか？

「充電口を復旧させる方法は？」

「アイムト彼女が戻ってくることに。それだけです。厳密に言えばわたしが表出しているこの状況が異常なのですから。」

「戻ってきて、その後、君はどうなる？」

「精神の深層にて二度と目覚めない眠りにつくと思います。もう彼女を不安定たらしめていた要素はなくなるのですから。わたしがいなくても大丈夫です。」

「そんな…二度と目覚めないってことは、死ぬのと殆ど同じじゃないですか…！」

そんなわたしの叫びにヴァイスさんは首を横に振った。

「わたしが望んだことなんです。全てを忘れて眠りたい。わたしがそう望んだ結果なんです。響さんが気に病むことは無いですよ。それに、わたしはあくまでもアイムートの代わり。本来彼女が歩む筈の安寧を横取りした不届き者です。だから、いいんです。」

「本当に…それでいいのか？」

もう一度静かになるメディカルルーム。目を閉じてから師匠の言葉にヴァイスさん

は苦笑しつつも答えた。

「アイムートが、〃生きろ〃と言うなら、まあ、考えます。」

「素直じゃないな。」

「貴族の出なもので。」

師匠とヴァイスさんの会話についていけないわたしは、何がなにやら分からなかった。

ただ、不思議と悪い予感はしなかった。

side ヴァイス

意外だった。生きることを諦めたわたしが遠回しとはいえ〃生きたい〃と言ったことが。

「変わったのか、変えられたのか…」

少し、苦笑する。

昨日の問答から一夜経ち、わたしはフィーネのアジトと思しき場所にやってきていた。

建物にクリスマスさんが入っていくのを見て、あたりである事を確信した。と、同時に司令が二課の諜報員を連れて車で来た。

「ヴァイス君…休んでおけと言ったろうに…」

「来てしまったものはしょうがないでしょう。」

司令の言葉に屁理屈で返してから二人で先に中へと押し入る。

そこに居たのは複数人の死体を呆然と見つめるクリスマスさんだった。

「……違う……！アタシじゃない！やったのは……！」

だろうね。君は望んで人を殺せる程冷徹な人間じゃない。

「誰もお前がやったなどと疑ってはいない。全ては君や俺達の傍に居た彼女の仕業だ。」

「そうですよ。貴女が疑われる謂れはない。というより、司令もわかってたんですか？

〃彼女〃のこと。」

「ああ……確定ではないが、〃彼女〃が米国と通じていた公算は高い。」

「だから、あの文面か。」

反響定位で室内を探りつつ、目線を一つの死体に向ける。

そこに書かれていたのは、
I Love You
SAYONARA
〃の文

字。

それが、本心なら…どうして…

そして、わたしの反響定位は紙がめくられる瞬間、ブービートラップの気配を感知した。

「しまっ…！」

直後、信管が作動して爆発。

煙が晴れると、瓦礫の一部を持ち上げてクリスさんを助けた司令が見えた。

「ゲホツゲホツ…司令、すみません。探知が間に合いませんでした。」

「反響定位の精度も下がっているのだから仕方あるまい。」

そうですね…ありがとうございます。と相槌を打って、わたしも飛んできた瓦礫を脇に退けた。

「どうなってんだよ……こいつは……!」

「衝撃は、発勁でかき消した。」

「そうじゃねえよ!なんでギアを纏えない奴がアタシを守ってんだよ!」

クリスさんは無理やり司令の傍から離れてそう言った。

「俺がお前を守るのは、ギアのあるなしじゃなくてお前よか少しばかり大人だからだ。」

「大人……?」

「アタシは大人が嫌いだ!死んだパパとママも大嫌いだ!」

「とんだ夢想家で臆病者、アタシはあいつらと違う!戦地で難民救済?歌で世界を救う?いい大人が夢なんか見てるんじゃないじゃねえよ!」

「大人が夢を……ね。」

「本当に戦争を無くしたいのなら、戦う意思と力を持つ奴らを片っ端からぶっ潰していけばいい！それが一番合理的で現実的だ！」

「そいつがお前の流儀か。なら聞くが、お前はそのやり方で戦いをなくせたのか？」

「ツ！それは…」

…そうでしょうね。力で破壊するだけでは、不満と軋轢を生むばかり。しばらく溜まって、吐き出されるだけ。そうして表出した不満と軋轢は新たな戦いの合図になってしまう。永遠に終わらない憎しみの連鎖が続くだけ。どこかで、根本的にやり方を変えなきゃいけないかった。

…それはわたしも似たようなもの、か。

「いい大人は夢を見ないと言ったな。そうじゃない。『大人だからこそ』夢を見るんだ。大人になったら背も伸びるし、力も強くなる。財布の中の小遣いだってちったあ増える。子供の頃は見るだけだった夢も、大人になったら叶えるチャンスが大きくなる。」

夢を見る意味が大きくなる。」

「お前の親はただ夢を見に戦場に行ったのか？」

違うな。『歌で世界を平和にする』っていう夢を叶えるために、自ら望んでこの世の地獄に踏み込んだんじゃないのか？」

「なんで…そんなこと…」

「お前に見せたかったんだろう。夢は叶えられる。という揺るがない現実をな。」

「お前は嫌い」と吐き捨てたが、お前の両親はお前の事を大事に思っていたんだらうな。」

クリスさんはようやく誤解が解けたのか、司令が抱きしめると、その胸の中で泣いていた。

しばらくすると、二課の諜報員も撤収を始めた。わたしも一緒に本部に戻ることになった。

「やっぱり、アタシは…」

そう言つて立ち止まるクリスさん。
考える時間は、必要だろうな…

「一緒には来られない、か?」

「お前は、お前が思っている程一人ぼっちじゃない。お前が一人道を行くとしても、その道は遠からず俺達の道とも交わる。」

「今まで戦つてきた者同士が一緒になれるつて?世慣れた大人がそんな綺麗事を言えるのかよ…?」

「ホント、捻てるなあ…ほらよつ!」

司令は、特殊な通信機をクリスさんに投げ渡した。

限度額内なら買い物もできて電車、バスが使える優れものだ。ついでに言えば、わたしも持っている。

そして、最後にクリスさんが貴重な情報を教えてくれた。

「カ・デインギル！」

「フイーネが…言ってたんだ。カ・デインギルって…それがなんなのか分からないけど…ソイツはもう完成しているみたいなのを…」

「後手に回るのは癪だからな…こちらから打って出てやる…！」

わたし達は、そのまま二課本部へ戻った。

一人の少女は祈りを知った。

戦姫は揃い、破滅の塔も完成している。

舞台上上がるのは、あと一人。

第二十二話 手を繋ぎ、繋がれること

side ヴァイス

「はい、翼です。」

「響です。」

「少し収穫があった。…了子君は？」

二課本部に戻ったわたしは司令と共に緊急ミーティングに参加していた。

司令の言葉を聞いて司令室内を見渡して目当ての人物がいない事を探すが…
やはり、いなかった。

あの時、やはり問いただしておけば…

「まだ出勤していません。朝から連絡不通でして…」

「そうか…」

「了子さんならきつと大丈夫です！何が来たってわたしを守ってくれた時のようにドガンってやってくれます！」

守ってくれた…タイミング的にデユランダルの一件か…そんなことが…

「いや、戦闘訓練もロクに受講していない桜井女史にそのようなことは…」

「うえ？ 師匠とか了子さんって人間離れた特技とか持つてるんじゃないんですか？」

響さんの言葉に司令室が疑問に包まれた瞬間、通信が入った。

「やくつと繋がった…ごめんね寝坊しちやっただけ…通信機の様子が良くなってくて…」

咄嗟に反響定位を開始。向こうの音を探る。

「無事か？了子君。そっちに何も問題は？」

「寝坊してゴミを出せなかったけど…何かあったの？」

「良かったあ…」

「ならばいい。それより聞きたいことがある。」

反響定位による探知が終わった。これは…殆ど黒だけど、一応グレーと言ったところか…

確かに、出来れば信じたいのは事実。

でも、それが許される状況でないのもまた事実。

司令はどうするのだろうか。

「せつかちね、何かしら?」

「カ・ディングル」。この言葉が意味する物は?」

「カ・ディングルとは古代シユメールの言葉で『高みの存在』。転じて『天を仰ぐ程の塔』を意味しているわね。」

「何者かがそんな塔を建造していたとして、何故俺達は見過ごして来たのだ?」

「確かに…そう言われちゃうと…」

木を隠すなら森の中。塔を隠すなら土の中か。

自分の推測に嫌気がさす。

「だが、ようやく掴んだ敵の尻尾。このまま情報を集めれば勝利も同然。相手の隙にこちらの全力を叩き込むんだ。最終決戦、仕掛けるなら仕損じるなよ!」

「ちよつと野暮用を済ませてから、私も急いでそっちに向かうわ。」

緊急ミーティングは終わり、わたしも近くの機器に接続したキーボードでオペレーター達に混じって作業を進める。

「どんな瑣末な事でも構わん。カ・ディングルについての情報をかき集めろ!」

司令の言葉を聞き、カ・ディングルがどこにあるのかだいたい察しがついてしまったわたしは、二課本部の設計図を確認していた。

広木防衛大臣暗殺前後の各部構造、システムを比較、点検するために既に組まれていた検出プログラムを流用、改修してスキャンを開始。

並行して、響さんが初めてガングニールを纏った日から今日までのノイズの出現分布に日付のデータを添付していく…

次いで、警報が鳴り響く。

「飛行タイプの超大型ノイズが3体…いえもう1体出現！」

これが「野暮用」…か。本当に笑えない。

しかも、このノイズの出没分布データを見る限り…

「司令、お恥ずかしながらわたしはもう限界です。『もしもの時』に備えてここで待機させてください。」

「…うむ、わかった。その通りにしよう。」

他の面々が沈痛な顔をしているが、別にわたしは死なないし、死ぬつもりもない。

彼女^{アイムト}は必ず戻ってくる。

その確信があるから。

ふと、変わった自分に苦笑した。

わたしもわたしにできる事をしよう。

side 立花響

わたしはノイズ発生で厳戒態勢に移った二課本部からの通信で、状況を伝えられていた。

「今は人を襲うというよりも、ただ移動していると…」

「響…」

「へーき、わたしと翼さんでなんとかするから。だから未来は学校に戻って。」

「リディアンに…?」

「いざとなったら…地下のシェルターを解放してこの辺の人達を避難させなきゃいけない。未来にはそれを手伝ってもらいたいんだ。」

「う、うん…わかった。」

「ごめん…未来を巻き込んだじゃって…」

「ううん…巻き込まれたなんて思っていないよ。私がリディアンに戻るのは響がどんなに遠くに行ったとしてもちゃんと戻ってこれるように、響の居場所、帰る場所を守る事でもあるんだから。」

「わたしの…帰る場所…」

「そう。だから行って。私も響の大切な物を守るくらいに強くなるから。」

「小日向未来は、わたしにとつての“陽だまり”なの。未来のそばが一番あつたかいところ、わたしが絶対に帰ってくるころ。これまでもそうだし、これからもそう。だ

からわたしは絶対に帰ってくる。」

「響……」

「一緒に流れ星見る約束、まだだしね……」

「うん……！」

そうだ。わたしは絶対に帰るんだ。リディアンに、未来のそばに。

その思いがある限り、わたしは、絶対に負けない……！

「じゃあ……行ってくるよ。」

走る中、伝えられた最新の情報だと、現れたノイズの進行方向には//東京スカイタワー//があるらしい。

「カ・ディングルが塔を意味するのであれば、スカイタワーはまさにそのものじゃないでしょうか！」

「スカイタワーには俺達二課が活動時に使用している映像や交信と言った電波情報を統括・制御する役割も備わっている…」

二人共、東京スカイタワーに急行だ！」

通信を繋げつつも考える。

「スカイタワー…でもここからじゃ…」

すると、プロペラの回転音と風の音が聞こえ…わたしはたたらを踏んだ。

「なんともならない事をなんとかするのが、俺達の仕事だ！」

やってきたヘリコプターに乗り移り、スカイタワーを目指す。

少しすると、大型ノイズの姿をとらえた。

ヘリのスライドドアに掴まった状態から空中に躍り出る。

「Bal^喪wis^失ysal^まl^でne^のscel^カl^ウgun^ンgnir^トtron^ダ」

シンフォギアを纏ったわたしは、そのままの勢いでノイズに風穴を空けながら、地面へと降りる。

翼さんに合流したけど……やっぱり地面からじゃ……

「頭上を取られることがこうも立ち回り難いとは……!」

「ヘリを使って、わたし達も空から……ッ!」

直後、乗員を感知したのであろうノイズがヘリを攻撃、そのまま爆散してしまった。

「そんな……！」

「よくも……！」

そして飛来するノイズを避け、破壊できるものは壊したけど……
更に頭上から追加されてキリがない。

更に追撃を加えようと睨んでいると、ノイズに銃撃が刺さる。
攻撃の元にはクリスちゃんがいた。

「コイツがピーチクパーチク喧しいから、ちよつと出張ってみただけ、それに、勘違いするなよ……！お前達の助っ人になったつもりはねえ！」

直後に師匠が「助っ人」と訂正を入れた事でクリスちゃんの顔が赤くなる。

「そうだ。第二号聖遺物、イチイバルを纏う戦士。『雪音クリス』だ。」

その言葉に、分かり合えたとわかって飛びつくわたし。その後は翼さんによって地上と空中の役割分担をする事になった。

でも、少し楽になっても大局は変わってない…

少し離れたところで言い合っている翼さんとクリスちゃんと合流。クリスちゃんは、「分かり合えない」と言おうとしたみたいだけれど、わたしはそうは思わない。

「できるよ。誰とだって仲良くなれる。」

わたしはクリスちゃんと翼さんの手を握った。

今なら、前から分からなかった事が、一つわかる気がする。

「どうしてわたしにはアームドギアがないんだろうって、ずっと考えてた。ずっと半人前は嫌だなあって。でも、今はそうは思わない。何もこの手に握ってないから。二人とこうして手を握れる。仲良くなれるからね。」

「立花…」

翼さんも、言いたい事をわかってくれたみたい。

アームドギアから手を離して、クリスちゃんに伸ばしてくれた。

クリスちゃんは戸惑いながらも、一瞬だけ手を繋いでくれた。

「コイツにあてられたのか!？」

「そうだと思う。そして、貴女も。」

すると、わたし達を覆うノイズの影。

「親玉を叩かないと、キリがない…」

「だったらアタシに考えがある。アタシでなきやできないことだ。イチイバルの特性は長射程広域攻撃。派手にぶっぱなしてやる！」

その「派手」という言葉に、嫌な予感がしてしまう。

「まさか…絶唱を…!?!」

「バーカ！アタシの命は安物じゃねえ！」

「ならばどうやって…?」

「ギアの出力を引き上げつつも放出を抑える。行き場のないエネルギーを臨界まで溜め込み、一気に解き放ってやる！」

「だが、チャージ中は丸裸も同然、これだけの数を相手にする状況では…危険すぎる！」
「だけど、わたし達がクリスちゃんを守ればいいだけの事！」

作戦は固まった。わたしと翼で先に打って出た。

繋ぐ手、繋がる手。手を繋ぐのが、わたしの戦いだッ！

イチイバル：クリスちゃんがエネルギーを溜めきったのがわかる。

「託した！」

クリスちゃんはアームドギアを最大展開。大小のミサイルに機関銃を一気に解き放った。

ノイズがとんでもない速さで減っていく。

わたしと翼さんも地上に残ったノイズを倒しきった。

作戦の成功を喜んで、クリスちゃんに飛びついた。

「勝てたのは、クリスちゃんのお陰だよ〜！」

クリスちゃんの戦う理由、*“見つけた夢”*の内容を聞き出そうとして、電話が鳴った。
未来から…？

「響…！学校が…リディアンがノイズに襲われ…」

そこで電話を途切れた。

だって、ノイズは倒…して…

わたしは呆然とした。

人を殺す暴虐が襲うのは一所に非ず。
畏と知る者、知らぬ者。その差は…

第二十三話 減りゆくモノの中で

side ヴァイス

クリスさんが合流して少ししてから、厳戒態勢の二課に再度鳴り響く警報。

「…来ましたか。司令！」

「ヴァイス君…頼んだ！」

わたしがかけた声の意味を理解してくれた司令は、出撃許可を出してくれた。

保管庫で待機していたわたしは直通の外部エレベーターで地上に出た。

既にリディアンは襲撃されそうになっていて、前方にはかなりの量のノイズがいる。

…陽動だとわかっていても…！

迫るノイズを衝撃波で破壊しても、奥にいる大型を倒さなければずっとそのままだ。自らの出力低下が目に見えてわかり、齒噛みする。

やむを得ず魂を大きく削ってエネルギーを確保する。

記憶領域は、殆どなくなっちゃったな…

地面を割り砕くほどの力で一步踏み込み、最奥まで突き抜けた。

ノイズの群体に一筋割れ目が入り、直後、衝撃が伝播、一気に連鎖崩壊を始める。

学園の裏側にいたノイズを片付けたわたしは、正門方面から侵入したノイズを相手取るために校舎へと走った。

校舎は阿鼻叫喚の状態だった、手近なノイズに風穴を空けて襲われていた生徒にはシエルターへ逃げるよう伝えた。

目につく限りでも大型が5体、小型だけなら50…いや建物が影になっている。もつというな…

一先ず、大型の直上まで跳躍。そのまま先日もやった掌底で吹き飛ばす。

中にいた分、外に出ていた分も纏めて消し飛ばせたのはよかった。が…やはり手が足りない。

校舎内に入って、生存者を探して駆け回る。

中には、黒い灰…炭素転換された人間の末路もあった。

少しして、悲鳴を上げて立ち止まったりディアンの生徒三人組を見つけた。その目線の先には炭素転換された人間の名残が。

わたしには、シエルターに逃げるよう説得し、彼女達が無事に入るまで見守ることしか出来なかった。

炭素転換されては、元がどんな人間だったかすら分からない。彼女達は転換される前の人物に何を見ていたのだろうか。

なんとか3人を落ち着かせたわたしは、二課に連絡を取ろうとしたが繋がらなかった。

もし彼女の「あの言葉」が本音なら、殺しはしていない。そう信じたい。

そして、この襲撃で確定的になった、カ・デインギルの居所。

答えは、「二課本部エレベーターシャフト」。

そして、それを行えるのは設計者たる「桜井了子」のみ。

そしてその彼女は、今わたしの目の前にいる。

夕暮れ、人が美しく感じる瞬間にわたし達は対峙した。

「桜井了子、いえ、フィーネと呼びましょうか。貴女、カ・デインギルとやらで何をするつもりなんですか？」

「消え行く貴様に教えてもなあ……」

こちらを見下す尊大さ、かつてアイムートが共に過ごした「桜井了子」は完全に消滅したのでろう。

「……クリスさんの言っていた『バラバラになった世界が元に戻る』ということとも関係がありそうですが……だとしても、わたしは司令ほど優しくありません。」

「ならばどうする？」

「貴女を殺して止めます。」

わたしの言葉が今度も開戦の合図になった。

フィーネが纏うのは「ネフシユタンの鎧」。かつてクリスさんも纏っていた完全聖遺物だ。

再生と鞭による攻撃を得意とする中近距離タイプ。

直線的に迫る鞭を躲し、二本目も躲した、その瞬間一本目の角度が急に曲がり、背中から突き刺さる。

「魔人特有の身体強度も底が見えたな…」

フィーネは身体の損傷を無視して迫るわたしを見ても余裕そうだ。

鞭を引き抜いてそのまま投げ飛ばそうとするが蛇のように這い寄るもう一本に邪魔をされた。

…そもそも、今現在は借り物とはいえ魔人の肉体に傷をつけた…コイツっ！

「一体ここでどれだけ喰った?!」

「別にここだけではない。今までの集積だ。小賢しい者共があまり馳走を残してくれんでな。少しノイズで補っている。」

やはり、間違いない、コイツ、エイワイニカイト永劫破壊を使ってネフシユタンと融合している…!

「いい加減鬱陶しいな…そこで、這いつくばっている。」

鞭に手を弾かれ、顔面に向けられた拳を腕で受けるとわたしは後ろに一步、二歩と下がってしまった。そしてその隙を見逃してくれる筈もない。

だがその瞬間、精神に強い「揺れ」が来た。

ふと、笑みがこぼれる。

やっとですか。待っていました。

崩れた体勢のままフィーネに蹴り飛ばされたわたしは、海に落ちて行くような感覚を覚えて、意識を暗転させた。

side 立花響

未来からの通信、その内容を聞いて急いでリディアンに戻ってきたわたし達か見たのは、全てが終わったあとの残骸だった。

「未来……みんな……」

叫んで問いかけても、声は返ってこない。

思わずその場に頽れる。

わたしが……リディアンを……未来に……守るって……

纏まらない思考の中、わたしの耳はかろうじて翼さんの声を捉えた。

「桜井女史……！」

翼さんの視線の先に、確かに了子さんがいた。

「フィーネ！お前の仕業か！」

クリス……ちゃん……？だって、その言い方じやまるで……

すると何が面白いのか笑い始める了子さん。

「そうなのか……？その笑いが答えなのか……！桜井女史！」

「アイツこそ……アタシが決着をつけなきやいけないクソツタレ。フィーネだ！」

その言葉の後、了子さんは眼鏡を外し、髪を下ろした。

そして纏いし鎧はネフシユタン。

それを見て尚、わたしは信じられなかった。

「嘘ですよね！そんなの嘘ですよね！だって了子さん、わたしを守ってくれました！」

「アレは『デュランダル』を守っただけの事…希少な完全状態の聖遺物だからね…」

「嘘ですよ…了さんがフィーネと言うのなら、じゃあ、本当の了さんは？」

その後ファイ…了さんが語るには、『桜井了子の身体』はもうなくなって、精神はもう12年以上前に置き換わったのだ…と。

超先史文明期、彼女は巫女をしていたらしい。

それこそが、『フィーネ』なのだ…彼女はそう語った。

そして技術を発展させ『転換期』とされた時代に必ず立ち会って来た…らしい。

「シンフォギアシステム…」

「そのような玩具…為政者からコストを捻出するための、副需品に過ぎぬ…まあ、その点
エイワイヒカイト
永劫破壊というのは便利だな。」

「なんだと…？ 貴様…ヴァイス女史をどこへやった？」

翼さんが訝しむ。 そうだ…ヴァイスさんは何処に…

「貴様らも存外に節穴な目をしているのだな。 見ろ。」

そうやって親指を傾け、ある一点を示した。

そこには…

「ヴァイスさんッ！」

腹部に暗い穴を空け、壁にもたれ掛かるようにして動かないヴァイスさんの姿。

でも、心なしか…髪が色を取り戻している気も…？

「抗えど覆せぬが運命なのだ…所詮は小遣い稼ぎの道具だったのだが…哀れなものだ。」

「お金…？どうして…そんなもの…」

彼女は声高に叫ぶ。

「そう、全ては『カ・デインギル』のため！」

そして、突如地面が大きな揺れに襲われ、地中から長大な塔がせり出して来た。その威容に圧倒される。まさに『天を仰ぐ程の塔』だ。

「これこそが、地より屹立し天にも届く一撃を放つ、架電粒子砲『カ・デインギル』！」
「コイツで、バラバラになった世界が一つになると…？」

「ああ…今宵の月を穿つ事によってな…！」

「月を…?」

「穿つと言ったのか!？」

「なんでさ!？」

彼女が語る理由は、〃あのお方〃、〃バラルの呪詛〃という抽象的だったりしてよく分からない言葉だらけで、それを了子さんと言っているのも、理解し難くて。

彼女曰く月が不和の象徴であるのは月こそが〃バラルの呪詛〃の源であり、だからこそそれを砕く。と。

そして、塔が光り始めた。わたしでもわかる。エネルギーの充填が始まった。

「呪いを解く…?それは、お前が世界を支配するってことなのか…?安い…安さが爆発し過ぎてる!」

「永遠を生きる私が余人に歩みを止められることなど有り得ない。」

「Balwisyall nescell gungnirt ron」

「Imyuteus amenohabakiritron」

「Killter Ichaivalt ron」

クリスちゃんが先制攻撃。

高みに立っていた了子さんを引きずり下ろした。

そこに、3人で突撃する。

了子さんを…止める！

三者三様の鎧を纏い、相対するは悠久を生きる者
そして、魔人は目覚めの刻を迎える。

第二十四話 繋がる祈り

side 小日向未来

「よかった…！みんなよかった…」

緒川さんが倒した壁の先には、安藤さん、寺島さん、板場さんが居た。彼女らは響の次に仲の良い友達だ。

生きていて、よかった…

二課の人達が各々進捗を報告しながら作業を進める。

「ヒナ、この人達は？」

「あ、それは…」

「我々は特異災害対策機動部。一連の事態の終息にあたっている。」

「それって…」

「政府の…」

心配そうな板場さんと安藤さん。

“政府機関”に疑念があるのかもしれない。

「モニターの再接続完了！こちらから操作できそうです。」

「響！」

繋がった先には戦う響。そして、あの時いなくなってしまったクリス。

「これが…了子さん…う…ツ！ヴァイスさんも…！」

あおいさんの見つめる先には、腹に穴を空けたヴァイスさんがいた。

「どうなってんの…こんなのまるでアニメじゃない…！」

「ヒナは、ビツキーの事知ってたの…？前にヒナとビツキーがケンカしたのって…」
「そっか、これに関係することなのね。」

「ごめん…」

結局、私も隠し事してたんだな…私を心配してくれる人達に。

視線をゆつくりとモニターに戻した。

今はただ、不安はある。

でも、今はただ戦う人達を信じて…

s i d e 雪音クリス

私が放った腰の多連装ミサイルは全て切断されちまった……
だが、時間は稼げた。

3人でアイコンタクトを取る。
どちらも、言いたい事を理解したらしい。

まあ、少し推理が足りないかもしれないけどねえけどな。

爆煙に突っ込み、フィーネを引き付けているであろう2人を信じてギアにエネルギー
を込める。

過剰に溜め込む必要はない。

そもそもフィーネ相手に長々と時間を稼げるとも思えねえ。

ミサイルを2発具現化する。

「本命は、こっちだ！」

フィーネ自身を狙ったように見せかけた一発目。

そして…

「ロックオンアクティブ…！スナイプ！」

カ・ディングルとやらに2発目をぶっぱなす！

「デストロイ！」

フィーネがミサイルに気を取られている間に、1発目に向けて跳躍。そのまま飛び乗って高度を上げる。

上昇を続けて…詳しい高度が分からなくなった頃。
ミサイルから飛び降りた。

重力に引かれるにしても、まだ時間はある。

清々しい気分ってやつか…？

悪くねえ…！

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l」

「E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l」

腰部ブースターからプリズムが展開される。

でも、あいつら…怒るかもな…

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l」

更に、拳銃型のギアを展開。そのままエネルギーをプリズムに通して増幅していく。

「E m u s t o l r o n z e n f i n e e l z i z z l」

増幅されたエネルギーによってギアが拡張される。

でも、やっと「夢の叶え方」を見つけたんだ。

エネルギーは収束し、砲身より放たれた一撃に寄り集まっていく。それは大きな束と
なつて、カ・デインギルの砲撃と衝突した。

ギアはボロボロ、私の身体も、似たようなもんか…

でも、今だからこそわかる事もある。

私はずっと、パパとママの事が好きだった。

だから二人の夢を引き継ぐんだ…

パパとママの代わりに歌で平和を掴んでみせる…
私の歌は…そのために…!

直後の衝撃に、私の意識は塗りつぶされた。

side 立花響

その「終わり」を見て、地面に倒れ込んだ。

「そんな…せっかく仲良くなれたのに…」

「こんなの…嫌だよ…嘘だよ…」

クリスちゃんの落ちてくる姿がフラッシュユバツクする。

悔しさに拳を握った。涙が溢れて止まらない。

「もつとたくさん話したかった！話さないと…ケンカすることも…！もつと仲良くなる

事もできないんだよ……！」

心臓の鼓動が大きくなる。

「クリスちゃん、夢があるって……でも、わたしクリスちゃんの夢聞けてないままだよ……！」

「自分を殺して、月への直撃を阻止したか。ハッ、無駄な事を。」

怒りで焦点が定まらない。

全部……壊セ……

「見た夢も叶えられないとは……とんだ愚図だな。」

コワセ……

「笑ったか……！命を燃やして大切な物を守ることを……！お前は、無駄と、せせら笑ったか

！
」

コワレロ……！

「それが……夢ごと命を握り潰した奴の言う事かああああ！」

何かが、途切れた。

s i d e 風鳴翼

「立花……！おい、立花！」

突如身体を黒く染め、咆哮する立花。

こちらの声も届いていない。

最後に見たアイゼン女史すら思わせるその姿は……

「融合した GANG ニールの欠片が暴走しているのだ。制御できない力にやがて意識が塗り固められていく。」

その言葉に思い出されるのは在りし日の一幕。

桜井了子^{ワイネ}は、立花と GANG ニールの融合が進んでいると言っていた。嬉しそうに。

「まさかお前……立花を使って実験を……!?!」

「実験を行っていたのは立花だけでは無い。見てみたいとは思わんか? GANG ニールに翻弄されて、人としての機能が損なわれていく様を。」

その外道とも言える魂胆に絶句する。

「お前は、そのつもりで立花を……奏を……!」

フィーネに飛びかかる立花。

しかし、一度も有効打を入れられず、鞭で弾かれた。

「立花！」

「最早……人に非ず……人のカタチをした『破壊衝動』……！」

何故の苛立ちか、再度立花はフィーネに飛びかかった。

しかし、鞭を使った障壁を形作ったフィーネは猛獣の如き立花の猛攻を弾き飛ばした。

「しまったな……力を入れすぎたか……」

再度飛びかかる立花。

またしても攻撃を防がれる……事は無かった。

フィーネは防ぐことをしなかったからだ。

立ち上る土煙を見て困惑が勝っていると、

煙が晴れた先には身体が中程で二つに割れたフィーネがいた。

それでも尚続けようとする立花に、叫ぶ。

「もうよせ立花！これ以上は聖遺物との融合を促進させるばかりだ！」

私の言葉に反応して、こちらを向く立花。

しかし依然として元に戻る様子はない。

こちらに飛びかかる立花。

咄嗟に左にいなしたが：ギアを少し持っていかれた。

獣の様相のまま地に下りた立花。

そのまま直線的な跳躍で私に躍りかかる。

「立花！」

side 小日向未来

「どうしちゃったの響！元に戻って！」

外では轟音が響くまま。

今も、黒くなった響と、翼さんが戦っているのだろう。

「もう終わりだよ…わたし達…」

泣きながら声をあげる、板場さん。

「学院がメチャクチャになって…響もおかしくなって…！」

「終わりじゃない！響だって私達を守るた「アレ」が私達を守る姿なのツ!?」…」

うん…確かに、そうかもしれない。でも…

「私は…響を信じる。」

“黒いモノ”に飲み込まれまいと、抗ってる。

立花響は、優しい女の子なんだって、信じてる。

「私だって…響を信じたいたいよ…！この状況が、なんとかなるって信じたいたい！でも…でも…！もう嫌だよ！誰かなんとかしてよ…！死にたくないよ…！響…！」

板場さんの悲痛な叫びに應えるように、声が響く。

「ごめんね…何もできなくて。避難だけさせて、私は何もしなかった。助けになれなかった。」

ここにいる人の声じゃない。しかもこの声…！

「ヴァイス君…いやアイゼン君か…」

「すみません、司令…遅く、なりました。」

「まったく…待たせやがって…」

「戻ってきたんだ？やれるな？」

「勿論です。私も司令もお互い了子に穴空けられてるみたいですから。その分ぶん殴ってきます。響は…一応やりますが詰めはベテラン奏者に任せます。しばらく離れてた私では効果が薄いでしょうから。」

「相変わらず凄まじい精度の反響定位だな…響君の件も了解した。行つてこい。」

まるで日常の一幕のようなテンポで進む会話。

一瞬今何が起きているかを忘れる程だった。

「貴女なら、貴女なら…！なんとかできるんですか!？」

絞り出すような叫びに、返す言葉は苦々しい。

でも、どこか祈るような声音で。

「絶対できる…とは言えない。でも、だからこそ信じて欲しい。」

「え？」

「立花響っていう女の子が、破壊衝動になんか負けないぐらい、優しい女の子なんだ…つて。そしたら後は私と響とみんな、勝つ。」

「二人じゃ足りないなら二人で。まだ足りないなら四人で、八人で、もつともつと多い人達で。思いを言葉にすれば…きつと届く。助けられる。」

「そんなの…アニメじゃないんだから…」

「アニメとオカルトは世界を救う…多分。」

それを聞いた板場さんが笑う。

それは、気の抜けた返事の奥底に“思い”を感じたからだと思う。

「ふふっ…多分って…テキトー過ぎでしょ…

お願い…します。響を、私達の友達を私達と一緒に助けてください。」

「うん。わかった。」

通信が切れた。

でも、さっきまでの不安は少し和らいだ。

彼女が信じる物を、私も信じてみようと思う。

偽りの魔人は目覚めた。

しかして、檻となる夢は如何様であつたか。

第二十五話 夢から醒めて

一歩歩いた。

燃える街、崩れる建物。

その中で、黒い風が暴れている。

二歩歩いた。

黒い風は周りの人々に触れ、増え、その場には亡骸のみが残る。
風が止む事は無い。

三歩歩いた。

動かせると思った身体は動かない。
風は私の制御を外れ、吹き荒ぶばかり。

私は何がしたかったのだろう…？

とある世界線、1945年のドイツ、ベルリンにて

私、アイムート・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼンはドイツ系貴族の生まれだった。

幼少の頃は双子の姉の後ろでウジウジしているだけの子供だった。
何もしたく無かった、とも言えるだろう。

少しだけ成長し将来に悩んだ私は結局姉であるベアトリスと共にドイツの軍に志願した。

この先起こる事を姉に一切伝えないまま。

そして、私は姉とその上官と共に「その瞬間」に立ち会った。

「黄金の獣」 ラインハルト・ハイドリヒ

そして、

「水銀」 カール・エルンスト・メルクリウス

“Dies irae”という世界で無限に等しい回数繰り返された、しかし決定的な出会い。

私はその事実には恐怖した。

それは運命からは逃れられないと宣告された瞬間だった。

『Dies irae』

元々はPCゲームだったこの作品を私が“一度目の生”で目にしたのは14歳、某思春期に発症する病気の患者の一人に私も名を連ねていた頃だ。

当時の私は病状を加速させる作中の詠唱に心躍らせる、ただの学生だった。

緩やかな滅びに向かう国で、無為に創作物を貪る権利を与えられていた。ただの学生。

“一度目”の最期に思ったことは、なんだったか、もう覚えてすらいないが：

ただの学生としての“一度目”が終わったのがその頃である事も確かだ。

“二度目の生”に話は移る。

突如として目覚めた私は、ナチスのファシズムが全盛の時代。

一人の少女として目覚めた。

そして、永劫の呪縛、その断片が脳に、もつと言えば魂に叩き込まれた。それは、云わば“本体”：いや“先代”とも言うべき私が彼女が生きた永劫だった。

目を覚ましたのは、一年後。

当時14歳。奇しくも“一度目”で死んだ年齢だった。

人が変わった様に塞ぎ込んだ私を親は半ば見捨てた。

世話はされる。会話もする。教養だつて身につけた。だけど、両親の目は姉から私に向く事は無かった。

嫌悪：いや忌避されていたのだろう。

娘に愛情を注いでいた両親は“中身”が変わってしまったことに直感で気づいたのだと、今ならわかる。

時代が違えば異端審問モノだ。

そうして成長する内、私は幾度となく見た永劫の通りの人生を辿って行った。

踏み外すこと自体はできた。

しかし、その一步が踏み出せなかった。

簡単で当然な事だが：私の知る『Dies irae』原作本編に

アイムートという人物は存在しない。

当然“一度目”の動画サイトで見た各ルートの展開など未来予知に殆ど意味を成さ

なかった。

そして、行間を全て記している物語などない。

それからは、誰と話し、何をするのが世界にいかなる結果を生むのか、手探りで探して、いやそのフリだけして結局何も変えなかった。

押し付けられた記憶も宝の持ち腐れだった。

ただ何もしなくても、私を異端視する人達の声だけは増えた。

端的に言うなら、幼かった。

という事なのだろう。

その中で唯一私を心配してくれる姉に、私は依存した。

共に軍に入り、姉は敬愛の対象を見つけた。

エレオノーレ・フォン・ヴェイツテンブルグ。
当時はまだ大尉だったか。

私のような依存・崇拜ではない。姉のソレは、真に“敬愛”だった。

姉は積極的に意見を具申し、かの女傑が道を踏み外したならば、それを正道に引き戻そうとした。

その全て無駄であることを、私は、知っていた。

1945年、ドイツ、ベルリン。

炎に包まれた街は地獄の様相だった。

聖^黄槍^金十三騎士^の団^の総領^がが私達に出した指令は、『同胞^{スワスチカ}を聖櫃^を解放の生贄とせよ』だった。

とうとうこの日が来たか、という思考だけが私の頭を支配していた。

対照に、姉は絶望していた。

軍人として敬愛していた人物がその本懐を忘れ、同胞を殺しているのを見て姉のような人物に絶望するなど言う方が無理のある事だった。

聖櫃に取り込まれ、解放の贄となる魂はその後、無限の闘争を強いられる。原作ではこれを避けるため、姉は断腸の思いで両親を殺した。

ただ、私は姉に親殺しの罪過を背負って欲しくなかった。

正確には、私が依存できる人物で、高潔な人であつて欲しかった。私が親を殺したの
はそんな、醜い理由だった。

燃えるベルリンを歩いて、歩いて、燃え盛る先に居たのは、
姉さんの成れの果て
トバルカインだった。

『^{トバルカイ}死を喰らう者』

黒田卓に所属する一人の男の呪いが生み出し、成った、肉体と魂の集合体。代を追うごとに巨大化する生きる屍。

その始まりも私は見ていたし、初代が呪いに喰われるのも予想……と言うより知っていた。

二代目が死と呪いを天秤にかけて、肉塊に取り込まれる事も、知っていた。

でも結局、何もしなかった。

その傲慢の象徴が巡り巡って、我が姉を取り込み、私の前に立つ事のなんと皮肉な事か。

何も変える事をしなかった、私の罪。
その結果をまざまざと見せつけられた。

ゆつくりと、私に迫るトバルカイン。

そうだ、私を裁いてくれ。

貴女にはその権利が…

振り下ろされた大剣は、私には当たらなかつた。

「え…う…」

確かに、本気のトバルカインと比べればあまりにも遅い斬撃だつた。それは確かだ。でも、直撃コースだつたそれを回避できたのは…

“私が避けたから”だつた。

「ハッ…ハハハッ！なんだソレは！？口で偽善を言っておきながら、結局何も変わってない！生き足掻いて、その先にッ！何があると言うんだ…！」

涙は出ない。もう枯れた。血は流れない。傷つくことすらない。
魔人対人間は、いつだって一方的だ。

私はそうやってこのベルリンで虐殺をした。

裁かれるべきだ。

許されてはいけない筈だ。

惨たらしい最期を迎えるべきだ。

なのに…

「私は、死にたくない…生きていたい！」

トバルカインの斬撃を避けながら、叫んだ。

そうだ：「一度目」の最期、私は確かに「生きたい」と願った。

恐らく、それが私を形作る根幹。

どうしようもない、私が生きる理由。

故に、私の本当の渴望は

生きる権利を奪われたくない

「私は、生きていて…いいですか？」

聞くのは、魔人連中ではない、姉でもない。

三度目の生で、出会った人々。

彼ら彼女らは何も言わない。

選択は、私に委ねられた。

ならば…

「魔人らしく、己の渴望に従って、自由にやるとしよう。」

まずは、この下らない茶番を終わらせる。

私は、永劫破壊の詠唱を唱える。

形成

Y e t z i r a h —

命の価値を指し示せ

R o m h a t g e s p r o c h e n

生み出されるのはルーン文字の刻まれた黄金の剣。

連怨・共喰の魔剣、その剣を身に宿し、融合した魔人が生み出す己のカタチ。

生み出した剣で斬撃を止める。

向こうは「創造位階」

こちらは、ようやく「形成位階」。

本来なら黒田卓に属する魔人に半端な形成で歯向かうなど自殺行為。

しかし、相手がトバルカイントバルカインであれば、その前提は完全にひっくり返る。

共喰い。連怨・共喰の魔剣の根幹にある概念。

数多の同胞の血を吸った「事実」と「想念」が私に力を与える。

押されていた私の魔剣は、徐々に、トバルカインの大剣を押し込んでいく。

形勢不利を悟ったか、後ろに下がろうとする。

本来、トバルカインに思考らしい思考はない。
下がるという事も指示されなければしないだろう。

ああ…本当に、茶番だ。

即座に追いつき、大剣を叩き切る。

所詮、私と聖遺物が生み出した贗作。

姉さんの剣戟は…

「もっと美しかった！」

大上段、一閃。

私はトバルカインを本当の意味で屍に変えた。

切り裂かれた肉の奥には何も無い。

真つ黒な虚無。

瞬間、世界が崩れた。

引きこもりの時間は、終わりだ。

目の前には、ヴァイス私^{アイズ}がいた。

ボロボロで、今にも消えてしまいそうだ。

「ごめん。全部押し付けちゃった。」

答えは無い。

「貴女のお陰で私は道を選べた。死んだ私にも道が出来た。選ぶ時間ができた。確かに地獄みたいな道のりだったけどありがとうって、言わせて欲しい。私を守ってくれてくれた事も。」

彼女は、私の精神が壊れないようバランスの役割をしてくれていた。高々普通の人間がここまで保ったのは、一重にそのお陰だ。

「行つてきます。」

私は水底から浮上した。

第二十六話 夜明けの旋律

side 風鳴翼

腕部のプロテクターが砕けた。

致命傷こそ防いでいるが…

「ハハハッ…どうだ？立花響と刃を交えた感想は…」

裂けた自らの身体を如何なる技術にてか再生させるフィーネ。

「お前の望みであったな…」

「人の在り方すら捨て去ったと…！」

「私と融合したネフシユタンの力だ。面白かろう?」

すると天を仰ぐ程の塔が光を帯びる。

見間違えでなければ、先程雪音が命懸けで防いだ一撃の二射目。

「まさか……!」

「そう驚くな……カ・デインギルが如何に最強、最大の兵器だとしてもただの一撃で終わってしまうのでは兵器としては欠陥品。必要がある限り何発でも撃ち放てる……」

「そのために、エネルギー炉心には『不滅の刃』デュランダルを取り付けてある……それは尽きることの無い無限の心臓なのだ……」

恍惚とした表情を浮かべるフィーネ。

だが……

「だが、お前を倒せばカ・デインギルを動かす者は居なくなる……!」

立ち上がる立花。そこに、未だ理知の光は見えない。
しかし…

「立花…私はカ・ディングルを止める…だから…」

立花に切っ先を向け、仮初の敵意を放つ。

立花は私に飛びかかり、それを私は…

「うん…うん…」

刃を地に刺し、無手で受け止め、抱きしめた。

胸に立花の手が少し刺さった。

それを引き抜く。

「これは…束ねて繋げる力の筈だろ…？」

小刀を一本取り出し、立花の影に放つ。

「影縫い」、かつて雪音にも使った技だ。

だが、今度は倒すためではなく、守るために。

立花の動きが止まったのを確認して、離れ、ファイネの方へ歩む。

「奏から継いだ力をそんな風に、使わないでくれ…」

言葉は、もうこれで十分な筈だ。

更に進んで、止まる。

「待たせたな…と、言いたかったんだが…」

「なんだと…?」

すると私の隣に一人の女性が降り立つ。

「お久しぶりです。アイゼン女史。」

「そうだね……久しぶり、翼。そして、戻ってきたよ、了子。」

sideアイゼン

頃合いを見計らって、私も了子の前に現れた。
響には、結局何も出来なかった。

少し悔しい。

^{ウアイス}
私の記憶から、今何が起きたかは察してる。
クリスがいないのも、そういう事だろう。
しかし、この後の事は考えてある。

そのために…

「貴様…あれ程砕けた心で、戻ってきたと…!？」

「みつともなく泣き喚いてね。まあ、生き汚いのは私の十八番なんだ。許してよ。」

了子を、止める。

そのまま翼とアイコンタクトを取る。私の意思が伝わり、翼は了子に背を向けた。

そしてそのままハイタッチ。

さあ、バトンは渡された。

黒い風が強く、強く吹き荒ぶ。

その風に対して翼が“天の逆鱗”で乗り、加速し、飛翔する。

了子の憎々しげにこちらを見る瞳と目を合わせる。

「魔人同士、仲良くしようか。」

形成

Y e t z i r a h —

命の価値を指し示せ

R o m h a t g e s p r o c h e n

私の詠唱に従い、ルーン文字の刻まれた黄金の剣が現れる。

「『形成位階』だと…!?しかし、それより…ッ！」

驚いている了子の顔面にまずは一発食らわせてやると意気込む。

姉さんの剣術をベースとした、踏み込みで了子に迫る。姉を『神速』とするなら私は

精々『超速』と言ったところか。

それでも、認識は遅れる。黒い暴風で加速し、超速から、神速の域へ。

「グウツ……！」

了子の顔面に左拳を叩き込み、そのまま右で斬り下し。斬り上げ、様々な角度から、連撃を仕掛ける。

鎧の再生能力や鞭での防御では、手数が足りない。

こちらの連撃に押し込まれていく。

更に足払いをかけ、姿勢を崩して、超速の上段。

「舐めるなア！」

鎧から放たれた鞭を見て剣を捨て慌てて避ける。しかしその先には“天の逆鱗”を踏み台にカ・ディングルへと飛び立つた翼が。

「まず…ツ！」

一瞬だけ気を取られた瞬間に、強烈な蹴りが私の腹部を襲う。

吹き飛ばされかけけるが、地面に剣を刺して滞空。そのまま重力に引かれ地面へ降りから、姿勢を安定させる。

翼は…ツ…！また、私は…

鞭に叩き落とされた翼を見て一瞬諦めかけたが、そんな中翼は再度剣（しるぎ）を燃やして飛び立った。

翼は、諦めなかった。

その跳躍を再度邪魔しようとした了子を見てその横っ腹を蹴り飛ばした。

翼は持てる力で、カ・ディングルを破壊。響に後を託した。

天を仰ぐ程の塔はここに爆散した。

聖遺物「天羽々斬」の信号消失と引き換えに：

side 立花響

目が覚めた時、全ては手遅れだった。

翼さんは、爆発の光に巻き込まれ、そのまま見えなくなつた。

翼さんが影縫いのために残した小刀も、消滅した。

向こうでは、ヴァイス：いや、アイゼンさんかな…了子さんと戦つてる…

「どこまでも忌々しい！月の破壊は、『バラルの呪詛』を解くと同時に、重力崩壊を引き起こす…」

アイゼンさんは振るわれる鞭を、金色の剣でいなし、躲し、逸らしている。

「惑星規模の天変地異に人類は恐怖し、狼狽え、そして聖遺物の力を振るう私の元に帰順する筈であつた…！」

鞭と剣は幾度となくぶつかり合い、その合間に、了子さんがアイゼンさんに叫んでる
…

「それをお前は、お前達は…！」

「その勝手な理屈で一体どれだけ…！」

あまりのぶつかり合いに、私の身体も吹き飛ばされた。

翼さん…：クリスちゃん…：2人共もう居ない…：学校も壊れて…：みんな居なくなつて…
わたし…：わたしはなんのために、なんのために戦つて…

「まだ、終わってないよ。」

アイゼン…さん…？

「絶望するにはまだ早いよ、響。」

「響が繋いできた手は、絆は、ちよつとやそつとじや壊れやしない。信じようよ。まだ希望はあるんだって。」

それは…

「余計な事を！」

こちらに迫る了子さんと、迎え撃つアイゼンさん。

わたしは…

side 小日向未来

寺島さん、安藤さん、そして、板場さんと一緒に、何かできないか考えていた。

それでも、埒が明かないまま、翼さんの聖遺物、〝天羽々斬〟の信号が消失。

私達は、悲嘆に暮れていた。

そんな時だ。

緒川さんが、周辺のシエルターに居た生存者の人達を連れてきた。そしてその中に居た、一人の女の子。

かつて、響に助けられた、と。

その時女の子が言った〝応援〟という言葉。

その言葉で思いつく。

私達の安否を知らせる事。それそのものが応援に、響の力になるのではないかと……と。

そして、朔夜さんからもたらされた可能性。

学校施設への電源接続。

そして、そこから校舎のスピーカーを使うという手段。

そして、私、板場さん達と、緒川さんで電源接続に必要な切り替えレバーがある場所へ来ていた。

シャッターが中途半端に閉まり、緒川さんでは通れそうにないけど…

「私達が、行こう。大人達が無理でも、私達なら…！こういう時、アニメなら身体の小さいキャラが大活躍するところなんだから！」

「それはアニメの話じゃない…！」

「アニメを真に受けて何が悪い！アニメ上等！ここでやらなきや、私はアニメ以下だよ！…このままじゃこの先、響の友達だって、胸を張って言えないじゃない！」

「ナイス決断です。私もお手伝いしますわ。」

「だね…：ビツキーが頑張ってるのに、その友達が頑張らない理由はないよね。」

「みんな…！」

その後、電源室に入った私達は組体操の要領で、私達自身が板場さんの足場になって、その上に乗った板場さんがジャンプ。制御スイッチを切り替えた。

これで…：待っててね、響！

side Re 立花響

アイゼンさんと戦う了子さんは言った。

昔、人を創った存在の巫女だったのだと。

そしていつの間にか、創造主を愛していたのだと。

しかしその思いは「バラルの呪詛」によって告げられず。統一言語を奪われた人は争いを始めた。

胸の内の思いを伝えるための数千年。

でも、だからって…

「だからと言って、それで！」

再度ぶつかる2人。土煙と、黒い風が吹き荒れる。

「是非を問うだと…？恋心も知らぬお前が！」

「そうか…恋心、私には理解できない感情だね。羨ましいよ。人に友愛以上の感情を抱

ける貴女が。」

「なんだと…？」

「そういう点で言えば、了子は普通の人間なんだろうね。」

更に幾度もぶつかると二人、一進一退、傷を負っても再生する了子さんと、傷を負わないよう全て避けるアイゼンさん。

「貴様ツ…！ああ、もういい、私に並び立つ者など要らぬ…新霊長は、私一人だけでいい。」

そこに聞こえる、歌。

「耳障りな…！」

アイゼンさんが、小さく微笑んだ気がした。

皆んなの、未来の声が聞こえる。リディアンの校歌に乗せて。

皆んな、生きてる…！

「どこから聞こえてくる…この、不快な…歌！歌…だと…！」

「よかった…わたしを支えてくれてる皆んなは、いつだって傍に…」

「皆んなが歌ってるんだ…だから…まだ歌える…！」

「頑張れる！」

「戦える！」

フオニツクゲイン
歌の力が満ちていく。

ギアが展開されていくのを感じる。

一人の歌じゃない。皆んなの、皆んななどの歌だから、いつもより暖かい…

「まだ戦えるだと…何を支えに立ち上がる…!?何を握って力と変える…!?鳴り渡る不快な歌の仕業か…?」

「そうだ…お前が纏っているモノはなんだ…?心は確かに折り砕いた筈…なのに…何を纏っている…!?ソレは私が作ったモノか…?お前が纏うソレは一体何なのだ…!?」

ギアを纏って、*“飛翔”* する。

そうだ…わたし達が纏うのは…

「シンフォギアアアアアア!」

第二十七話 永劫を凌駕する刹那

sideアイゼン

「皆んなの歌声がくれたギアがわたしに負けない力を与えてくれる。」

「クリスちゃんや翼さんにもう一度立ち上がる力を与えてくれる…歌は、戦うための力だけじゃない。命なんだ。」

「高レベルのフォニックゲイン…コイツは2年前の意趣返し…」

「んなこたあどうでもいいんだよ！」

「念話までも…限定解除されたギアを纏ってすっかりその気か！」

ソロモンの杖を振るい、ノイズが召喚され、瞬間、炭化して消えた。

「貴様……ッ！」

私はただ静かに見つめるだけ、しかしそれだけで伝わった筈だ。

“私の間合いでは半端なノイズは存在すら許されない”と。

【いい加減、芸が乏しいんだよー】

【世界に尽きぬノイズの災禍は、全てお前の仕業なのか？】

優位を勝ち誇るように、了子は言った。

【“ノイズ”とは、バラルの呪詛にて統一言語を失った人類が、同じ人類のみを殺戮するためだけに生み出した生体自立兵器……】

【人が、人を殺すために……】

【バビロニアの宝物庫は、扉が開け放たれたままでな…そこからまる美出る十年一度の偶然を私は“必然”へと変え、純粹に力と使役しているだけの事…】

【また訳わかんねえ事を…！】

了子が杖を振り上げる。

「落ちろオ！」

緑色の光は、“死の誘引”の効果圏を素通りし、上空で分化。
街中に降り注ぎ大量のノイズを呼び出した。

街の全てが大小様々なノイズで埋め尽くされたように見える。
裏手の山々さえも。

「あちこちから…」

「よっしゃあ！どいつもこいつも、まとめてぶちのめしてくれる！」

クリスが一足先にノイズ掃討へ向かう。

翼も行こうとしたが、響が声をかけた。

「私…翼さんに…」

恐らく暴走していた時の話だろう。

「どうでもいいことだ。」

そう言って、微笑む翼。

「立花は私の呼びかけに応えてくれた。自分から戻ってきてくれた。自分の強さに、胸を張れ。」

「翼さん…」

「一緒に戦うぞ、立花。」

「完全に除け者だね。まあいいけど。」

「すみません、アイゼン女史。お願いできますか？」

「了解。私の役目は、了子が追加でノイズを呼び出さないようにすること、でしょ？」

頷くと、翼は街のノイズに向けて飛翔。

響もそれを追った。

「戦力分散は愚計だぞ？」

「分散、各個撃破が必要な時だってあるけど…ね！」

迫る鞭を避け、超速の斬り上げ。

しかし、複雑に折れ曲がる鞭に舌打ちしつつ、左に転がり、剣を使って後退する。

あのまま斬り上げを敢行していれば閉じ込められ削られていたに違いない。

ノイズの召喚光を目眩しとして使いつつ、運良くノイズが残留すれば一瞬でも壁になる。

厄介な…爆音からして、翼達のノイズ討滅は順調に進んでいる。

私が了子を抑えれば…

そう思った私が見たのはソロモンの杖を抱えるようにして中に浮かぶ了子。

初めて見るモーションに対応が遅れる。すぐさま駆け出そうとして、その光景に目を細めた。

街中に広がったノイズの残党が了子に向かってい収束していく。

赤紫の粘体となって重なり、更に召喚光が上空から分化を繰り返す、それすらも収束

していく。

「ノイズに、取り込まれて…」

こちらに戻ってきた響が呟くが、少し違う。
逆なのだ。

「そうじゃねえ、アイツがノイズを取り込んでんだ！」

赤紫の粘体が伸展し、上空にいる響達を攻撃する

「来たれ！デュランダル！」

「…ツ！マズイ…！」

現れたのは、
“赤き竜”

その頭部にデュランダル由来のエネルギーが収束している。

「させるかッ！」

死の誘引を最大展開。装甲がゴリゴリ削れるが、それと同速で再生している。

ノイズ由来でも、魔人と融合している故に効きが悪いのだろうが…それにしても異常な再生力だ。

エネルギーが臨界に達する。

照射されるエネルギー兵装と街の間でエネルギーを押しとどめ、上方に弾く。しかし、上空に曲げきれなかったエネルギーが街に直撃、炎上する。

「逆鱗さかひづらに触れたのだ…相応の覚悟はできておろうな…？」

私、翼、響、クリスに向けて第二射が放たれた。

先程より臨界に達するのが早く、私でも避けるので精一杯だった。

クリスが反撃にエネルギー兵装をお見舞いしてやると、了子が姿を見せていた部分が完全に閉じ、攻撃を遮断した。

更に、羽のようなパーツもエネルギー兵装と化し、ビームを放ってくる。

クリスはこちらの対処で手一杯だ。

翼、響がそれぞれ全力で攻撃しているが、殆どダメージを与えられず、しかも即座に再生される。

私の一太刀も、翼達よりは効くが、五十歩百歩だ。

【いくら限定解除されたギアであっても、所詮は聖遺物の欠片から作られた
完全聖遺物に対抗できるなどと思うてくれるな?】
玩具

それを聞いたクリスと翼は閃いたらしい。

この場合、我々にも使える完全聖遺物が私以外にもう一つある。

【聞いたか？】

【チャンネルをオフにしろ！】

【もっぺんやるぞ…！】

【しかし、そのためには…】

私と響を見る翼。

「抑えは私がやる。思いつきりぶちかましてこい！」

「…やってみます！」

エネルギー兵装の照射が再開され、私達は三手に別れる。

「ええい、ままよー！」

「私と雪音で露を払う！」

「手加減無しだぜ？」

「分かっている！」

迎撃網を掻い潜り了子に接近するクリス。

その後方から一際大きなアームドギアで“蒼ノ一閃”を放つ翼。

私がそこに死の黒風でへこみを穴に変える。

そこにクリスが突入。

粘体の中、了子の眼前でエネルギー兵装をフルバースト。内部から破壊していく。

了子は再生して場所がないため、クリスを外に弾き飛ばそうとして、攻撃を遮断していた扉を開けてしまった。

眼前にはアームドギアを振りかぶる翼。

たまらずネフシユタンの鎧の鞭を用いた盾を張るが防ぎ切れる訳が無い。

了子を「黙示録の赤き竜」たらしめていたエネルギー源、デュランダルが手元から離れた。

「そいつが切り札だ！」

翼の言葉に驚いた顔をする響。

「勝機を溢すな、掴み取れ！」

クリスの拳銃型アームドギアの射撃で弾かれ、響へと近づいていくデュランダル。

響が、ソレを掴み取った。

s i d e 立花響

デュランダルを掴んだ瞬間、ワタシが黒く染まっていく。

ふと、大きな音が聞こえた。

「正念場だ、踏ん張りどころだろうが！」

そう叫ぶ師匠。

「強く自分を意識して下さい！」

緒川さん。

「昨日までの自分を！」

朔夜さん。

「これからなりたい自分を！」

あおいさん。

皆んな…！

「屈するな立花。お前が構えた胸の覚悟を私に見せてくれ…！」

翼さん…

「お前を信じ、お前に全部賭けてんだ！お前が自分を信じなくてどうすんだよ！」

クリスちゃん…

「貴女のおせつかいを！」

安藤さん…

「アンタの人助けを！」

板場さん…

「今日は、私達が！」

寺島さん…

「姦しい…！黙らせてやる！」

わたし達に迫る触手は、
“黒い風”に阻まれてこちらに來れない。

「これは…！グッ！」

「生物限定の超重力場だ！動かないでもらおうか！

…行けッ！立花響！」

黒いモノが少しずつ、大きく…

「響いいいいい！」

そうだ…今のわたしは、わたしだけの力じゃない！

そうだ…この衝動に、塗りつぶされてなるものかあああああ！

「その力、何を束ねた!?!」

「響き合う、皆んなの歌声がくれた…シンフォギアでええええ！」

翼さん、クリスちゃんと力を合わせて振り下ろす。

再生速度を遥かに上回る速度の破壊、これなら…！

掻き出し吐き出せ

a u s f e g e n u n d a u s f e g e n

人の持つ功德なる物を

D a s V e r d i e n s t , d a s M e n s c h e n h a b e n

了子さんの後方に構えていた、アイゼンさんが黒で延展した剣を横薙ぎに振るう。

「これでええええ！」

泡立つ赤き竜の粘体。

そして、二刀の輝きを受けて、次の瞬間、爆散した。

side Re アイゼン

炭の山から了子を引きずり出し、皆の元へ歩く。

「お前…何を…馬鹿なことを…」

「やりたいことを、やりたいだけ。それが今の私のモットーだからね…」

手近な岩に了子を座らせる。

「了子、もう、終わりにしない？」

「私は…フィーネだ…」

「でも、桜井了子でもある。」

軽く舌打ちしている了子の横で夕日を眺める。

「人は、分かり合えないのかな？」

立ち上がり、歩く了子。

「ノイズを作り出したのは、先史文明期の人間…統一言語を失った我々は、手を繋ぐよりも、〃相手を殺す〃ことを求めた。」

「そんな人間が分かり合えるものか…だから私は、この道しか選べなかったのだ…！」

『戦争は闘争の一手段であり、対話の一手段である。』

私が呟いた言葉に、了子が反応する。

「私の持論なんだけどね。大事なのは、一つの手段に固執しないように、皆んなで気をつ

けることだと思うんだ。」

「二人だと、採れる手段は一つだ。手段が一つでは、視野が狭まってしまふ。狭まった視野は他を排斥する。」

「それじゃあ、いつまで経つても分かり合えやしない。」

振り向いて空に向けて鞭を繰り出す了子。

私はその首筋に牽制として剣をあてた。

「私の勝ちだア！」

了子が叫び、地面を砕きながら、己の身体が壊れるのも構わず、鞭を引っ張る。

「月の欠片を落とすツ！」

「私の悲願を邪魔する禍根はここで纏めて叩いて砕く！」

「この身はここで果てようと、魂までは絶えやしないのだからな……聖遺物の発する『ウフヴァアッヘン波形』がある限り私は何度だって世界に蘇る！」

「どこかの場所、いつかの時代で、今度こそ世界を束ねるために……ハハハッ！私は永遠の

一瞬に存在し続ける巫女、 “フィーネ”、なのだア！」

笑い続けるフィーネ。でも。

「ありがとう。了子。」

「…なんだと…?」

「月の公転軌道まで行くのは大変だったから。引っ張ってくれて、ありがとう。」

「貴様ツ！」

「そして、」

「ツ！」

「私の永劫破壊によつて “桜井了子だったフィーネ” の魂は私の中に残留するけど、転

生自体は止められない。だから、見ていて欲しい。」

「…」

「永劫ファイネを凌駕する一撃刹那を。未来に繋がる今の力を。」

そう言って、私はファイネに背を向ける。

元々、ネフシユタンの鎧が壊れた今、魔人としての特質を失い、肉体のみの融合になつた了子は、長くは保たない。

死ぬ前に、言いたい事だけ、全部言っちゃったな。

「軌道計算、出ました。直撃は避けられません…」

藤堯さんの言葉で覚悟が決まった。

私が剣を掲げると明るい光が集まっていく。

奏者達3人の限定解除、及びギアが解除された。

「これは……！アイゼン女史！」

「フォニックゲインを徴収させてもらった。こういうのは、大人の役目。子供はお月見でもしていなさい。」

「ティルフィングは元々王が振るうために作られた“無敵の剣”。故に、ソレは王の権能を宿す……という事か。」

「そういうこと。私はどこまでも傲慢で他人の好き勝手が許せない人間で、私以外の人達にも生きていて欲しいから。」

「そう、か……精々足掻いてみる。」

了子が灰になる音が聞こえる。
見るな。今だけは、見るな。

地を蹴り、中に浮かぶ。

亀裂を無理矢理束ねたような黒翼を開く。

高度を上げて、私は月の欠片を目指す。

掻き出し吐き出せ

a u s f e g e n u n d a u s f e g e n

二翼の状態で空を突き進む。

人の持つ功德なる物を

D a s V e r d i e n s t , d a s M e n s c h e n h a b e n

四翼。

拝参せよ、正しきを捧げし者

Anbeten, Gerichtigkeit anbeten

八翼。

大いなる者を矮小にせんとし

erniedrigend die Großen zu den Kleinen

十六翼。

笑いを以て砕き、踏み潰す

Beim Lachen zerquetschen und trampeln

三十二翼。

敬虔なる者達を火に焚べ、薪とせよ

V e r b r e n n e f r o m m e G l u b i g e z u B r e n n h o l z

六十四翼。

醜悪なる性に割れんばかりの喝采を！

T o s e n d e r A p p l a u s f ü r h s s l i c h e n S e x !

百二十八翼。

全ての翼は開かれた。

いざ。

今までとは桁違いのエネルギーを纏い全速力で月に突貫する。

今の私の到達点。

“制限創造”

これで…

瞬間、月の欠片は木端微塵に砕け散った。

1ヶ月後

s i d e
???

今回の一件は“ルナアタック”と呼ばれ、聖遺物という異端技術を世に知らしめる結

果となった。

しかし、私のやることは変わらない。

皆と共に生きて明日を掴むために。

「アイゼン君！」

「わかりましたよ……しっかり仕事します。」

上の空だった私は司令に言われて作業を再開した。

ノイズは未だ尽きず、災禍の炎は収まらない。

人が一つになる兆候は見えないが、それでも止まることなく進み続ける。

私は、この世界で生きていく。

f
i
r
s
t

s
e
a
s
o
n

F
i
n